

●国際連合大学 2010-2011 年国際教育交流事業●

韓国政府日本教職員招へいプログラム

実施報告書

ソウル市・慶尚南道 昌原市・全羅南道 順天市・慶州市・釜山市

2011 年 8 月 26 日(金) — 9 月 4 日(日)

はじめに	2
1. 実施概要	4
2. 教育機関訪問	6
3. 学校訪問	14
4. スタディツアー	26
5. 所見	30
6. 成果と課題	54
資料	96

財団法人ユネスコ・アジア文化センター[ACCU]

はじめに

財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU：Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO）は、1971 年（昭和 46 年）に設立された財団法人です。以来、ACCU は今日まで、主としてアジア太平洋地域のユネスコ加盟各国の文化の振興と相互理解の促進に寄与するため、文化協力、教育協力、人物交流の分野で協力・支援事業を積極的に展開してきました。

2002 年より、ACCU は、国際連合大学の委託を受け、主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的として、日本政府の拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を実施してきました。2000 年度より文部科学省の委託により、「ACCU・青年交流信託基金事業」の一環として実施されていた韓国教職員招へいプログラムは、同年より「ACCU 国際教育交流事業」の下で開催されるようになりました。当初より、今年で 11 回を数える本プログラムでは、述べ約 1,260 名の韓国の教職員を日本に招へいしました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきました。これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価され、2005 年からは韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして、参加人数を 20 名に倍増、さらに、2008 年には 54 名に増員し、日韓教職員相互交流の更なる発展を目指しています。

2011 年 8 月 26 日から 9 月 4 日に実施された「韓国政府日本教職員招へいプログラム」では、2011 年 1 月に韓国の教職員の受け入れにご協力いただいた自治体や学校の教職員、及び 2012 年 1 月に受け入れていただく自治体や学校の教職員等が参加しソウル市、慶尚

南道（キョンサンナムド）昌原（チャンウォン）市、全羅南道（チョルラナムド）順天（スンチョン）市、慶州（キョンジュ）市での学校および教育文化施設等の訪問を通して、韓国における教育の現状と課題、訪問都市の教育の特徴、及び両国における教育課題の共通点と相違点について学ぶとともに、韓国の教職員、児童生徒との交流を図ることができました。また韓国ユネスコ国内委員会による、「第4回 ESD 日韓教員フォーラム」に出席し、両国の持続発展教育（ESD）への理解を深めることができました。

このたびの訪問が、韓国の教育や文化に対する参加教員の理解を深めることはもとより、帰国後の諸活動を通じて日韓の教員間、学校間の交流のいっそうの発展に役立つよう願ってやみません。

最後に、このプログラムにご支援とご協力をいただきました、韓国ユネスコ国内委員会、国際連合大学、文部科学省、外務省、及び慶尚南道教育庁、全羅南道教育庁、順天教育支援庁、訪問先の学校をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2011 年 9 月

財団法人ユネスコ・アジア文化センター

1. 実施概要

財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) は、国際連合大学の委託を受け、2001 年より「ACCU 国際教育交流事業」として韓国から初等中等教育教職員を日本に招へいするプログラムを実施してきた。これまでのべ約 1,260 名の韓国教職員が日本を訪問し、両国の教職員間の交流を深め、両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきた。

上記プログラムと対をなすプログラムとして、2003 年から教職員を韓国へ派遣してきたが、これらの交流事業の成果は韓国政府に評価され、2005 年からは参加人数を倍増し、韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして実施されることとなった。2007 年には、文龍麟 (ムン・ヨンリン) 元韓国教育部長官からの招請により、中曽根弘文元文部科学大臣を団長として日本教職員 26 名が韓国を訪問した。2003 年までにのべ 236 人の教職員を韓国に派遣し、両国の教職員の交流を深め、日韓両国間の相互理解と促進に貢献してきた。2009 年からは「ESD 日韓教員フォーラム」が開催され、両国の持続発展教育 (ESD) の理解を通じた交流プログラムとなっている。

今回の日本教職員韓国派遣プログラムでは、日本の教職員等 53 人が 2011 年 8 月 26 日から 9 月 4 日の 10 日間にわたり韓国を訪問した。訪問団の構成は、参加者として、1) 2011 年 1 月に国際教育交流事業のもと、日本を訪問した韓国教職員を受け入れた教育委員会より推薦された教職員、2) 同年訪問した東京近郊の学校の教職員、3) 2012 年 1 月に韓国教職員の受け入れにご協力いただく教育委員会より推薦された教職員、4) ユネスコスクール加盟校から公募により選抜された教職員の計 49 名および、文部科学省とユネスコ・アジア文化センター

の同行者を含めた 53 名である。訪問団の団長は奈良教育大学副学長の加藤久雄氏であった。

出発前日の 8 月 25 日東京の八重洲富士屋ホテルにて、訪問にあたってのオリエンテーションが実施された。ユネスコ・アジア文化センター島津正数事務局長、文部科学省大臣官房国際課池原充洋課長の挨拶ののち、駐日本国大韓民国大使館金甫燁参事官より「韓国の教育事情について」と題した講義があった。また今年度初めての試みとして、前年度参加者および今年度参加者から日韓の教育交流についての発表が行われ、参加者全員が本プログラムおよび今後の教育交流への目的意識を高めることができた。発表にご協力いただいたのは、2010 年度参加の伊藤錦之助荒川区立南千住第二中学校主幹教諭、今年度参加の原田知佳豊中市立上野小学校教諭である。またこの場において、東日本大震災により被災した学校へ、これまでの交流に関わった韓国の多くの学校からの支援があったことが共有された。

訪問団一行は 8 月 26 日に東京羽田国際空港から出発し、同日夕方に金浦国際空港に到着した。韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU) から出迎えを受け、宿泊先のソウルロイヤルホテルで、KNCU による今回の訪問に関するオリエンテーションが実施された。

翌 27 日は朝 9 時からソウル明洞にあるユネスコ会館にて開会式が行われ、KNCU の徐賢淑 (ソ・ヒョンスク) 協力事業チーム長より韓国のユネスコ活動と ASPnet についての説明があった。韓国教育開発院の尹鍾赫 (ユン・ジョンヒョク) 氏から「最近の韓国教育の改革動向」についての講義があり、日本教職員は韓国の教育事情や日本の教育事情との差異について理解を深めた。その後の歓迎午餐会には 2011 年 1 月の日本への招へいプログラムに参加した韓国教職員も参加し、日本教職員と再会した。

午後、第 4 回 ESD 日韓教員フォーラムが開催された。イ・ジェヨン国立公州 (コンジュ) 大学教授より「危険社会と持続発展教育に関する韓日教職員意識調査」と題した講義を受けた後、クァク・ビョンナム陽山初等学校教諭が「危険教育と ESD、危険を超え希望へ」と題し、伊藤浩志気仙沼市立大谷中学校教諭が「東日本大震災と ESD」と題した発表を行った。その後グループで意見交換を行った。また東日本大震災の話にふれた際には、訪問団が日本を代表して韓国の支援に対して厚く礼を述べ

ることができた。

28日は韓国教職員とともに、景福宮（キョンボックン）や教育博物館などを訪問し、韓国教職員との交流を深めながら、ソウルの文化や歴史に触れた。

29日、Aグループは午前ユネスコスクールであるソウル新龍山（シンヨンサン）初等学校、午後は同じくユネスコスクールの淑明（スクミョン）女子高等学校を訪問し、Bグループは、午前特別支援学校であるソウル精進（ジョンジン）学校を、午後はユネスコスクールである保聖（ボソン）女子中学校を訪問した。学校訪問では、ユネスコスクール活動の紹介をする場面もあった。

夕方からの歓迎晩餐会では、訪問団と韓国教職員が交流を深めた。歓迎交流会でも、2011年1月の日本招へいプログラムの参加教職員が参加しており、再会を喜び、更に親交を深めている場面も見られた。

8月30日から9月1日までの3日間はA、B二つのグループに分かれ、Aグループは慶尚南道（キョンサンナムド）昌原（チャンウォン）市を、Bグループは全羅南道（チョルラナムド）順天（スンチョン）市を訪問し、各都市で教育機関・学校訪問や文化施設見学を行った。

Aグループは30日早朝にソウルを出発し、昌原市へ向かった。昌原市は慶尚南道の道庁所在地で自然環境に恵まれた環境都市である。一行はまずラムサール条約に登録された湿地である昌原市の牛浦（ウポ）池生態教育院へ移動した。牛浦ではその生態保全教育について学びを深めた。31日、Aグループは午前中にユネスコスクールの進礼（ジルレ）初等学校および、金海（キメ）粉青陶瓷館とクレイアーク金海美術館を訪問し、午後は金首露王陵と国立金海博物館にて伽倻文化を体験した。同日夕方、ホームビジットがあり、ホストファミリーと交流の時間を持った。9月1日、午前中に慶尚南道教育庁と慶尚南道教育研究情報院、午後に安南（アンナム）中学校を訪問した。その後、グループプログラムレビュー会議を行い、課題や成果を話し合った。

Bグループも早朝にソウルを出発し、順天市へ移動した。順天市は自然と人間が調和して暮らす「大韓民国の生態都市」というスローガンを掲げている。一行はまず松広寺（ソングァンサ）を訪問した。同日夕方にホームビジットがあり、各家庭を訪問し、有意義な時間を過ご

した。31日、順天教育支援庁を訪問し、全羅南道および順天市の教育長を表敬訪問し、教育長より教育現状が紹介された。そしてユネスコスクールである順天女子高等学校を訪問し、ユネスコ活動の事例の説明を受け、学校給食を体験した。その後、牛浦湿地同様ラムサール条約で保護されている順天湾（スンチョンマン）を訪問し、韓国の生態保全教育を学ぶことができた。9月1日は海龍（ヘリョン）初等学校を訪問し、学校給食を体験した後、樂安邑城（ナガンウプソン）を訪問した。その後、グループプログラムレビュー会議を行った。

2日朝、A、Bグループともに慶州（キョンジュ）市へ移動し、ユネスコ世界遺産である仏国寺（ブルグクサ）を訪問したのち、釜山（プサン）市へ向かった。

3日はコモドホテルにて本プログラムの報告会を行なった。A、B各グループは、韓国訪問で得た成果を今後どのように発展させていくかなどをテーマに発表し、参加者全員が本プログラムでの経験を今後の教育活動や教育交流に活かす決意を固めた。

9月4日の朝、一行は帰港先ごとにそれぞれ成田国際空港、関西国際空港、福岡空港に向け、帰国の途に着いた。



2. 教育機関訪問

韓国ユネスコ国内委員会
慶尚南道教育庁
慶尚南道教育研究情報院
順天市教育支援庁

今回の教育機関訪問は、ソウル市、慶尚南道、全羅南道の順天市にて、計4機関で行われた。

ソウルの韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)では、開会式および韓国の教育事情に関する講義が行われた後、日韓教員がともに持続発展教育(ESD)について意見を交換する「第4回 ESD 日韓教員フォーラム」が開催された。

韓国ユネスコ国内委員会 (KNCU)
8 月 27 日

開会式、韓国ユネスコ活動及び韓国 ASPnet についての紹介、韓国の教育講義、日韓教員フォーラム
日時 平成 23 年8月 27 日(土) 13:30~15:00
場所 ユネスコ会館 11 階ユネスコホール

【開会式】

最初に田宅秀(チョン・テクス) KNCU 事務総長の挨拶があり、日本教職員一行の訪韓を歓迎するとともに、東日本大震災で被災された方々への哀悼の意を表した。さらに、本プログラムを通じて ESD と国際理解、個人の成長に繋がっていくことへの期待が述べられた。続いて、加藤久雄団長(奈良教育大学副学長)より、KNCU による今年度 53 名の訪韓日本教職員の受け入れと震災への復興支援についてのお礼の言葉があり、今年までに日韓双方で 1,500 名に及ぶ両国教職員のこれまでの交流の経緯が話された。

(市川高等学校・中学校教諭 倉前光太郎)

【韓国ユネスコ活動及び韓国 ASPnet の紹介】

韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)および韓国ユネスコスクール(ASPnet)について、徐賢淑(ソ・ヒョンスク)協力事業チーム長が紹介した。

KNCU の立ち上げと活動開始は、韓国戦争(朝鮮戦争)に際しての対応に始まる。文房具の寄贈、学校建設隊の活動、教科書印刷の支援などにはじまり、その後の地方総会の設立、近年では休戦状態にある北朝鮮への教科書印刷支援などの活動がある。この間に、持続可能な開発のための教育(ESD)や世界市民プロジェクトなど、多様な角度からの広範な活動への着手と深化が図られてきた経緯が示された。

現在、韓国では全体で 129 のユネスコスクール加盟校(ASPnet)があり、持続発展教育(ESD)を 21 世紀からの大切なテーマとして扱っている。趣旨に賛同して加盟しても 2~3 年以上実体的な活動がないと名簿からはずされるという一定の規律のもとで推進され、韓国ユネスコ国内委員会(KNCU)が、韓国政府、民間団体、地域、家庭との繋がりにおいて強い独立的役割を果たしながらリーダーシップを持って韓国ユネスコスクール(ASPnet)を支援している。

(市川高等学校・中学校教諭 倉前光太郎)

【韓国の教育講義】

韓国教育開発院のユン・ジョンヒョク教授より、「最近の韓国教育の改革動向(II)」と題した、韓国の教育に関する講義があった。韓国の教育の特色として、1) 公教育に重点を置きながら、人性教育に力を入れている、2) STEAM (S: Science (科学)、T: Technology (技術)、E: Engineering (工学)、A: Art (美術)、M: Math (数学)) を、国を挙げて強化していることが紹介され、ついで PISA による評価において、数学およびリーディングが世界第 1 位であることが取り上げられた。その後の質疑応答では、日本教職員から総合の学習の時間が増えたことによる大学受験のシステムの変化、学校評価の仕組み、PTA 制度、放課後学校の概念等の質問が挙がった。

(財団法人ユネスコ・アジア文化センター)



ユネスコ国内委員会にて、田宅秀事務総長（前列、左から6人目）を囲んで記念撮影

【日韓教員フォーラム】

このフォーラムは始まって第4回目を数えるものであり、今回は「危険教育と持続発展教育（ESD）」というテーマであった。国立公州（コンジュ）大学のイ・ジェヨン教授によるテーマ講義を受け、日韓それぞれ1名ずつの発表があった。開会にあたり、ソ・ヒョンスク協力事業チーム長から、本フォーラムの背景および概要についての紹介があり、その後2人の発表が順に行われた。その後、日韓教職員が両国交じり合って熱い討論を行った。

【テーマ講義】

テーマ：危険社会と危険教育に関する日韓教師の認識比較

発表者：イ・ジェヨン（国立公州大学教授）

本年7月から8月にかけて、日韓それぞれ40名の教師、及び関係者の計80名のうち、国別に20名ずつ無作為に抽出されたアンケートの調査結果をもとにテーマ講義が行われた。

国宝第一号であった南大門が赤く燃える写真一枚と、建屋が吹き飛ばされた福島原発の写真一枚がスクリーンに映し出され、参加者の誰もが真剣な面持ちで講義を受けた。内容としては日韓それぞれの教師のアンケート結果の比較から、国別における教師の危険に対する認識の共通点と相違点についての説明があった。例えば「危険を連想させる言葉」について、韓国では戦争や経済的な問題が多く選ばれていたが、日本では最近起こった地震や津波、放射能漏れといった自然災害に端を発する問題に関心を寄せているということであっ

た。また、日韓双方の教師が「危険度の推移」について、現代が20年前より危険になったし、20年後は今よりさらに危険になるとしていたということである。

結論として、不確実性が増している現代社会において、未来世代が危険を効果的に認識して対応できる力を育てるための倫理的素養を身に付ける必要があるということが取り上げられた。そして、そのために両国の教師が一緒に努力していく責任があるというメッセージをもって講義は終了した。

【韓国教師の発表】

テーマ：危険教育と ESD「危険を超えて希望へ」

発表者：クァク・ビョンナム（陽山（ヤンサン）小学校教諭）

戦争や虐殺、人間の権利侵害といった重大な問題は昔より減っているのに、危険に対処しなければならない可能性がいつにも増して高まっているとの話で発表が始まった。そして注目すべきは、可能性と必然性の間に存在する多大なギャップであり、潜在する危険が今すぐ現実のものとなるかのように思い込むのは警戒すべきだとのことであった。

続いて韓国における危険教育の事例として、国レベルで戦争に備える「乙支（ウルチ）練習」、教育福祉対策持病の一環である「学校安全統合システム（Wee Project）」が紹介された。

最後に、監視カメラなどの様々な保安手段が本当の安全を確保しているのかという指摘がなされた。そうした中で我々教師による危険教育は、知識や行動を教えることに止まらず、個人のすべて

の行動や思考に伴う哲学や道德教育を強化する必要があると結んだ。

【日本教師の発表】

テーマ：東日本大震災と ESD

発表者：伊藤浩志（気仙沼市立大谷中学校教諭）

初めに、本年3月の東北大震災において KNCU より多大な支援をいただいたことに対する感謝が伝えられた。そして、東北地方を襲った大津波によって引き起こされた惨状がビデオで流された。地震直後から津波がやってくるまでの様子、津波が引いてから今日に至るまでの様子が説明され、ESD を学ぶ我々に多くの示唆を与えた。被災当日の夜、避難していた学校で「何かできることはありませんか」と地域の老人たちを気遣う中学生がいたという報告に教員たちは胸を熱くし、中日新聞の記事に取り上げられたという発表者のおじいちゃんとお孫さんの話には目頭を押さえていた。

津波に対して意識の高い地域で行われていた知識でさえ、今回の大津波の前にはどうすることもできなかったということである。「全てを失ったが、今、生きている。今、生きていることの意味を大切にしたい。」とのメッセージによって発表がまとめられた。（八千代市立睦中学校教諭 児玉健司）



クァク・ビョンナム陽山小学校教諭



伊藤浩志気仙沼市立大谷中学校教諭

【参加者の感想】

倉前光太郎……………ユネスコスクールの活動経験がなく ESD 実践の知識も乏しい私には有意義なものとなった。まず、ユン・ジョンヒョク先生の「韓国教育の改革動向」の講義は、学校訪問を経験していく際の道しるべとなった。

つづいて、科学の追究だけでは対処し得ない予測不可能な 21 世紀の「危険」に対して、人類がどのようにして価値ある環境を作りあげ持続発展させていくかを問いかける「危険教育」。この、今年のフォーラムテーマについて、イ・ジェヨン先生は日韓の教師へのアンケート調査をもとに「危険」を意識する諸観点を分類提示し、クァク・ビョンナム先生は「危険社会」の中でこれからの教師のめざすべき方向性を示唆、気仙沼市で大震災に被災された伊藤浩志先生は、復興へ向かう学校現場の具体事例を通して ESD 活動の動機付けを促した。当初、交流プログラムのメインである学校訪問とフォーラムのテーマ「危険教育」との間に直接の関連性が見いだされないように思えたが、訪問地で話を聞いたり、歩きながら目で確かめたり、帰国後に文章等で振り返ったりしているうちに、フォーラムのテーマは参加個々人の事前設定課題とは別に、韓国社会を大きく見渡し理解していくための基底部分の問題意識、もしくはその切り口として存在していることに気がついた。「危険」状況を中心軸に、日韓の社会的文化的な位相を考える契機となった。

本山早苗……………“競争と平等”という二つの方向性のバランスをとりながら進められている最近の韓国の教育政策についての講義を受けた後、「危険社会と危機教育」というテーマについて事前に日韓の教員にとられたアンケートの結果分析を伺い、その共通点や相違点などを知り、興味深かった。また、「危険を超え希望へ」という提言では、“私達を取り巻く社会の危険を前にうずくまるのではなく、我々教員は未来社会の持続発展のために、現在の社会に信頼と希望を語る責任を持っている”という主張には大いに共感を覚えた。

吉田 弥……………イ・ジェヨン先生から提案された調査は、日韓教職員へのアンケートをもとにした危険教育への教員の意識についての分析で、わずか 80 人程度を母数としたアンケート結果であることがまず気になったことと、意識調査の目的と必要性が今ひとつ不明確だったように感じられ

た。クァク・ビョンナム先生の「危険教育と ESD」も、危険教育の必要性や現状を訴えるばかりで、授業実践など子どもの姿が全く見えず残念だったが、信頼できる社会を構築するために、「信頼できる仲間づくり」をするユネスコスクールの役割は大きいと感じた。伊藤先生の発表では、中学生が実際に取った行動に感動した。それまでの ESD の取り組み「ハチドリ計画」や普段からの防災教育が、実際の災害の場面で生きたのだと思った。グループ討議では韓国の教職員から、韓国の北朝鮮と対峙している緊張状態について話を伺うことができた。また、危険教育というテーマだけでなく、いろいろな話題で話ができただのはよかった。

稲垣成光……………今後、地震や自然災害をどのように教訓化して子どもの教育に生かしていくのか。また、危険リスクをどのように乗り越えて生きていくのか、日本だけでなく全世界が直面する大きな課題であると感じた。

韓国では国際競争力をもって生き抜くための学力の向上を目指したが、公正な教育機会拡大の必要性から人間性を大切にす課題に気付き、教育の平等性や人間性を重視した自立型学校を育成していることから教育の方向転換を進めていることが伺われた。

岡保史雄……………危険教育については、日本でいう安全教育である。この中で韓国の先生が危険だと感じ、日本の先生が感じなかった要因に「経済」ということがあった。韓国では「経済の不安定さ」で教育を受けられなかった子どもが、やがて社会の不安要因となり、しいては反社会的行動により、危険な行動に移ると考えていた。教育を受けられなかった子どもが社会を危険に陥れるということは、他国でもある。日本は、その認識がまだまだであると感じた、ただ、危険をどう回避していくのか、そのためにも教育が必要であるということは変わらなかった。その教育をどうするのが課題であるということも日韓で同じであった。

辻倉史子……………韓国の教育講義「韓国教育の改革動向」の中では、韓国の家庭に大きな負担となっている私教育や、近年の韓国の教育の動向を詳しく知ることができ、有意義な聴講となりました。教育に対する国民の関心の高さ、政的公約としての教育改革など、国家の政策と結び付く韓国の教育現状を知りました。いずれにしても、国家が子供たちの教育を「未来へ投資」と考えて力を入れ、



グループ討論の様子

教育現場において経済的に大きな基盤があることに感心するばかりでした。

討論及び情報共有では、①「危機」とは何か、②現代社会における危機、③危機回避のために何が必要か、というテーマでグループ毎に日韓の教員で意見を交しました。学校における「危機」について討論した際に、携帯電話普及の問題、昨今の児童・生徒がトラブルに巻き込まれた事例などが挙げられました。これに対し、児童・生徒の倫理観や自己抑制能力を養う教育が必要であることが両国の共通した見解でした。そして、学校現場での日常の指導のほかに、日韓両国で「道徳」がどのように扱われているかについて情報交換できました。

慶尚南道教育庁（A グループ）

9月1日

代表者：高永珍（コ・ヨンジン）（教育監）

特色：慶尚南道は韓国で4番目に大きな行政区であり、道内には小学校 495 校、中学校 268 校、高校 183 校があり、499,190 人の小・中・高校生が在籍している。夢をかなえる学校、みんなが共にする学校づくりを目指しており、また、課題として、①歌をうたう学校：うたえる雰囲気醸成。合唱および音楽部活展開、②運動する学校：陸上競技を通じた体力向上プログラム、学校のスポーツクラブの運営活性化、③本を読む学校：読書生活の習慣化（1 日 1 時間週 1 冊。家族みんなが 1 日 30 分以上、週 3 日以上読書する家庭）がある。

歓迎式では、韓国教育庁側は副教育監、学校政策課長、教育課程課長、教育人事課長、企画広報担当、日本側は加藤久雄団長、森垣薫グループ長、島津正数 ACCU 事務局長、東秀明文部科学省国際統括官付ユネスコ第 3 係長の紹介があった。副教

監より、前回韓国の訪問団が来日したときのお礼の言葉と、教科書問題、竹島問題はありますが、両国は隣国であるため協力して共に学び合えるようにしていきたい、とのあいさつがあった。答辞として、加藤団長から今回の訪問受入れと震災支援に対するお礼の言葉が述べられた。続いて、同道の教育現状についてのビデオ上映があり、政策方針は、①質素を生かす人材教育、②未来を切り開く創意・人性教育③健康で安全な教育環境、④希望を与える教育福祉、⑤信頼できる教育行政、とのことであった。最後に記念品の交換と写真撮影が行われ、訪問を終了した。(与謝野町教育委員会事務局教育推進課 課長補佐 山本泰久)



慶尚南道副教育監（中央奥）から慶尚南道の教育の説明を受ける

【参加者の感想】

藤田篤志……………慶尚南道副教育監からの教育政策についての説明があった。「夢をかなえる学校、みんなが共にする教育」をスローガンに、「道理にかなった人格性を備えた人材育成」を教育目標としているとのことであった。その説明の中で特に関心したことは「多様な分野で最高の人材を育成する」ということであった。グローバルリーダーの育成こそが我が国の将来を担う人材育成につながるという意味だったように思う。いずれにしても学校と家庭、地域、行政が一体となって教育にあたっているということがひしひしと伝わってくる説明であった。

中村徳之……………副教育監のチュジンミョン先生は、「アジアの中で共に発展を続けるにはお互いに良い点を見つけて学んでいくことが重要だ。人は資源だ。日本のパワーは教育力があるから発展してきたことを私たちは学びたい。」と述べていました。さらに、「日本の若者が韓国の若者と世界を

先行することは遠い未来ではない。教育が関係を結ぶのです。」という挨拶をいただきました。私は、さいたま市教育ビジョンである「夢を持ち未来を切り開く子どもたちの育成」を目指した「生きる力」の育成の取り組みを改めて思い起こしていました。学校・家庭・地域・行政が一体となった取り組みの方向性の教育理念は、同じであり、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を目指していることが理解できました。特にさいたま市では「コミュニケーション力」を付けながらバランスの良い子供の育成を目指しているという重点の違いを感じつつ耳を傾けていました。

野村健太郎……………「教育力こそ韓日の交流を深めるものであり、近い将来、日本人が韓国の企業に、韓国人が日本の企業に出勤する姿が浮かぶ」という副教育監の言葉が印象的であった。韓国の教育が一方で、能力別授業や英才教育に力を入れ、他方で放課後学習や創意学習を進めるために、給食費無料や修学旅行費無料化など行政面での支援活動がさかんに行われている現状を深く知ることができた。ここでもまた、国と行政が一体となった「教育格差の是正」という政策の力強さを感じた。

慶尚南道教育研究情報院（Aグループ） 9月1日

代表者：李鐘奎（イ・ジョンギョ）

特色：慶尚南道内の小中高校における教育課程を研究し、解決策を考え、現場での教育活動がスムーズに行なえるよう支援している。そのため41事業が行われ、6部署に60人が勤務している。

李鐘奎院長より、院の歴史、目的、現状等の概要の説明があった。同院では四つの重要事業として、①教育問題の調査研究、②サイバー家庭学習の活性化事業、③情報システム運営、④教育現場の支援、がある。インターネット学習専門サイトとして2005年に開始されたサイバー家庭学習は、現在3万人以上が利用しており、小学校1年生から中学校3年生の主要5教科のコンテンツの学習が可能である。なお、内容はカリキュラムに準拠していて、基本・理解・深化の3段階のレベルがあり、生徒自身で選ぶことができる。「自ら学習カレンダー」という機能により、進め方を自分でチ

チェックしながら学習を進めることができ、教師・保護者がチェックできるシステムが構築されている。また、メディアセンターとインターネット放送局を見学させていただき、道内の全データが集中して、一目で状況が分かることや、インターネット放送は小学生から大人までを対象にした動画コンテンツをこの局で制作・配信している、との説明を受けた。

(金沢市立中央小学校教諭 吉田弥)

【参加者の感想】

森垣 薫……………「セミ学習」というサイバー家庭学習を中心に説明を受けました。情報システムの整備や運営では、はるか日本を上回るように痛感しました。現在、一日に3万人以上がアクセスし、ここで学習状況を一括管理していることに驚きました。またこうした教育情報システムの整備に韓国が力を入れている中、日本がまだまだ教育情報システムに予算的な遅れを実感した見学でもありました。

星野明人……………四つの部署、60人で運営される教育問題の研究と現場支援について41事業を行う施設。特にサイバー家庭学習の説明に力点が置かれた。セミ学習（小中学生が家でインターネットを通して行う学習専用無料サイト）も運営している。都市部から離れた地域の児童にも放課後の学習を保障し、①オンラインテストで本人だけでなく、保護者、教師も点数等を管理できる②学習カレンダーに計画と実行を色違いで表示できるなど保護者や教師の負担が少なく計画的・継続的に学習出来るよう工夫されている。現場支援にお金をかけているなと思った。



サイバー学習コンテンツを配信するインターネット放送局

松尾聡子……………日本よりずっと先を行く、サイバー家庭学習システム。その後訪れた安南中学校のクラスの半数が使用している（塾にも行きつつ）のも納得の、充実した内容だった。テストが受けられ、解説もしてくれる。学習状況や学習カレンダーなど、親も学校の先生も確認できるという。日本での通信制の学校が、オンライン上にあるような感じだ。教育格差を埋める目的が大きいのだろうが、一人一人がこのシステムをどう利用するかが自由なところがまた良いと感じた。

大谷清人……………出発前 IT 先進国の韓国では、IT 授業をどのように行なっているのか、ぜひ見てみたいと思っていた。IT 授業は、見られなかったものの、各教室に全てパソコンとプロジェクターが配備されているのに驚いたが、こちらの情報院にはさらに驚かされた。IT を利用して効率よく学習を進めようというセミ学習（オンライン学習）はもちろんのこと、道内全学校のホームページ統合システムの構築・運営、学習コンテンツの開発、現場の教育問題への研究・支援・・・と、多岐に渡る IT 政策が一手に任されていた。サーバールームに案内されたが、さながら大企業のコンピューターのものであった。セミ学習では、個人の能力・興味に合わせて、レベルが選べたり、正解・不正解の記録を残し、教師がそれを見てアドバイスを与えたりすることができる。貧困格差による教育格差の是正を目指している韓国なのに、パソコンのない家庭で利用できないセミ学習に力を入れるのは、方針に反しているのではないかと思った。しかし、その考えは間違いであった。パソコンの普及率は、8～9割だが、パソコンが持てない家庭には、無償で貸し出しているそうだ。どこまでも徹底していると感じた。

大隈 賢……………50名ほどの職員のうち、25名がコンピューター専門家、教育関係者9名、(他はおそらく事務など)ということであった。ここで、慶尚南道全ての学校 HP 統合システム、中学3年生までのオンライン家庭学習、オンライン評価システムを構築している。

ここで管理するスーパーコンピューターの数や、放送番組作成室が完備されていること等から、情報教育に関しては日本をはるかに凌駕していることが分かった。各学校の教師や、各市町村教育委員会単位に委ねられている日本の情報教育システムでは、到底追いつくことはできないだろう。

順天市教育支援庁、Wee センター (B グループ)

8 月 31 日

【順天市教育支援庁】

代表者: 朴文載(パク・ムンジェ)

特色: 自然と人間が調和して暮らす「大韓民国の生態首都」をスローガンに掲げており、順天市は、順天湾、楽安邑城、仙嶽寺、松廣寺、ドラマ撮影地としても有名である。韓国では、もっとも暮らしてみたい都市 No.1 に選ばれており、ユネスコの「世界で最も暮らしてみたいところ」でも世界第 2 位である。2013 年には、国際庭園博覧会が順天湾を中心にして開催される予定である。

朴文載教育長より、順天市の教育概要の説明があった。順天市は人口約 27 万人で 5 万人の子どもたちが教育を受けている。全羅南道の中心都市であり、この地が人材育成のゆりかごとなるように学校教育だけでなく生涯教育にも力を入れており、地域住民や保護者の教育に対する熱意も高い。互いに学び、未来を切り拓く順天市の人材育成を目標としており、力点事業として以下の 6 点が挙げられる。①虹色教育(学校)の推進、②無償教育の実施、③教育運営、④農漁村の学校支援、⑤読書討論授業の活性化、⑥教員の事務作業軽減の推進。朴教育長の説明の後、本多成人 B グループ長は、本事業を快く引き受けていただいたことに対する感謝の意を表し、「互いに学び、未来を切り拓く」ためにさまざまな取組をしている順天市の教育から、多くのことを学んでいきたいと述べた。質疑応答では、日本側から以下の質問が挙げられた。

- ・学力向上におけるメンタリングと読書活動の推進について
- ・いじめのない教育を目指す上での具体的な方策について
- ・保護者の満足度を高める教育の推進する上での、教員の負担について
- ・自立と競争、人間性を豊かにするという教育に感銘した。人間性、心を育てる教育として、何をしているか。

(奈良市教育委員会学校教育課課長補佐 石原伸浩)



順天市教育支援庁にて記念撮影

【Wee センター】

特色: 2 年前に開設された。職員は社会福祉士他 8 名で、進学・暴力・メンタルなどの各支援・相談を行なう。個人でも集団(学校訪問)での相談にも応じており、夜間も受付をしている。

センターの概要説明を受けた後、質疑応答の時間が設けられた。

Q. 言葉(言語)に対する支援を行っているのか。

A. 他の施設に委託している。

Q. 教育障害は発達障害が多いが、対応しているのか。

A. 他の特別支援施設(病院等含む)で行なっている。

Q. 相談者の相談は解決できているのか。また、その方法は。

A. 教員に暴力をふるってしまう子を一週間で更正させた。治療プログラムに基づいて行ない、また感情の調節ができない子については、親の問題としてきちんと伝えたり、同じ様子の子と一緒にいたりしている。

(小笠原村立母島小中学校教諭 木村正太)

【参加者の感想】

稲垣成光……………「共に学び未来を作る人間育成」をビジョンとして掲げ、学生中心、支援中心の教育行政を目指しており、義務教育段階では給食は完全無償である。一方、過疎化が進む中で、地域振興策の一つとして重点的な予算措置や教育行政業務の軽減促進、質の高い教育の実現など教育費の割合は高い。さらに、2013 年順天湾国際庭園博覧会が開催予定されており、順天川生態環境を愛する特色ある教育の展開を進めている。

木村正太……………順天は、市長をはじめ市全体が大変教育熱心な素晴らしい都市だった。また、ホームビジット先でも感じたが、市民が順天を誇りに思っていることが何よりも素晴らしく印象的だった。

順天が行っている重点課題の中で、興味深かったことはラムサール条約に登録されている順天湾の生態環境を生かした ESD 活動である。私の住む、小笠原村も大変貴重な自然豊かなところであるので、その自然とうまく付き合った教育活動を展開していきたいと思う。順天は素直で、明るい子どもが多く、そのことが町全体で行っている教育の素晴らしさを証明しているのではないかと感じた。

近藤麻里……………教育支援庁での質疑応答の中にあった、「技術が発達するにつれて、行政書類作成の業務が大変な量となり、授業向上をすべきなのに、その時間の確保が難しい現実があった。そのため、行政書類の業務を最小限にしようという試みをした。これは全国的な動きがある。」とあったが、この課題は日本でも同じ現状がある。日本もこの動きに習って、教育事態の資質向上を目指していかなければならない。

Wee センターでは、日本でも似た組織は一部であるが、全国的ではない。今後必要となる機関の一つである。

黒飛雅樹……………韓国一住みやすい都市を自負する順天市。農村部や順天湾などの広大な自然を有し、その特色を生かした「共に学び、未来を育む順天教育」。ESD 教育や ASP-net での実践を考えるとついどこかと交流しなくては、と考えがちになりそうですが、地元への愛着を高めるためにまず地元を知ることからと教育カリキュラムを構築していることには共感しました。またとても感銘をうけたのは Wee センターの訪問です。質問もさせていただきましたが、ここに通う生徒にあったプログラムの作成や臨床心理士によるカウンセリングはもちろんのこと、学校や社会復帰のために関係機関とつなぐ社会福祉士もいることに驚いた。私の相談員時代の経験や今の教員としての仕事を考えても、日本では多くのニーズに対して一つの部署や人間で抱えすぎる傾向にあると思う。いくら電算化等で余裕ができてその分他のニーズに応えなくてはならないと感じる。韓国の子どもたちは日本の子どもたちより学校で学ぶ時間が多いのに、韓国の先生方に「日本の先生は働き過

ぎ」と言われるのは、Wee センター等に見られる分担・連携の意識が違うのかと感じました。

長山誠也……………順天教育支援庁では、学力の向上やいじめのない学校をめざしているということだった。学力向上面では読書思考教育を進め、討論の授業を取り入れているとのことだった。また、学校不適用の児童・生徒（不登校や校内暴力、いじめ）などの問題は Wee センターという機関が受け持っている。そこでは、教育相談を受け児童生徒や保護者へ対応しているということだった。オーダーメイド型の指導で個別化や多様性に対応している。その中で、児童生徒の自律と競争力をつけ、自立することをねらっている。この組織の取り組みは、学力の向上と保護者の満足度を高めるために常にさまざまな方策をとり、豊かな人間性の育成を目指していることが分かった。

桶谷圭介……………順天教育支援庁では順天の教育現状を知ることができました。順天では都市部と農漁村部での教育環境の格差をなくすため、教育政策が実行されていました。例えば、都市部では英語教育における学習塾や家庭教師が充実しているが、農漁村部ではそういう環境がありません。そこで、英語会話専門教員を配置して教育の質を落とさないようにしていました。また、農漁村部は経済的に貧しい家庭が多いため、無償給食（順天は全市で実施）や思考力を養うための図書館の建設を行っているということでした。また、Wee センターでは心の教育のプログラムが充実していました。学校への不適応や問題行動のある生徒が利用し、臨床心理士や社会福祉士など専門のスタッフの元、カウンセリングを受けたりプログラムを実行したりするということでした。学校、家庭、専門機関が一つになって子どもを教育しているというすばらしい環境にうらやましさを感じました。



Wee センター内のカウンセリング室の風景

2. 学校訪問

A グループ

ソウル新龍山初等学校

淑明女子高等学校

進礼初等学校

安南中学校

B グループ

ソウル精進学校

保聖女子中学校

順天女子高等学校

海龍初等学校

AグループとBグループに分かれ、学校訪問を行った。ソウルで両グループはそれぞれ2校を訪問した後、Aグループは慶尚南道にて、Bグループは全羅南道にて各2校を訪問し、授業見学や教職員、児童・生徒との交流が活発に行われた。

ソウル新龍山初等学校 (A グループ)

8月29日

代表者: 金鐘徳

特色: 1968年に創設され、現在62クラス、児童数1,952人、教員数91人の超大規模校である。また、「やさしく、かしこく、そうけん」を教育目標に掲げ、グローバルリーダーの育成を目指している。主要な教育活動は、①ユネスコ協同学習②持続可能発展教育③人権・平和民主主義学習④文化間交流学習。放課後学習でサッカーや楽器指導に力を入れている。

写真撮影、金鐘徳校長あいさつ、森垣薫グループ長あいさつの後、訪問団の紹介があり、歓迎レセプションでは、オーケストラ演奏・ハーブ演奏・重唱団公演やテコンドー、テコン舞が披露された。

授業参観では、2グループに分かれ、2クラスずつ参観した。5年生の英語の授業はT.T形式で行われ、「Summer Vacation」というテーマで、夏休みに何をしたかたずね方と答え方、そしてその時に感じたことをどのように表現したら良いか、という内容であった。6年生の科学の授業は、湿度が生活に及ぼす影響について測定を通して学習するものであった。また、3年、4年、6年(2クラス)の計4ク

ラスにて、日本の学校における児童の生活や伝統的な子どもの遊びを紹介し、実際に体験してもらう機会を得た。

ソウル新龍山初等学校の学校紹介では、学校沿革、教育目標、重点的活動についてプレゼンテーションが行なわれ、日本側から以下の質問が挙がった。

- ・教育課程における国際理解教育や環境学習の位置づけ
- ・英語の先生(ネイティブスピーカー)の配置について
- ・学年別の英語学習の進め方、重点について
- ・放課後学習のクラス分けの方法について
- ・地域連携における人材の活用方法について
- ・英語の授業の評価方法について

最後に、給食をいただいて、学校訪問を終了した。(岡山市立第二藤田小学校教諭 大谷清人)

【参加者の感想】

藤田篤志…………とても素晴らしい歓迎式に驚かされた。ヴァイオリンとチェロの演奏、テコンドーを披露してくれた。小学校とは思えないほどの迫力であった。その後、普通教室へ移動し、授業を参観した。まず、教室に入って、その学習環境に度肝を抜かれた。空調、コンピュータを内蔵する教卓、大型モニターなどが完備されていた。さらに教員は、すべての授業でコンピュータを活用しており、ICT活用が確立していることが印象的だった。また、英語教育に対する素晴らしさを感じた。6年生の授業では、ALTが主体となり、担任の先生も英語しか話さない、オールイングリッシュの授業であった。英語で発問されたことに対し、英語で答える姿に日本での英語教育との差を感じた。



訪問団による日本文化紹介

原田知佳……………6年生の英語授業を参観しました。ネイティブスピーカーと英語の先生のT.T.での授業は、オールイングリッシュで行われていることに驚きました。今回の授業では、ビデオ視聴の後にどんなことが起きたのかを順を追って思い出しながら、英語を使って話すというものでした。子ども達の口から、自然と英語が発せられる姿を見て、日本に比べて英語教育のレベルの高さを実感することができました。また、他文化理解の授業参観では、日本と韓国のカエルの歌を使って、カエルの泣き声の聞こえ方の違いから気付いたことを書き出していました。子ども達にとって、動物の泣き声という身近なものを取り上げ、他文化理解につなげるというのは、楽しみながら学ぶ事ができ、とても素晴らしいと思いました。

村上美和……………6年生の英語の授業を見させてもらいました。韓国では教科担任制を取っているので、ホームルームティーチャーも流暢な英語で話しており、授業はすべて英語のみでした。ALTの質問に対しても、子ども達はごく自然に英語で答えており、私たち大人でさえ、聞き逃してしまうようなことまで理解できているようでした。教職員間での質問の際に、韓国では英語教育において「話す／聞く／読む」の三つの観点に絞っており、日本と同じように「書く」ことは中学校に行ってからだそうです。

大谷清人……………放課後学校において英語・サッカー・音楽など、本人の希望や得意分野での指導に力を入れていた。事前にテストを行い、能力に合わせて段階別にクラスを分けて、指導しているとの事。能力に合わせた適切な指導を行なおうとしていることが分かった。

山本泰久……………保護者総会の出席率が95%と高いことは保護者の教育に対する関心の高さ、子どもへの期待の大きさであり日本との違いを痛感させられた。

大和晃二……………ソウル文教地区の大規模校であり、歓迎会での合唱やテコンドーの演舞は相当にハイレベルで、さすがに名門小学校であると感じさせた。子どもたちも私たちの訪問に関心を持っており、笑顔で挨拶をしてくれ、教室から出てきて間食用に配布された菓子を分けてくれ、総じてフレンドリーであった。T.T.での英語授業の参観では、英語で英語を教えるという姿勢が徹底していたこと、IT機器を活用したモニター授業がどの教室でもできることが印象的であった。日本側教員も日本の学校や伝統遊

びの紹介をしたが、子どもたちは予想以上に日本のことを知っていた。給食の試食では食堂で給仕を受けて、個別に食事をとる形式で日本との違いを感じた。教室掲示や階段にまで英語のことわざが張られており、この学校の教育環境づくりへの強い熱意を感じた。

淑明女子高等学校 (Aグループ)

8月29日

代表者:李敦姫(イ・ドンヒ)

特色:1906年、国王高宗の皇后であった嚴皇貴妃のもとで明新女学校として設立。のち淑明女学校に改称し、現在にいたる。生徒数1,829人(1年14学級、2、3年15学級、計44学級)で、2、3年次に人文社会課程、自然課程に分かれる。韓国屈指の名門校であり、また、オーダーメイドによる個別の進路指導による実力養成、全人教育にも力を入れており、多彩な課外活動講座や(67の部活動)や歌謡祭、演劇発表会、職業人による進路講演など生徒の才能と素質、潜在力を引き出す取り組みをして21世紀の女性リーダーを養成している。

歓迎行事では、日本の姉妹校との30年間に渡る交流の紹介を含むビデオ上映や、生徒によるユネスコクラブの活動の紹介、琴クラブによる歓迎演奏が行われた。2年生の日本語の授業参観では、パソコンからスクリーンに写された映像で、日本に関する4択クイズを班対抗で答えるゲーム形式の授業。日本側教員も2〜3名ずつ別れて班に入り、生徒から日本語、英語、ジェスチャーを交えた説明を受けて、一緒に回答を考えた。賞品のお菓子を競い、おいに盛り上がり、生徒たちと打ち解けた雰囲気になったフリートークの時間では、学校生活、日本文化への興味(アニメ、音楽)、等、生の韓国の高校生との考えていること知り、相互の交流を深めることができた。施設見学を経て、日韓教職員同士の懇談会では、日本側から以下の質問が挙がった。

- ・ユネスコクラブのメンバーの人数と、リーダーの任期について
- ・ユネスコクラブの活動における校外での連携について
- ・韓国の高校入試における昨年から導入された地域の学生が自由選択できる制度について
- ・ユネスコスクールの活動の受験上のメリットにつ

いて

- ・ユネスコクラブのテーマが毎年の韓国ユネスコ委員会の重点テーマと同テーマになっていることについて

(福岡県立門司大翔館高等学校教諭 大和 晃二)



日本語の授業の様子

【参加者の感想】

藤田篤志……………ユネスコスクールに加盟して 50 年という全校生徒 1,800 人を超える私立の女子高校で、人格教育と最高の大学進学率を誇る、とてもハイレベルな学校であった。いろいろな取組について紹介してもらったが、その中でも特に興味深かったのはユネスコクラブ（国際理解部）である。全校から選考された約 30 名のクラブで、ユネスコ韓国委員会が主催する「Rainbow 世界市民プロジェクト」に参加した。毎年、活動主題を設定し、学生ワークショップを通じてお互いに同じことを考えて意見を共有し合い、「世界市民」になるべく、主体的に活動をしている姿が印象的であった。

平澤佑加子……………学校、そして生徒の、ユネスコに対する理解と意識がとても強いと感じました。生徒のパワーを強く感じることはできたのは、彼女たちが、自身の手でクラブを運営し、誇りを持って活動しているからだと思います。教師の動機付けが上手なのだと感じました。また、英語教育では、高校生の抱える悩みをカウンセラーになったつもりでアドバイスをするという、高校生が興味を持てる題材を提示し、グループで自由討議させていました。英語学習で大切にされる、コミュニケーション力を、グループ討議で自然に身につけさせることができるというのは、素晴らしいと感じました。日々の先生方の意識の強さが、「地球人」としての彼女たちの意志を育てているのだと思いました。先生方の明るさに惹かれました。

松尾聡子……………第 2 外国語で中国語と日本語を選べるというカリキュラムになっていた。日本語の授業に参加し、生徒と一緒に日本に関する問題を解いたが、英語での意思疎通となった。英語はマスターし、もう 1 か国語を勉強している状況で大学に行けるということで、国際的な人材が育つと感じた。また、午前 0 時まで勉強できる自習室や、靴を脱いで低いテーブルで勉強できる図書館の自習スペースなど、勉強の体制が整っていた。熾烈な受験戦争にこれから突入するであろう生徒たちだが、学校での雰囲気は和やかで安心した。

中村徳之……………校長先生、教職員が歴史と精神を受け継いできた自負と確かな教育ビジョンを持って、世の中に優秀な生徒を輩出してきたという自負をかんじた。校長先生の言葉に「私たちは環境とすばらしい教育をめざし、大学入試に送り出すだけでなく、世界に送り出す学校として働きかける」というくだりがとても印象的でした。それをうけて、ユネスコクラブの生徒が「私たちは世界市民。私たちの学校、町、地域を見よう。そして何が自分にできるか変化が作れるかを探し実践することだ。」と説いていたことが私の心に響きました。

また、授業では、異文化学習の中で、生徒の中に入って日本のクイズ形式の授業に参加し、生徒の英語力の高さと屈託のない人間性を肌で感じるとともに、「ボニョ」をみんなで歌うなど楽しい時間を過ごすことができました。

野村健太郎……………創立から百年が経つという名門の私立学校であったが、やはり放課後学校（自律学習）が興味深かった。日本のようないわゆる放課後の部活動がないなかで、夜の給食が出て、夜中まで勉強しなければならないというのはさすがに驚いた。今後、創意教育が韓国で普及していくなかで、淑明のような進学実績の高い学校はどのようなカリキュラムを組んでいくのかという点が知りたい。

大隈 賢……………105 年の歴史を誇る私学名門ということである。英語の授業を拝見したが、グループで話し合っている生徒の言葉は全て英語。当然、教師の説明も全て英語。ネイティブのような流暢な教師の言葉や、生徒の英語の発表に全ての生徒が笑ったり、声を上げたりして反応していた。英語を教わるというレベルではなく、英語で自分の考えを人に伝えたり、コミュニケーションを図るというハイレベルな内容であった。

また自習室には個人の机が完備され、2 年生まで

は22時、3年生は24時まで利用できるということである。実際に24時まで残る生徒が10人強いるらしい。迎えには家の車が来るそうだ。

無試験の抽選で入学が許されるが、この地域に住むには経済的に豊かな家庭で、やはりレベルの高い生徒が集まるようである。抽選倍率も11倍ということだった。

金海粉青陶磁館、クレイアーク美術館、進礼初等学校 (Aグループ)

8月31日

代表者: 鄭春權(ジョン・チュンヨン)

特色: 進礼初等学校は、1926年創立、生徒数343人。慶尚南道金海市から約10キロのところに位置している農村学校である。各学年2-3クラスで1クラス25人程度。都心地とは離れているが、教育環境などは優秀。韓国3大の陶磁器の町として有名な地域で、5分のところにクレイアーク金海美術館があって教育交流事業を展開している。生徒の関心も高く、保護者の住民も陶磁器生産を職とする人が多い。また、保護者も学校の行事や事業に関心を持って参加している。施設面では都心地の学校に比べられないが、2年前に新築した体育館は教育活動において重要な役割をしている。教職員30人のうち約10人が男性で、他の小学校に比べて男性教職員の比率が高く、近隣学校から転入を希望するケースが相当ある。

金海粉青陶磁館、クレイアーク美術館を見学後、進礼初等学校で歓迎セレモニーが行われた。セレモニーでは、児童による太鼓・琴演奏やテコンドーの披露、合唱などがあり、記念品として陶磁器の茶碗が訪問団へ贈られた。また、チャン・ヒョンスン教頭先生より、同校の教育課程・教育活動の紹介があった。授業参観では、訪問団も授業に参加し、スライドを交え、日本の学校の授業・授業の様子の紹介や、浮世絵、版画など日本文化の紹介を行った。また、折り紙、コマ、ヨーヨー、けん玉など昔遊びを児童と一緒に体験して、交流を深めた。

質疑応答では、訪問団から以下の質問が挙がった。

Q.国際理解教育はどの程度行っているか。また、それはESDの研究としてなのか。

A.韓国の教育は教科科目と創意的体験学習（日本の総合と特活を合わせたもの）2つに分かれており、

その両方を関連させ活動を行っている。今年からユネスコスクールに認定されたこともあり年間カリキュラムを作成する際にESDの観点を取り入れた。（横浜市立永田台小学校教諭 須田夏紀）

【参加者の感想】

伊藤浩志…………クレイアーク美術館の展示鑑賞教室に進礼初等学校の子どもたちがきて、熱心に粘土をこねている姿が目焼き付いている。「粉青（ふんせい）」という言葉も興味深かったが、400年前に日本にその技巧が渡ったという話も含めて陶磁器展示館やクレイアーク美術館をゆっくり観てみたいという気持ちになった。進礼初等学校の歓迎会での児童たちのひたむきな姿には心打たれるものがあった。伝統舞踊の衣装が華やかだった。純真で素直な児童たちがこの地域に支えられているように感じた。

垣見弘明…………小学校に行く前、陶器博物館を訪れちょうど実習していた2年から4年生の小学生に出会うことができた。片言の英語と韓国語で話しかけ、一緒に粘土をこねて楽しむことができた。内容的には、日本で行われている小学校図工での作品制作と同様のものであった。身近に文化体験ができるこのような施設を、うまく利用していると思う。日本では、滋賀県信楽にある「陶芸の森」美術館と同様の施設が整っていた。

その後、進礼小学校を訪問し、歓迎会を開催してもらった。この学校でも、韓国の伝統文化や私教育などでの実技講演が行われた。小学校の先生方を中心に日本の遊びや学校紹介、授業などが行われた。中には、けん玉の上達の早い児童もいた。訪問団にとっても本来の「先生」という職業が生かされた場面であると思う。教師は子どもたちの前で教師という仕事をするもののうれしさを感じることができた。



クレイアーク美術館の展示鑑賞教室で、進礼初等学校の児童が熱心に粘土をこねる

倉前光太郎……………慶尚南道の田園地帯にある同校は、日本の小学校ともよく似た配置と構成の施設であった。到着が遅れた私たちを1時間も前から体育館で待って、民族舞踊や合唱などで歓迎してくれた。農村部にあることもあり、子どもたちの様子はのどかで朗らかだった。ここでは、自身が高校や中学で担当する地歴科教育に関するいくつかの観点を得た。第一に、教室で班ごとの授業が行われていた際、3年生の児童が朝鮮半島の「各道」の名称を南北の政治的隔たり（境界線）に頓着することもなく澁刺と答えていたこと。基本的に「北」を外国と意識していない姿が見られた。朝鮮半島国家とその民族は一つであると認識する教育（意志）がそこにあった。また、別のある児童が「住んでみたい都市は平壤」と答えたが、詳しい情報の入らない「北」に対する、憧憬にも不安にも似た関心が感じられた。第二に、校庭の一角に秀吉の侵略軍を撃退した「李舜臣」の像が建てられていたこと。韓国では珍しいことではないが、改めて韓国の国家観、国家意識について考える材料となった。

松尾聡子……………学校も生徒も素朴な雰囲気だった。今年3月にユネスコスクールに加入したということで、世界各国について学んだことについての作品が展示されていた。こうした取り組みを小学校から行うことで、自然とグローバルな視点が身につくのだろう。

すぐ近くのクレイアーク美術館で小学校との連携教室を行っており、こうした芸術や伝統文化を授業に取り入れることにより、人間性や創造力を高めることにつながると感じた。

村上美和……………この学校では国際理解に力を入れており、体育館には国際理解の時間に作った様々な国を紹介するものが展示されていました。国旗と民族衣装を隣り合わせに書いたものや、日本の文化について調べたもの等、種類が豊富にありました。

学校内に掲示されているもの等を見ても、先生方は子ども達が学校生活を楽しめるように、様々な工夫をしていることが分かりました。また、日本の学校について紹介する時間では、自分たちの生活と比較しながら、子ども達は興味深く聞いていました。日本文化についても紹介するということで、けん玉や折り紙等の日本の遊びを持参し、子ども達と一緒に遊ぶことで仲良くなれました。

辻倉史子……………金海市の粉青磁器は、青磁から白磁へと変遷する過程で編み出された技法による焼き

物だとのこと。金海粉青陶磁館では、日本とも古くから交易があったらしく、萩焼や備前焼を思わせるような色調の作品も展示されていました。日本へ多くの技が伝えられていると感じました。クレイアーク陶磁館の訪問時には、進礼小学校の3、4年生児童がひねり上げの手法を習い、「自分にプレゼントしたいもの」と題して器制作に取り組んでいました。スクールバスで1～2分の移動で陶磁館と学校間を往復でき、まるで校内の工作室へ移動するかのごとく、館を訪れて、専門家の指導を受けている児童の姿が印象的でした。伝統の陶瓦と建築を現代的に融合しようという現代建築芸術を模索する施設として、また近年は地元に根付いたプログラム活動を進めている点で、ESDとして教育施設が連携している好事例をみることができました。

安南中学校（Aグループ） 9月1日

代表者：丁檜奎（チョン・フェギョ）

特色：1997年創立、生徒数1,147名（男子600名、女子541名）。「すすんで正しく聡明に」が校訓である。グローバル時代における世界に踏み出す一歩として、アメリカの中学校と交流があり、毎年ホームステイを実施している。運動では自転車（競輪競技）で実績をおさめ、素質と才能を伸ばすためにストリングオーケストラ（弦楽合奏団）がある。また、学生たちの和合と思いやりの心を育てるために「手話」の学習を取り入れている。毎年の文化祭では、生徒たちの作品展示や伝統音楽「サムノリ」、クラシックギターの演奏が行われる。

安南中学校は、昌原市の高層マンションが立ち並ぶ中にある。まず、図書室で訪問団の歓迎会があり、そこで合唱団の「キキョウ」とスペイン民謡「エレスツウ」という曲を聴いた。ひき続き、校長より歓迎のあいさつがあり、そのなかで「日本の国民の皆さんの親切な思いやりや謙遜でつつましい姿に感動を受けた。日本の教育の力は先生たちの努力の成果だと思う。一緒に過ごす時間が両国の教育発展のために役立つ時間となりますように。」との言葉をいただいた。訪問団Aグループ長の森垣先生は、「行く先々で生徒たちの楽しい声や歓迎の言葉に感謝している。日本では3月11日の震災で被害を受けたことに対して、韓国の学校から温かいご支援の言葉をいただき感謝している。昨日博物館の見学をしてカヤ小学・

中学・高校があることでびっくりしている。京都府にも同じ学校があり驚いている。歴史的文化的つながりがあり、これからは韓国の教員との交流を行い、未来へつながる子どもたちのためにこの機会を活かしていきたい。」と述べた。続いて、映像を通して、安南中学校の歴史や生徒の活動内容、教育目標などについて紹介があった。次に、授業見学を行った後、5グループに分かれて同校の教員と討論会を行った。主なテーマは以下の通り。

- ・日韓における生徒の一日の様子について
 - ・放課後の活動について
 - ・大学進学について
 - ・1週間あたりの授業数について
 - ・職業体験プログラムについて
 - ・竹島（独島）について
 - ・学習の不応時時の対応について
- （奈良市立都南中学校教諭 垣見弘明）



安南中学校の校舎

【参加者の感想】

平澤佑加子……………生徒による合唱と、日本語字幕つきの温かい歓迎に感動しました。

授業参観では、女子生徒と男子生徒が別々に学習していることに驚かされました。それが普通であるという女子生徒の反応に驚きました。私のクラスでは、「男の子の意見と女の子の意見は違いがあつてとてもおもしろい、だから、協力する方が、たくさんのかんことを考えられるし、知識もつくよ。」と言っています。男女を別にするを教師が促しているということにも驚きました。

先生方との話し合いでは、両国の相違点について主に話し合いました。特に、先生の評価を、生徒や保護者から聞くことには驚きました。内容は、①授業②生徒指導です。しかしそれは、もしかしたら当たり前で、やるべきことなのかもしれません。多く

の違いに驚くことばかりでした。

星野明人……………図書室で行われた歓迎会のビデオ記録をホームビジット先の呉性頻君が担当すると聞いていたのでお互いを見付け再会を喜ぶ。その後、安南中学校の教師と訪問団の教師がそれぞれ5、6人のグループになり、両国の中学生の1日の過ごし方や課題について通訳を通して話し合った。学校施設としては、カウンセリング室の充実ぶりが目を引いた。カウンセラーも常駐しており、個人にもグループにも対応できるように3つのスペースが設けられ雰囲気も良かった。学習面だけでなくメンタルのケアにも配慮が必要なのはどこも同じだと感じた。

倉前光太郎……………安南中学校は昌原市の住宅地にある落ち着いた雰囲気の学校であった。校舎と校庭はやはり日本の中学校によくあるような構造・配置になっていたように思う。共学ではあるが、男女が同じ屋根の下、別々の教室でクラス編成されている。このあたりが日本以上に儒教の国らしい姿のよう思えた。韓国の教員採用は医師・弁護士と並ぶ国家資格として難関を極め、競争率が100倍程度あることに驚いた反面、日本の教員が夜の9時まで学校で仕事（残業）をしているということに驚かされている様子であった（韓国では8:30～16:30の勤務でほぼ徹底しており、部活動も少数で特色化活動のみとのことであった）。教育における価値観の置き方の違いを知ることができた。

黄地健男……………安南中学校で印象に残ったことは、カウンセリングルームの充実ぶりであった。大中小の三つの部屋があり、相談者の人数によって使い分けられていた。どの部屋も明るく清潔感があり、まるで家庭にいるように感じさせた。カウンセラーの先生も常勤でおり、教職員の相談も行っているとのことだった。また、子どもが将来になりたい夢についてのアンケートを行い、上位10位までの職業の方をゲストティーチャーに招き授業をしていたと聞いたキャリア教育も行っているようだった。さらに、特別支援の学級もあった。中学校という学習向上に力を入れているだけかと思ったが、子どもの心の成長やケアにも大切にしていると感じた。

辻倉史子……………分科会で、本プログラム参加にあたって関心をもっていた書写教育についての事項について質問できました。小・中学校において書写（書道）は美術の中の単元として年に1～2回の取り扱いというケースが多く、興味を持っている児童・生

徒は個人的に書塾に通っているとのことでした。逆に韓国側の教員から、「書写（書道）を学校教育で取り扱うことは国の教育制度としての規定があるのか」「近年、採り入れられたものであるのか、それとも継続的な昔からの取り組みであるのか」という質問がありました。日本では昔から学校教育の中に小・中学校においては国語科の事項として書写（書道）があること、また高校では芸術の選択科目として書道があること、小中学校においては年間約 30 時間の指導が規定されていることを告げました。これに対し、韓国では頻繁に教育指針が大きく変わり、すべき教科教育が多く、芸術を学校で取り扱うことは時間的にも難しいという意見が出ていました。日本で書写教育が長く継続されていることに驚いておられたことが印象に残りました。

ソウル精進学校 (B グループ) 8 月 29 日

代表者：姜丙斗(カン・ピョンド)

特色：1987 年創立、児童・生徒 数 320 名の、知的障害児と肢体不自由児が通う、日本でいう特別支援学校である。同校の教育活動としては主に、1.共感を一緒にする幸せな精進家族、2.外国人と一緒にする文化教育、3.職業体験の日運営、4.サークル運営を通じ、授業の専門性の伸張、5.UCC 活用した自己主導的な学習能力の伸張が挙げられる。

新・旧校舎の施設見学及び、授業参観を行った。児童・生徒からは、バリダンス、オカリナ演奏、サムルノリなどの発表があった。

同校の教育活動案内では、科学教育、体験活動、外国文化の教育、地域社会との姉妹縁組、教師のサークル等様々な教育活動を行っていることなどが紹介された。日本側からは、さいたま市立養護学校の菊池享教諭が、写真を交えながら、日本の特別支援学校での活動の様子を紹介をした。学級編成についての質問が挙がり、韓国側の回答は、特殊教育センターで受付をした後、初等部は教育官が、高等部は教育長が審査し、障害の程度で決められるが、最終決定を行うのは、保護者ということであった。

最後に、同校の教職員と昼食を共にし、自由に意見交換をしながら交流を図った。

(八千代市立西高津小学校教諭 平元舞)

【参加者の感想】

本多成人…………施設設備がすばらしい。二つの教室の間にある共有トイレや、廊下の点字ブロック、日本を参考にした食堂やエレベーターが設置されており、特別支援に力を入れていることがよくわかった。高Ⅲは外に出ての洗車経験、校内での靴クリーニングやカフェ・コンビニ店員など職業体験ができるようになっていた。子供たちも先生方もとても明るく前向きであった。教育福祉に力を入れていることがよくわかったが、韓国の道路は横断歩道が少なく、歩行者用信号機もとても時間が短いと感じた。障害を持つ人たちはどのように生活をしているのか知りたくなった。

黒飛雅樹…………本校を以前訪れてくださった姜丙斗先生がいらっしゃる学校でした。本校校長とその後やりとりを重ね、7 月には本校職員が訪問させていただきました。その時の感謝も伝えに訪問をさせていただきました。とても感銘を受けたのは、「一人 1 特技」を奨励していることです。学校内外で学んだことを特技として、お客さんの前でも堂々と発表できることはとても素晴らしいです。また売店や靴の洗濯など、生徒が学んだ技術を校内で実践でき、かつ勤労意欲を湧かせるようなシステムができていくことに驚きました。設備はさることながら、ここでの学びのシステムが、今後社会で生きていくために必要なスキルを学べるようにできているが素晴らしい、参考になりました。本多グループ長の言葉をお借りすると、「教育の原点は特別支援教育にある」ことを、子どもと職員の姿で見せていただき、とても実のある訪問でした。

長山誠也…………まず教育設備の充実に驚かされた。低学年の指導からパソコンが導入され、視覚を通して児童に伝わりやすいように工夫していた。各教室には、指導の目的に合わせた設備があった。洗濯の練習をする教室や調理の練習をする教室、販売学習をする教室、さらに一般家庭での台所を模した教室があった。子どもたちが実社会ですぐに通用できるように、家庭生活の中で家族の役に立つようにプログラムされていた。また、今の子どもたちは、食生活の変化と運動不足による肥満傾向の子どもたちが増えている傾向がある。そのため、スポーツジムのような部屋まであった。個の成長段階を考慮し、それぞれの場面を大切に考えている教育観の表れだと感じた。

島田哲弥…………事前に頂いた韓国の教育行政に關

する資料において、2010年度より障害児教育の義務教育期間が、3歳から18歳までの15年間に延長するというを読んでいたので、見学前から非常に興味を持っていた。韓国で最も大きな特別支援学校ということで、規模や設備も非常に充実しており恵まれた環境であると感じた。中でも、高等学校を卒業した後、同じ校舎にある専攻科に進学し、職業訓練を受けることが出来ることは日本においても実施してもらいたいと切に思った。学ぶ環境が変わらず、そのまま社会に出る訓練を行うことは障害者にとっても負担が少なく、効率的であり、日本においても参考にしてもらいたい。

横山豊治……………1987年開校という比較的新しい学校であるが、ソウルを代表する支援学校で、施設が大変充実しており、教育システムも素晴らしいものであると感じた。初・中・高の合わせて320名が在籍し、教職員140名という大規模な総合支援学校であるが、きちんと統率がとられており、まとまった印象を持った。ゴミの分別、統合教育、地域との交流、老人ホームの訪問、国際文化理解など、ESD教育も盛んに行われ、大変参考になる事例を拝見した。

特別支援教育と通常教育の分け方が、日韓での相違点もあり、参考になった。

いずれにしろ、特別支援教育においても進んだ内容を取り入れており、通常の学校では見られないシステムを見て大変参考になった。

校長先生が、1月に私の学校を訪問された先生方のグループ長であり、その時以来の再開をして、校長先生からすぐに握手を求められ、あの時の良い思い出がすぐによみがえった。



洗濯の仕方が学べる教室等専門教室が多数設置されている

保聖女子中学校 (Bグループ)

8月29日

代表者: 洪慈純(ホン・ジャソン)

特色: 1907年創立、生徒数591名である。同校の特色として、1.キリスト教育を通じて正しい価値観を持つ生徒を育てる、2.国際化の流れと地域的環境を考慮して多文化触れ合い教育を実施、3.学生ひとりひとりの個性を考慮して未来設計オーダーメイド型進路教育を実施、4.放課後勉強ルーム、韓国料理クラス、ギタークラス、文化体験クラスなど教育福祉特別支援教育活動を活発に実施、などが挙げられる。

洪慈純学校長からのあいさつでは、ミッション系学校として、104年の歴史があり、様々な教育活動の中で、①生徒個人に合わせた教育 ②伝統的な夏季のボランティア活動などESDに深く関わる教育を行ってきたことが述べられ、同校の教員の紹介があった。韓徹亨教頭による学校紹介では、ユネスコサークルの活動として、他国の食文化に触れあう様子や、途上国への靴の寄贈、国立中央博物館における活動などが紹介された。

続いて、音楽、英語、社会の授業参観を行った。社会の授業では、日本についての基本的知識を全体で確認した後、けん玉、福笑い、浴衣着付けなど、日本の伝統遊びを実際に体験するものであった。参加した日本人教員も活動に参加し、生徒は生き生きとした表情で取り組んでいる様子であった。ユネスコ組生徒および教職員との懇談会では、まず生徒から以下の質問が挙げられた。

- ・日本と韓国の教育の違いについて
- ・日本でのユネスコスクールの活動について
- ・学校の1年間の流れについて
- ・日本におけるサークル活動について
- ・学校のルールを守る姿勢について
- ・日韓における文化の共通点や差異について

日本側から韓国側教職員へ対し、日本では私立学校が共学化している現状があるが、韓国では別学に対しての考え方やニーズはどうか、という質問があり、韓国側からは、共学で視野を広げることも必要かもしれないが、中学校の段階では勉強に集中するためにも別学は良いと個人的に思う、という意見や、韓国では伝統的に7歳になると男女は別々の

部屋になるという儒教の教えがあり、それが人々の生活習慣や考え方の深いところに残っているため、別学のスタイルは残るだろう、という意見があった。また、韓国側教職員より、未来を担う生徒を育てる立場の日本教員が、どんな観点を持ってどのようなことに悩みながら指導を行っているのか、という質問に対し、日本側からは、お互い見て、触れ合って、お互いの良さを発見することが未来を担う生徒を育てる近道ではないかと思う、という意見や、子供たちが世界観を持つためには様々なことを「知る」ことに尽きると思う、という意見が述べられた。

(千葉県立市川昂高等学校教諭 小原愛子)



浴衣の着付けを生徒に行う

【参加者の感想】

石原伸浩……………中学校3年生の英語の授業を参観したが、授業に集中して取り組む子どもたちの姿に感動した。しっかりしたねらいを持ち、45分の授業展開を計算し、興味をひく教材を使つての授業には、教師の本来の仕事を見た思いがした。続く、子どもたちとの交流の中でも、我々の質問に対して、きちんと自分の言葉で答えている姿に、この学校の子どもたちの成長の姿を見ることができた。

先生方との意見交換の中に、「過去を含め、難しい日韓の関係の中、どのようにしてこれからの良き関係を作っていくのか。」という質問があった。これは、韓国側は誰もが意識している問題である。しかし、日本側にはその意識は低いように感じる。日韓の良き関係を構築するためには、ここをどのようにクリアしていくのが課題であろう。私たちは、まずは、韓国の思いを本当に知ることが大切であると思う。そのためにも、今回のような日韓教職員交流は、両者の壁を取り除き、絆を強くするための大きな架け橋となると感じた。

黒飛雅樹……………古くから歴史を持つこの学校では、韓国に信仰者が25%程度いるといわれるキリスト教を教育の柱とした学校でした。オーダーメイド型水

準別活動を念頭としたシステムを構築していました。夏季のボランティア活動や YouthFunday と呼ばれる英語キャンプなど、伝統ある取り組みがありました。また卒業生と財団を作つて学校をサポートするなど、とてもいいシステムだと感じました。施設面では、山の中腹にあり、生徒数も減少傾向のため整っていないというお話でしたが、日本からすると十分すぎるように感じました。女子校であることに誇りをもってられるようで、勉強に集中できることや儒教の教えで7歳になると男女別室に入ることなどキリスト教の教えに儒教の教えも反映させていることが興味深かったです。日本文化の授業に参加しました。反応は日本人の学生と変わりませんでしたが、規律を守ろうとする雰囲気は強く感じました。いっしょに参加できてよかったです。また生徒とのQ&Aで、私たちから「何故勉強をするの?」という質問に対し、生徒会長が「夢を叶えるため」「困っている人を助けるため」「いい大学に行くため」と答えたことが印象的でした。

松本和子……………校門から中学生が出迎えてくれて、規律正しい学校の雰囲気を感じることができました。この学校では「生徒一人ひとりに合わせた教育」「夏季のボランティア活動」など ESD に関わる教育をしていました。ユネスコクラブの生徒との話し合いでは、「何のために勉強をするのか。」という問いに「自分の夢のため。人の役に立つ人間になるため。いい大学に入るため。」と自分の主張をはっきりと話す態度に感心しました。日本の中学生がここまで言えるだろうか……。将来を見据えた教育をしているのだと感じました。音楽の授業では、韓国の民謡（豊年の歌）を生徒に交じって歌うという貴重な体験をさせていただきました。担当の先生は韓国の伝統的な太鼓を叩きながら指導していました。ここにも伝統文化を大切にしているカリキュラムが組まれている感じがしました。

小野寺龍哉……………本校は生徒一人ひとりに合わせたオーダーメイド型学習を実践している。その中で「ESD への取組は国際理解や自然保護等について振り返る機会を与えてもらっている」という校長先生の言葉から、ESD に対してとても謙虚に向き合っているという印象を持った。取組の中身は、グローバルな視点を持てる生徒、世界へ飛び出していける生徒の育成を目指した外国人とのコミュニケーション活動や夏季のボランティア活動など、常に世界を意識したものだった。

順天女子高等学校 (B グループ)

8 月 31 日

代表者: 李三植(イ・サムシク)

特色:1940 年創立、生徒数 1,337 人。2009 年に先進型教科教室制(A型)推進優秀校に認定され、2010 年に教育科学技術部「大韓民国良い学校博覧会」へ参加、韓国ユネスコスクールネットワークに加入し、全国 100 代教育課程優秀学校にも認定される。ユネスコ活動としては、順天湾自然生態公園保存活動・ESD や光州全南ユネスコ協力活動参加などがある。

李三植校長から訪問団歓迎のあいさつと花束贈呈の後、本多成人グループ長が訪問団を代表しての答辞ののち、チェ・チャンギョン教頭より学校およびユネスコ活動の紹介があった。同校は ESD 活動を実施しながら、1. 徳性人 2. 創意人 3. 健康人 4. 文化人 5. 環境人など、緑色環境社会に適応する能力をもつ人材の育成を教育目標・経営方針とし、夢や理想を持ち、活気と信頼のある学校を目指している。校舎見学および授業参観を経て、質疑応答の時間が設けられた。

【順天女子高校からの質問】

- Q. 日本における教科教室制の現状は？
- A. 原則として実施しているが、数学、英語、理科などでは習熟度別(水準別)で行なっている事例がある。(ただし、教室が足りずに TT で行なっている。)
- Q. 学校週 5 日制の推進状況は？(韓国では第 2、4 土曜日に授業実施)
- A. 公立校では週 5 日制だが、学力低下の懸念から土曜日授業を行なっているところもあるようだ。私立では隔週または全週土曜授業を行なっているところも多い。

【訪問団からの質問】

- Q. 標準化政策に対して保護者や教員等から反対はなかったか？
- A. 2002 年度に賛否をめぐり対立があった。卒業生を中心に反発があったが、市民の 7 割が賛成し、法案成立後 5 年にわたって推進されている。
- Q. 教科書教室制で困難だったことは？
- A. ・生徒たちの移動に関わる問題→時間割の整理(2 時間ブロック制度)や生徒の動線をすっきりさせるなどの工夫で対応

- ・「空き時間」の生徒指導に関する問題→図書利用の促進や外部講師を招いて進路に関する話を聞く会などを設定するなどの工夫で対応
- (白石市立小原中学校教諭 鈴木誠治)



寄宿舎の前にある掲示板には、深夜まで勉強のための時間が書かれている

【参加者の感想】

岡保史雄……………韓国の学校はランドでの体育はあまりしていないのかなと感じた。ところが、校舎についてはとても広く、この学校は教科教室制をとっている、教室数が多いことに驚いた。特に特別教室の充実振りに目を見張った。また、名門校で進学校でもあり、自学自習のスペースが数多く点在していた。韓国の受験の厳しさの一端を見たと思う。高3にもなると、午後 10 時まで学校で勉強してから帰宅となる。公立高校で 10 時まで学習できる環境はすごいと思うが、見方を変えると、そこまで公立学校でしてくれるシステムがあることがすごいと思う。日本は塾で補っていることを韓国では公立学校がしていることになる。寄宿舎も見学したが、生活表を見ると 24 時 30 分まで学習時間もあり、自習机も成績順になっていて、塾並みのシステムで運営されていることが分かった。

桶谷圭介……………順天女子高等学校は、全教科において教科教室制を採用しており、日本の大学のようなシステムでした。そのため、空き時間ができ、その時間をどう活用するかが課題ということでした。しかし、図書館や空き教室を活用して自習する生徒が増加していることや大学入試査定官制度導入に伴い、自主的な学習が重用視されたため、順天市の銀行員を招待して授業を行ってもらうなどの生徒の自主的な学習時間に活用されているということでした。

外国語として日本語を選択できたり、日本の予備校のような自習室で夜遅くまで学習できたりと、韓

国の生徒の学習意欲の高さを感じました。すばらしい環境が整った、この学校で自分の将来の夢のために学習してほしいなと思いました。

島田哲弥……………韓国の受験に向けての取り組みを垣間見る絶好の機会となった。また、ホームビジットの翌日であったため、親近感を持って見学が出来た。校舎は生徒が勉強するための自習室や寄宿舎などの設備や教科教室制度など教員が教材研究をするための施設に恵まれている。反面、時間割表などを見てみると過度な詰め込み教育が行われているのではないかとも思われた。また、加えて、標準化政策により学力の差が生じているなどの問題点も知ることが出来た。ESD の活動については、順天湾のボランティアの清掃活動などが紹介されたが、もう少し実践方法などの説明を聞きたかった。

海龍初等学校 (B グループ)

9 月 1 日

代表者: 金 受彦(キム・スオン)

特色: 1927 年創立、児童数 118 名。都市近隣小規模の強みを最大化して、競争力を育て、健康・人格・学力及び特技を伸ばし、皆が希望にあふれる海龍教育活動を展開する。

歓迎行事では、金受彦校長より、順天の教育現場を見て、韓国伝統の教育について理解を深めてほしい、と訪問団歓迎のあいさつがあり、本多成人グループ長は、同校独自のプログラムに興味があり、授業参加ができることを楽しみにしている、と述べた。教頭による学校紹介では、同校の教育目標、5つの特殊教育活動、放課後教室や、農漁村研究学校に指定されていることが紹介された。続いて学校の施設見学では、植物園、職員室、美術室、図書館、パソコン室などを見学した。学校長室には、校長が職員と話す機会をできるだけ設けようと、椅子がたくさん並んでいた。授業参観では、音楽の授業に訪問団も加わり、「ふるさと」など、日本の民謡を紹介したり、子供たちと韓国の民謡を歌ったり、交流を深めることができた。

質疑応答では以下の質問が挙がった。

Q.力点活動として読書討論があったが、どのように行なっているのか。

A.基礎指導を徹底しており、低学年は他の人の話を聞き、自分の考えを話すこと、高学年は教育課程に沿って行い、5年生からはディベートを取り入れている。また、ボランティア団体による読み・討論の指導や、一冊の本を全校児童・職員で読んでいる。

Q.担任、協力教員と補助教員の違いは。

A.担任は全ての教科を担当し、協力教員は PC、数学、漢字、体育など、放課後の授業の担当である。補助教員は、特別支援、特別なケースなど ALT、幼稚園、特養を除き、公開採用を行っている。

Q.保護者を交えた学習について

A.畑を学年毎に分けて運営、収穫、キムチ・味噌をつくる、大根などを市場で買い保護者の助けを得て作る。一人暮らし、低所得層、片親、老人ホームに配る。(季節ごとに体験学習)

(八千代市立萱田南小学校教諭 黒飛雅樹)

【参加者の感想】

稲垣成光……………女性教職員 32 名、男性教員は 2 名で女性教員がほとんどであった。金受彦校長は、大変なバイタリティーのある方で、教育委員会のパイプも広く教育成果を上げることが教育予算獲得に直結していることと捉え、教育内容の充実及び優れた教職員の育成に尽力されていた。順天市の小学校評価最優秀校として昨年は 3 億ウォンの予算を得たそうだが、成果主義が大切にされている典型だと考える。

黒飛雅樹……………農村部の学校として低所得層が約半数いる中、家庭教育に期待ができないことを前提に、低学力の児童をなくしていこうという取り組みに共感しました。

韓国は ICT を使った放課後等のインターネットによる学習も進んでいました。しかしそれに依存できない現状の中、何ができるかを教職員で考え、インターンの職員等も採用し、校長先生の強いリーダーシップの下実績をあげて、さらに予算を得て、教育活動に還元する。そういった良い循環と学校現場の裁量権の大きさに羨ましさすら感じました。英語の授業では、日本とは違い音声を聞く・話すのみではなく、チャンツ一つでも楽譜を見せたり動画を活用しながら行っていることはとてもよいと感じました。

また放課後学校用の教室があり、地域の方を招いて陶芸を行うこともある等話をお聞きました。ようやく放課後学校のあり方がわかってきました。

森内直子…………校長先生の広くて深いビジョン、そのビジョンを実現させるための推進力と強力なリーダーシップが印象的だった。教育庁と緊密に連携して都市近隣小規模学校の強みを最大化して競争力を育て、健康・人格・学力及び特技伸張で皆が希望に溢れる教育活動を展開しておられた。低所得者層が42%という現状を踏まえて、家庭が出来ない分を学校が多様な放課後プログラムを用いて行っている。基礎学習補充指導・感性や体力を培う部署・健康な生活のための隙間教室（エアロビクス・縄跳び）があった。すべての児童が自分の潜在能力を最大限に発揮できるように教員が一致団結して熱心に教育しておられた。大変参考になった。

長山誠也…………教育面では「正しい心を育てるために笑顔でほめること」「他人に配慮できる児童を育成する」など心の教育と、学力向上のために、自然環境を生かした様々な体験活動や全校児童無料放課後学校プログラムなどを行っている。学校施設設備を見てみると、学級数が七つ（特別支援を含む）なのに対し、特別教室が28個もあるのに驚いた。空き教室を利用して、学習活動の内容によって細かく分かれており、児童がより高度な授業を受けられるように配慮されていた。指導に関しては、教科・放課後学校プログラムの人材を地域から募集し、協力教員や補助教員などの活用により、個人のレベルに合わせた指導を展開されていた。

桶谷圭介…………農漁村部の小学校で、児童数も百数名の小規模の学校でした。この周辺には中学校がなく、児童たちは卒業後には遠方の都市部の中学校へ通うことになるため、どこへ行っても対応できる子どもを育てるというコンセプトをもった学校でした。特徴的な教育活動としては、思考力・問題解決力を養う読書活動、読書討論、学校の授業を家に帰ってから再度受けることができるサイバー家庭学習、キムチやみそをつくり、市場で売ったり老人や低所得者へプレゼントしたりする保護者と一緒に行く食育の学習などがありました。児童数の減少により増えた空き教室を、英語や美術、習字など専門の教室に変えたり、放課後学習や担任の授業をサポートする協力教師がいたりと教育環境の充実にも驚かされました。

横山豊治…………小学校の教員をしている私にとっては、もっとも楽しみにしていた訪問であった。1927年創立の大変歴史のある学校で、過疎地域の学校ということを知っていたが、学校を訪れると、施設も

十分整った教育環境の充実した学校であることをすぐに感じた。その歴史の中で、2010年より農漁村田園学校（自律学校）の指定を受け、差別のない平等な教育システムには驚かされた。在籍児童の保護者の生活所得が低い割合が高いそうであるが、そのことにもきちんと細かい配慮をし、常に平等を考慮し、どの子どもの能力も最大限伸ばそうとする姿勢が感じられ感心した。教員だけの力だけでなく、補助教員や地域のボランティアの力も有効に活用し、放課後や土曜日の学習活動を盛んに行っているところは大変参考になった。ICT教育の充実はもちろんであるが、子どもたちの学力の基礎となる、国語学習に力を入れ、単なる読書指導だけでなく、同じ本をみんなで読んで読書討論教育にしていることは、今後自分の学校でも取り入れていこうと思った。



植物園。児童の手で白菜等を育て、キムチをつくる行程までを行う。



質疑応答の様子。

4. スタディーツアー

牛浦池生態教育院・牛浦湿原
金首露王陵、国立金海博物館
松広寺
順天湾自然生態公園
楽安邑城
仏国寺

牛浦池生態教育院・牛浦湿原
(A グループ)

8 月 30 日

代表者: 金仁性(キム・インソン)

特色: 牛浦池生態教育院には「人間と自然の調和を可能にする、環境にやさしい教育」と「湿地保全意識や態度を育てる生態教育」を目指し、小学生対象の体験学習やその他体験教育を行なっている。

到着後のオリエンテーションでは、金仁性院長、朴成賢(パク・ソンヒョン)先生のあいさつの後、牛浦(ウポ)池生態教育院についての説明 VTR の上映があった。牛浦湿原は 1998 年にラムサール条約に登録され、韓国最大の自然沼である。牛浦沼の体験学習では慶南の初等学校 3 年生が年間 18,000 人訪れ、教師研修プログラム、エコプロジェクトの実施や、種々の教具と教材開発普及など、湿地体験教育の中心的役割を担っている。質疑応答では、教材開発や維持管理などについての質問が挙がった。

体験学習などに使っている教室を見学した後、朴先生の案内により牛浦湿原のごく一部を歩いた。散策しながら、湿原に生息する動植物の説明と、それをどのように生徒に教えているかを実践してくださった。朴先生によると、昔は、自然の変化に人が合わせていたが、今は自然が人に合わせようとしているため、人災の自然災害が起こっているとのことである。また、今回見た田んぼになっている場所は、本来湿地だったが人為的に田んぼにした。堤防を作っているが、数年前に水があふれたこともあり、どのようにしたらいいか自分達で考える必要がある、とのことだ。

最後に朴先生の「子供たちが大人になった時に意思決定しなければいけない場面が出て来る。その時に自然に反することのない意思決定ができるよう、教育していきたい」との言葉で締めくくられた。

(千葉県立千葉中学校教諭 松尾聡子)

【参加者の感想】

中村徳之……………牛浦湿原は、一級の原始状態を保った低層湿原として、生態系の観察と環境維持に努力されているという。しかし、近年は近隣農業とのかかわりから、課題も多く、田んぼとの間に土手を築き、破壊がないように保ち、学習の場としての教育的見地からは環境を整えていることなどの説明を受けた。その後、徒歩 1 時間ほどの観察行動を行い、水草やカモ、水鳥などの生息を観察し説明をいただきました。しかし、見たのはほんのわずかだということで、牛浦湿原のその広さに驚きました。

牛浦の由来が、牛の頭に似ているところから「牛浦」と呼ばれていることに、地域ぐるみで自然を守り続けよう、教育資源を大切にしようという関わりを感じました。



牛浦湿原



朴成賢先生の案内のもと牛浦湿原を散策

金首露王陵、国立金海博物館

(A グループ)

8月31日

特色:金首露王陵は金海の象徴的な文化遺跡で、駕洛(カラク)国の始祖である首露王のお墓である。また、国立金海博物館では、伽倻文化圏の遺物を集大成し、時代別文化の推移を体系的に整理している。

まず、金首露王陵を見学した。首露は西暦42年、国を建てた。また、王妃をインドから迎え、これが初めての国際結婚と言われている。2人は金海金氏と許氏の始祖であり、肖像画にも描かれている。首露は卵から生まれたという伝説があるが、それは鳥のメッセンジャーと言われ、その鳥は卵から生まれるところからきている。ホルサル門は、首露第2の門の前に建てられた屋根のない2本の赤い柱であるが、これは日本の神社の鳥居と同じ意味を持つ。首露王陵前の四角い平らな石では、供え物の生きた黒い豚を検査する。なお、首露王陵は整備されて今の形になっている。円形封土墳であり、王陵の手前左右には軍人と武人の像が並ぶ。また馬、羊、トラの像があり、これらは王の墓であることを表している。続いて、国立金海博物館の第1展示室「伽倻への道」と第2展示室「伽倻と伽倻人」を見学した。2000年前の慶尚南道の小さな国が再現されており、伽耶の土器、武器が展示されている。石器、青銅器、鉄などほとんどが本物だが、レプリカもあった。

(新宿区立江戸川小学校教諭 大越里江子)

【参加者の感想】

倉前光太郎……………高校で日本史を担当しているため、朝鮮3カ国や伽倻地方(加羅地方)に関する情報を目で確認できた意義は実に大きかった。朝鮮半島南部は良質の鉄の産地、4世紀ヤマト王権の成立・伸張にかかわり、王権が当地の鉄資源と技術人材獲得を緊要課題としたことを改めて実感した。金首露王陵の石像物は、日本の筑紫(北九州)の岩戸山古墳の豪族磐井(いわい。527年に新羅と内通)の石人・石馬と共通する。磐井が土製の埴輪をめぐらすヤマト王権文化を敵視し「反乱」した気持ちが時空を超えて伝わってきた。

所属したAグループで訪れた金海市は「新羅」による占領(562年)地であるのに対し、Bグループが訪

れた順天市は「百濟」割譲(512年日本書紀の記述)域に相当すると思われる。

新羅900年間の首都慶州と仏国寺のたたずまいもそうであるが、7世紀末の大宰府の大野城へも伝播する朝鮮式山城の本来本元が遙か山頂に輝いていた様子など、日常教室で話しているそのままを目の当たりにし、目が眩む興奮を覚えた。

松広寺(Bグループ)

8月30日

特色:新羅末、慧麟禅師によって創建された後に高麗普照国師が発起してから脚光を浴びるようになる。

韓国三宝寺の一つで高麗時代に16人の国師を背出した道陽で、現代のヒョボン、チボン、グサン、イルガクお坊さんに至るまで、高僧たちの足跡をそのまま残している。また参禅修行の伝統が維持されており、文化財も多く、幾多の戦乱に巻き込まれても持続的な再建・修復で現在のような威容を持つ。

(与謝野町立三河内小学校校長 稲垣成光)

【参加者の感想】

桶谷圭介……………松広寺は韓国の三宝寺院の一つで、韓国仏教の僧派を継承していることから「僧宝・寺刹」と呼ばれています。お坊さんの案内で門をくぐると、松広寺を再興した普照国師の杖と言われているものがあつた。何百年の間枯れることなく存在しているということでした。韓国仏教の歴史を感じました。日本のお寺との違いは、建造物の色です。朱色や緑を基調とした装飾がなされ、大変美しかったです。僧を大切にしてきたお寺と言うこともあり、何百体もの仏像が並ぶ僧宝殿や外国の僧が寝泊まりする佛日国際禅院が印象的でした。



住職の話を聞く日本教職員

順天湾自然生態公園 (B グループ)

8 月 31 日

特色: 韓国初のラムサール条約に登録された地であり、最もクリーンな生命の地・順天地と言われる。

世界 5 大沿岸湿地がある順天。ムツゴロウやシオマネキが沢山生息し、それを餌とする数多くの種類の鳥たちが生息している。ガイドの方も「順天は美しい自然がそのまま広がるまちです。森と海、湖と人が調和している生態都市です」とおっしゃっていた。川面に 3 つの太陽の顔、そして雄大な自然が最もクリーンな生命の地の順天湾。順天は自然に包まれた自然都市、活気に満ちた未来を創造し、新しい歴史をまちに刻む 2013 順天湾国際庭園博覧会が楽しみである。(奈良市立平城西中学校教諭 長山誠也)

【参加者の感想】

石原伸浩……………湾に面したところには、以前は電信柱があったという。毎年多くの渡り鳥が電線にかかり死んでいたが、この地が渡り鳥の生息地として貴重なところだということが分かり、今では全ての電信柱を取り外し、環境保護を行っている。また、湿地帯の外を通る高速道路も、もっと沿岸を走る計画だったと聞く。それを、この湿地帯を守ろうとする運動の中で迂回するようになったそうだ。私たちは曇天の夕刻にこの地を訪問したが、日が沈みかけたころ、雲の隙間からのぞく太陽の光が湿原に赤く反射した景色は美しく、ユネスコの「また訪れてみたい地」のトップランクに位置する理由が良く分かった。先人がこの地を守り、残してきたことに敬意を表するとともに、今後も守り続けていってほしいと感じた。



葦の下には、カニやムツゴロウ等様々な生物が生息する



順天湾を散策

楽安邑城 (B グループ)

9 月 1 日

特色: 楽安邑城は韓国に唯一残る邑城である。邑城の「邑」は地方のある地域では最も栄えた町のことをいう。官衙や郡守の客舎や市の立つ場所。雑貨屋や飲食店もある。89 世帯 300 人ほどが実際に生活している。「許浚」や「チャングムの誓い」などの撮影にも使用された。

邑を囲んでいる城は日韓で違いがあり、韓国は垂直で日本はカーブしているとのことであった。城の前には狛犬(守護神)、自然の川を利用した堀があった。楽安邑城からは金銭山を見ることができる。名前に金が入っていることから、宝くじを当てた人がこの地域から多く出ているという。実際の民家は日本の昔の住宅と似ていた。石造りと木造の違いはあるが、日本人でも郷愁を感じることができる。城の上へのぼり、邑を見渡した。そこには日本の昔の風景に似た景色が広がっていた。現在、実際に生活している 300 人ほどの人は農家や民宿を営んでいる人が多い。

楽安邑城は韓国の人々の営みをそのまま残す貴重な施設であり、日本人にとっても懐かしさを感じることができる場所であった。

(長岡市立南中学校教諭 桶谷圭介)

【参加者の感想】

近藤麻里……………藁や萱で葺いた草屋の残る民俗村、楽安邑城。日本の白川郷に似た雰囲気を持ち、穏やかな景観は守っていききたい文化の一つだと感じた。そこで暮らす方の大変さは伺えるが、文化・伝統を守って暮らしてほしいと思った。軒先につるさ

れた唐辛子や、庭に並べられた甕のキムチは、現代人が忘れかけているスローフード、ロハスの感覚でもあると感じた。

島田哲弥……………村の景観を保存するための努力はどこの国でも大変だろうと推測できるが、韓国の景観保存のため取り組みがいかに大がかりであるかを実感できた。樂安邑城が出来た背景に倭寇の存在があり、日韓の歴史を物語る史跡であり、是非世界文化遺産に登録されることを期待している。



樂安邑城の城内。左には商店が見える

仏国寺 9月2日

特色:韓国史跡及び名勝第1号となった寺院で、現在ユネスコ世界文化遺産に登録されている。その創建は571年であり、壬申倭乱(文禄・慶長の役)で全ての木造建築が燃えてしまったが1972年からの復元事業によって現在の形となっている。

仏国寺が位置する慶州は、かつて新羅の都としておよそ1000年間栄えた場所である。バスガイドの説明では、慶州という名の由来は高麗王朝成立時に新羅最後の王が王権を無抵抗で引き渡した際につけられたということである。仏国寺から釜山に向かう車窓からは石塔や古墳公園などが見ることができ、当時栄えた都の様子を忍ばせてくれる。

仏国寺の見学は現地ガイドが日本語で案内をしてくれ、伽藍内の仏像・仏閣などを逐次説明してくれた。まず、天王門では日本の金剛力士像ではなく、四天王像が出迎えてくれ、文化の相違点に気付かせてくれる。建築中の仏教博物館を過ぎると国宝に指定されている青雲・白雲橋、蓮華・七宝橋があり、ここで団体写真を撮影。いよいよ仏の世界に登って

いくことになる。大仏殿を中心に右に多宝塔、左に釈迦塔(共に国宝)があり、まさに石の文化を強く感じさせてくれる空間である。大仏殿に安置されている仏像はひげを蓄え、日本では見ることのできない特徴である。続けて無説殿・観音殿・羅漢殿を見学した。中でも韓国の今日言う状況を示しているのが羅漢殿であり、合格祈願のため多数の受験生の親が訪ねるそうである。最後に仏国寺建立の伝説をガイドから説明してもらい、解散となった。

(国際学院高等学校教諭 島田哲弥)



A グループ集合写真



B グループ集合写真

5. 所見

Aグループ

理解を深める

加藤 久雄

大変盛りだくさんで、綿密なスケジュールでした。大変多くのことを新たに学ぶことができました。特に、学校の訪問、交流は、意義深いものとなりました。韓国の教育制度は、変化が激しいせいもあって、Web 情報を含め、文献等で、最新の事態を知ることがなかなか困難です。学校での教員との交流会などで、直接韓国の小学生、中学生の毎日の生活がどのようなものであるのか、また、入学や受験に関する制度、家庭での生活、ユネスコクラブの活動の様子など、具体的に理解することができました。少し、時間的な余裕がなく、訪問した学校のみなさまには、申しわけないことになったと思います。交流の時間が十分にあればさらに良かったと思いました。ソウルから昌原、そして、慶州、釜山という大移動でした。慶州などは、仏国寺のみの視察になったのは残念でした。しかし、これも、時間的にやむを得ないことです。多くの参加者が、夕食からホテルにもどって、夜遅くまで、報告書や発表の準備をしていました。ホテルの食堂の小部屋を借り切って、発表の準備をするグループもありました。熱心な参加者の姿には、大変、好感をもちました。日本と韓国は、いろいろ、似ているところがあって、表面だけ見て「同じだ。」と思ってしまうことが多いように思います。そして、それ以上の理解がなされない。私にとっては、そういったことを改める、とても良い機会となりました。冒頭に「新たに学ぶ」と書きましたが、新しい情報を得たと言うよりは、深めることが

できたと思います。何よりも、このような機会を設けていただき、また、綿密なスケジュールを立ててくださり、案内をしてくださった韓国のスタッフのみなさまのおかげだと思います。また、視察地で、訪問受入の準備をしてくださり、温かく迎えてくださった学校関係者、児童、生徒のみなさんに、そして、ホームビジットのみなさんに、深く感謝いたします。日本側の関係者のみなさまにも感謝します。このような交流事業が、両国の教育、両国の関係に及ぼす力は、計り知れないものがあると思います。経済的な問題を乗り越え、事業の継続発展をのぞむ次第です。今回、団長としての参加でありましたが、大学関係者としてご協力できることはしたいと考えております。

体験は力となる

森垣 薫

今年度、1月に本校で韓国教職員訪問団を受け入れ、またホームビジットで先生方を自宅に招いて交流する中でマスコミ等では紹介しない韓国の学校や子どもたち、教職員の実情が少し理解できた。

今回、訪問をする中で、自分自身の目で韓国の学校の実情をより学習したいと考えている。

また、こうした体験を帰国後、本校の教職員をはじめ生徒に伝え、日本と韓国の相互理解と友好の役割が果たしていきたいと考えている。

このような自分なりの抱負をもとに以下の課題を設定した。

①韓国の歴史と文化

※特に本校は、「加悦」の地域でもあり、古代より渡来人が渡り文化を伝えた地域である。慶尚南道は、古代「伽倻王国」の存在した地域でもあり、その関連について学びたい。

②韓国の教育事情（教育内容、部活動、進路意識及び進路状況等）

③教職員の社会的立場、勤務状況、賃金等

④生徒の状況（特に生徒指導に係る内容等）

報告会の席上において、Aグループ長として総評を述べたとおり、以下の5点にまとめられると思います。

1) 韓国内の小中高等学校の訪問をとおして、日本と韓国の教育事情の相異はありましたが、子どもたちの明るい素直な姿、先生方の熱心な姿勢は日本

と変わりません。特に、日本文化を中心とした子どもたちとの交流、先生方との懇談をとおし、相互交流の大切さが実感されました。

- 2) 韓国の文化・歴史体験をとおして、韓国の文化・伝統の奥深さが感じられるとともに、それを現代の学校教育に積極的に取り入れ、生かそうとする姿勢に感銘を受けました。

また、私の課題でもある「加悦（かや）」の地域は、文字通り朝鮮半島の「伽倻王国」から渡来人が渡って来たことと実感しました。私の故郷「加悦」の歴史と文化の兄であり姉であるのです。

さらに、私の地域にも「加悦小学校、加悦中学校、加悦谷高校」があるように、金海市にも同じ名前の小学校、中学校、高等学校が存在するのには驚かれされました。

- 3) 情報教育が進んでいることです。この点、日本の学校教育の現場では、都道府県で若干の相異はありますが、日本はまだ遅れていることを痛感しました。
- 4) 訪問地をはじめ、心あたたまる歓迎に本当にうれしく思いました。とりわけ、ホームビジットでは、韓国の日常的な家庭生活の様子に触れることができ有意義な時間を過ごすことができました。
- 5) ESD 教育の必要性を実感しました。それは、日本の教職員も韓国の教職員も地球家族の一員として、「未来に生きる」子どもたちのために必要な実践であることを実感しました。

私は出発前日のオリエンテーションの席上、A グループ長としての挨拶の中「体験したことは忘れない」、そして「体験は力となる」といいました。まさしく今回の訪問は、私をはじめ参加団皆さんの力となったと確信しています。

震災後の気仙沼でできる ESD の模索

藤田 篤志

- 1) 本プログラム参加にあたり、個人の課題として次の4点がありました。

- ① 韓国における環境教育の具体的な取組についての把握

環境教育を解決していくためには、地球規模の視野が必要である。また、各国がひとつになって取り組まなければならない。その中で、日韓両国が現在、どのような環境問題と課題をもって、「持続可能な開発のための教育」を推進しているのかを

比較することでしっかりと把握したい。

- ② 韓国の学校教育における ESD の現状の把握

韓国の学校を実際に訪問し、授業の風景や生徒の様子を観察したり、教員交流を通して、ESD に関わる取り組みについて相互理解を図ったりすることで韓国における ESD の現状を五感で把握したい。

- ③ 韓国の ESD と気仙沼の ESD と比較し、気仙沼のよさを再確認し、特色ある ESD カリキュラムの構築に生かす。

気仙沼は豊かな自然に恵まれている。また、国内に先駆けて海から川、そして山へと続く豊かさのつながりに着目した「森は海の恋人運動」や食彩豊かな地域社会の創造を目指す「気仙沼スローフード」など、特色ある ESD 推進に努めている。そこで、韓国の環境教育における特色ある取組や活動を体験し、お互いを比較することで、気仙沼のよさを再確認したい。

- ④ 東日本大震災後の気仙沼でできる ESD の模索

3月11日に起きた東日本大震災により、気仙沼市は甚大な被害を受けた。地域産業であった漁業は、すぐに復興できる状況にはない。また、本校に避難されている方々も300名を超えており、教育環境も工夫が求められている。そんな今だからこそできる ESD があるのではないかと考えている。韓国のこどもたちとの交流、支援のネットワークなどを通して、今後の気仙沼を担う生徒への指導に生かせるものを模索してきた。

- 2) 特に印象に残ったこととして、ホームビジットはとてもいい経験となった。訪問先の家族を考えたお土産を買ったり、話す内容を準備していたが、当日、日本語が上手だという父親が仕事でおそくなるということを開き、韓国語を話せない自分はかなり不安になった。しかし、訪問先の中学2年の女の子は英語を話すことができたので、お互いに英語で話すことができたのが幸いだった。夕食後に姉妹でヴァイオリンとチェロの演奏をしてくれた。とてもうれしかった。それまでの不安な気持ち噓のようになれていた。その後も、学校や塾の話、好きな芸能人の話などで盛り上がった。日本から持って行った紙風船で遊んでくれた。それもうれしかった。結局、ホテルに帰ってきたのが10時半過ぎだった。とても貴重な経験ができたことに感謝している。

- 3) とても有意義で充実した10日間でした。参加す

る前は、日々仕事に追われ、じつくりと訪問準備をすることもできませんでした。いざ始まってみると、とても内容が濃く、日々、驚きと学びの毎日でした。さらに今回、共に参加した 53 名の全国の先生方との出会いに感謝すると共に、今後も教育という共通テーマのもとでお互いに議論できる仲間として末永く関わり合えることを願いたい。

外国語教育の高いレベル

原田 知佳

本校は、2010 年 8 月に、韓国の巨済島にある菊山初等学校とフレンドシップスクール提携を結び、国際教育や ESD 教育等で、教師間または児童間での交流を進めていくこととなりました。今回のプログラム参加を通して、本校と菊山初等学校との交流のヒントが得られればという思いと、韓国の教育環境や先生方のスタンスについて知り、今後の教育活動に活かしていきたいという思いから、今回のプログラムに参加しました。

韓国では、小学校・中学校・高等学校等、様々な校種の学校訪問を通して、実際に、韓国の学校教育について理解を深めることができました。どの教室にも、パソコンが設置されていて、それらを利用して授業が行われているのが当たり前という状況だということに驚きました。そして、学校訪問では、児童・生徒との交流の時間が持てたことが、とても有意義な時間となりました。小学校では、日本文化紹介ということで、折り紙やあやとり、こまやけん玉などを紹介し、児童達と実際に活動を行いました。体験活動ということで、少し時間は短かったように思いますが、その中でも、一生懸命に取り組んでいる子ども達の姿はとても印象に残りました。また、高等学校では、日本語の授業を参観し、授業に参加して生徒達と活動できたことが印象に残りました。日本に関するクイズに答えるという授業の中で、答えをわたし達に聞いてもよいということでしたので、生徒達と積極的にコミュニケーションを取りながら、一体感を感じることでできる交流の時間となりました。

また、小学校での外国語教育については、専門性を必要とするため教科担任制で、ネイティブスピーカーとの T.T で授業が行われていました。授業中は、All English で、ヒアリングとスピーキング重視で

行われていました。韓国での外国語教育のレベルの高さに驚きました。

人を大切にする

平澤 佑加子

始めのフォーラムでの韓国の教育改革については驚くものばかりでした。この研修に参加するまでは、ESD についても、韓国の教育についても、ほとんど知らない状態でした。現在韓国では、数多くの施策が行われていて、国を挙げての取り組みの強さがうかがえました。しかしながら、日本と同様、学校に適応できない子どもたちも増えていることも事実です。それに対する Wee プロジェクトというものが入入っていますが、このプロジェクトでどのように子どもたちを守っていけるのか、また、どのような成果が見られるのか、今後は楽しみです。教育は、時間をかけて生涯を見据えて成果がでるものと考えています。韓国政府は、時代の変化に応じて教育改革を行っていることを強く感じました。とても勇気があることだと思いますが、それほど、教育を大切にしているということも分かりました。

英語教育に関しては、実際に授業展開を見せていただき、非常に興味深く、関心が強まりました。特に、小学校 6 年生の授業で、英語の文法を教えるのではなく、映像に関する彼らの意見や感想を英語で求めていることには驚かされました。また、ALT だけでなく、担任教師としての役割が自然な形で授業に入り込んでいることがすばらしいと思いました。児童は、英語で話すことに抵抗はなく、導入には彼らにとって興味のある映像を利用することで、授業を楽しんでいる姿が印象に残っています。英語教育に関しては、日本と比べてかなり進んでいるということが実感できました。さらに研究を進めたいと思っています。

全体を通してのこのプログラムのすばらしさは、たくさんの人と交流できることではないでしょうか。韓国の先生方はもちろんですが、日本国内での横のつながりができたことに喜びを感じます。現状に満足せず、成長するために学べたことが幸せです。

また、今年 1 月に本校にいらした先生方お二人と再会できたことも本当に幸せでした。「再会するためには別れがなくはならない」という団長の言葉通り、再会の喜びは大きいものでした。人を大切にしていくことが、ESD の根本ではないでしょうか。

ESD の推進拠点

星野 明人

この4月に昨年登録したばかりのユネスコスクール担当となり、とにかく足がかりがほしくて参加を希望した。

開会式での田事務総長の、今回のプログラムを持続的な望ましい関係を維持するための個人の土台とすべく、体験したことを蓄積し、教育現場や社会で生かす大切な資産にしてほしい旨の挨拶を心に留めプログラムに臨んだ10日間。

訪問先の教師や児童・生徒との交流だけでなく、スタッフとの交流も大変意義あるものであった。ユネスコ韓国委員会の方々の入念な準備と臨機応変の対応が、常に我々参加者の立場に立っていて素晴らしかった。ホームビジットで通訳の役割を果たしてくれた大西さんによるとホストの呉さんは、自らのもてなしに、私たちが本当に満足しているのか一つ一つ確認していたようだ。通訳を通しての感謝、型通りのありがとう以外の表現ができない自分が情けなかった。言葉の壁を強く意識した。

10日間といってもあくまでも韓国のほんの一面しか見ていないはずである。何度も訪れ体験し交流を重ねることではしか理解は深まらない。もう少し韓国語を学び、まずは、もう一度訪問してみたい。

東日本大震災と ESD

伊藤 浩志

バスの車窓から見える風景は、ハングルの文字以外はあまり日本と変わらないと感じた。瓦屋根のつくりや土葬の墓など、違うところもあるが、文化のつながりを意識できる光景が多かった。日韓フォーラムでの発表の場面では、突然の動画上映にもかかわらず、快く対応してくれたことに感謝している。気仙沼中学校の藤田先生が持参した動画は、津波が押し寄せるインパクトのあるものだった。その後「東日本大震災と ESD」という題で発表することができた。韓国の方々に少しでも現場で起きた事実を伝えられたことが大きな経験ではあるが、その場にいた日本各地の先生方に伝えられたことも大きな意義があるように思った。ハンガンの流れを臨むアパート群は、1000万人を超えるソウルの象徴であり、平城宮とのギャップを興味深く感じることもできた。ソ

ウルの新龍山小学校では、韓国でもトップレベルの学校を見学させてもらったと感じている。淑明女子高等学校は1200席あるホールに圧倒された。ウポ湿地は人の手がほとんど入っていない湿地であった。

人と自然の共存という点では大谷の地域につながるものも多いと思った。進礼初等学校では、粘土をこねる姿をなど、キラキラした眼差しでいるこどもたちが強く印象に残っている。加耶（かや）の地は、日本人のルーツのひとつにふれる感覚だった。ホームビジットでは、韓国の方のグローバルな考え方に驚かされるとともに心温まるひとときになった。慶尚南道教育庁訪問では、「未来へつなぐ子どもたちを育てる」という方向性は日本が目指しているものを変わりないと思った。慶尚南道教育研究情報院は、サイバーセンターとしての機能の充実ぶりに愕然とした。安南中学校では韓国の先生方と勤務時間の話から教科書内容の扱い方に至るまで会話する機会があり、有意義な時間となった。

今回のプログラムに携わった全ての方々に感謝したい。そして、訪韓の体験や人とのつながりを大切にしていきたいと心から感じている。

感心した語学力と国際感覚

垣見 弘明

招へいプログラムに、人権教育として、日本と韓国とのかかわりや、韓国の伝統文化と日本の伝統文化との比較や参考になる教材や、"世界遺産や文化遺産、自国の歴史などを学校教育の中でどのように取り入れ、教材化しているのか、また、その目的について関心を持ち参加した。

さまざまな学校を訪れ、実際にそこで授業を行っている先生方の話を聞くことができ、自分が置かれている教師としての立場や、教育の考え方などを比較することができた。日本の公立学校に比べ、韓国の教育費用の多さや、教育意識の高さ、学歴社会と格差社会の顕著さを強く感じた。

しかし、最も注目したことは、特に英語を中心とする語学力、そして国際感覚であった。隣国日本とのかかわりの深さや、様々な問題に重点を置いた学習やニュースを日本では伝えているが、国際社会での貢献や世界で活躍する人間を育てる教育は日本にはまだまだ足りないと感じた。小学校高学年ともなれば、韓国語、英語に加え、日本語を話す子どもたちが、臆することなく私たちに対話を持ちかけてき

た。語学をコミュニケーションツールとして使うその意識の高さも、まだまだ日本には足りないと感じた。

韓国の伝統舞踊やテコンドーの演武を歓迎式で見ることができた。ソウル市内と地方都市であるキムヘとの町の雰囲気の違いはあったが、演じている子どもたちの真剣な表情は同じで、一生懸命練習している姿を想像できた。近くのクレイ博物館では、小学生が粘土をこねて、日本の小学校と同じようにコップを制作しており、挨拶をすると粘土を少し分けてくれた。おにぎりの形を作って渡してあげると、自分の娘と年齢もさほど変わらない子どもたちの表情は、珍しさと楽しさにあふれており、「先生」としての仕事の喜びを感じた。

私自身、韓国を訪問するのは初めてで、テレビや資料などで知るだけであった。在日外国人の問題も授業で取り上げてきたが、今回の訪問で、韓国で暮らす韓国人、韓国で暮らす日本人、日本で暮らす韓国人、日本で暮らす日本人、について考えさせられた。それは、ホームビジット先で日本人の母親、韓国人の父親を持つ家庭を訪問したとき、国籍や政治的社会的な問題など、実体験を通じた話を聞くことができたからである。そのなかで、お母さんは「オモニ」、お父さんは「オッパ」と日本では言うけれど、男の人からは「オモニ」とは言わないと教えてもらった。日本に帰って近くの店の看板を見てみても、確かに「オモニ直伝」「オモニが作る」「オモニ」などの言葉がある。授業でも、韓国語と日本語の音（おん）の同じものなどを学習するときにでてきた言葉である。身近な言葉だけに、自分もそう思い込んでいたことや、そのことを授業で教材として取り上げていたことを反省した。

東京での開会式で「体験したことは忘れない。」という言葉があったが、私が知識として「知っていること」は「事実とは限らない」という考えを強く持った。自分自身が体験できたことで得たものは多く、帰国以降考え方も変わったように感じている。

韓国の教育にかける本気 兒玉 健司

海外を意識しながら生活する日本人はそう多くないと思われる。日本人が海に囲まれた島国で単一民族のまま暮らしてきた歴史を考えれば無理もない。私が子どもの頃は世界に目を向けることなどほとん

どなく、世界の歴史や地理を教科書で少し教わった程度であった。もっと言えば、世界とつながらなくても生活に困ることはなかったから、世界を意識する必要がなかったのである。だが、時は変わって日本を取り巻く現状は激変した。産業界では世界を意識せずにビジネスすることはあり得なくなったし、地球規模で持続可能な社会の構築をはからなければ、人類の未来が危ういといった状況にさえある。

こうした中で、私は教師となって 21 年目を迎えた。そして、韓国に 10 日間も滞在し、韓国の学校を訪問し、韓国の教育にふれるチャンスを得たのである。そんな私が最初に掲げた課題は「PISA2009 の読解力テストで 1 位となった理由」であった。この国際的な学力テストでは、日本も前回の 15 位から 7 位へと大きく順位を戻している。日本の教育行政を司る方々の安堵の声が聞こえてきそうだが、私は同じ OECD に加盟する隣国の韓国が 1 位である理由を知りたかったのである。

今回のプログラムは本当に多彩で、基調講演をいただいた後の日韓の教員フォーラムに始まり、韓国文化や歴史の地を探訪させていただいた。また、とても多くの学校を訪問させてもらえた上に、ホームビジットの機会まであたえていただいた。そうした中で一番刺激を受けたのは、韓国の教育にかける本気である。私塾への熱狂ぶりの問題や受験に迫られる子どもたちの心の問題など、課題がない訳ではない。しかし、持続発展が可能な社会に生きる地球市民の育成といった面に焦点を当てると、日本の教育とは比べようもないほど進んでいる印象を持った。日本の中学校では、本年度末をもって新しい学習指導要領への移行が完了する。一中学校教師として、私が今後どのような取り組みをすれば良いかについて、深く考える機会を与えていただいた。また、10 日間の長きにわたり寝食を共にし、共に学び共に語り合った仲間たちとの出会いにも感謝する次第である。

事実を事実として 倉前 光太郎

訪韓前の課題設定は、歴史教育に携わる者として、韓国の高校や中学校における歴史教育あり方、目標、授業展開、教材の扱い方、教科書記述のあり方（自国や日本についての記述のされ方）についての理解を深めることであった。昨今、とかく政治がらみの

議論になったりして、ESDのテーマ設定として成立しないわけではないものの、安直には触れにくい課題だったように思う。この10日間の視察・研修および韓国の方々とのふれあいをつうじておぼろげながら伝わってくるものがあった。

韓国では、すべての学校の教室に国旗が掲げられている。過去の日本による侵略の歴史事実を、確実に教え伝えている。歴史の授業にとどまらず、「契機教育」として学校行事の式典にも取り込まれており、例えば1919年の3・1独立運動(3月1日)などは、お正月やお盆の生活文化を伝えるように、ふつうに教えている。民族の独立契機や自尊心を学ぶことを、日本支配からの解放とその闘いを通して教えられていくことになるわけだが、そうやって子どもの頃から、事実を事実として教えられていく。日本では、相手に配慮しながらも、事実を伝えていくことが曖昧にされていたり微妙に避けられたりする傾向がある。是非の問題ではないが、韓国では教育の末端にまで国家の統制が行き渡っているのに対して、日本では地方「自治」のクッションのもと、韓国ほどに国家が教育に直接介入することはない。

日本の学校で韓国籍の子どもたちが在籍しているのは、ごく一般的な状況になっている。かつて朝鮮半島が日清戦争や日露戦争など他国間戦争の戦場になったり、韓国併合後の植民地統治のことがあったりしたので、私たち教師は、授業では慎重に言葉を選んで使用していると思うし、生徒間でもかつての「差別用語」を不用意に口にするような場面はなくなってきている。国旗・国歌についても、学校行事の際に掲揚したり斉唱したりはしているが、形式さえ踏めば、個々人の思想信条は寛大に許容されている。つまり、日本では日常、あからさまなナショナリズムは意識的に表に出てくるものではないのである(スポーツの国際試合とか、近隣諸国との領土に関わる議論が沸騰することはあっても)。今回、各地の学校や教育機関を訪問して、この点における彼我の違いを知った。

激しい受験競争と経済格差の問題が日本よりも深刻な韓国であるからこそ、国家の強いイニシアティブが期待されているようでもある。「北」との緊張があり、徴兵制が存在する。かつて日本も経験した高度成長下にあるが、日本ほどの急激な高齢化社会の不安はない。「近くて近い国」の中にあえて「近くて遠い国」を見たようにも思う。

以上のような、「違い」として感じられた側面もあ

ったが、どの訪問地でも歓迎してくれていた子どもたちの素直な笑顔や先生方・関係の方々の優しさや熱心さ(お心遣い、お世話)は、心の底から暖かくほのぼのとしていた。また、教室も廊下も職員室も校庭も、迎える客人のためにきれいに磨き込まれ手入れされていた。授業時の落ち着きと適度な緊張感も調和がとれていて感動を覚えた。民族や国家の違いを越えて、人が人と接していく上での根本のところの価値観の共有があった。

韓国語は言葉の響きや抑揚が、何故かどことなく懐かしく聞こえてくる。ときに母国語の方言のようにすら聞こえる。市場やお店、駅やホテルのフロントにおいても、以心伝心的なコミュニケーションがとりやすかった。理念や既成知識(先入観)をこえて、心から先に動き出すこと、心をつなげようとすることで余計な皮脂が取り除かれることを知ったように思う。

英語教育の先進性

松尾 聡子

本プログラムを終えて、韓国の教育現場を見せていただいたことは、本当に貴重な経験だったと感じる。教育設備が整っていることと、英語教育の先進性には驚いた。ただ、システムとして違うところはあるが、子ども達をみていると、相違点よりも、だんだん共通点が浮かび上がってきた。クラスに必ずいる、初対面の人に話しかけたがる子、きらきらした目の輝き、はにかんだ笑顔など、子ども達の根底には変わらないものがあった。

また、ホームステイもしたことがない私にとって、ホームビジットは忘れられない体験となった。英語を話せば良かったと切に思った。そんな拙い英語力の私に、中2の女の子は簡単な英語に言い換えながら、意思疎通を図ってくれた。お母さんも、手作り料理をふるまってくださり、暖かい心遣いが伝わってきた。

5年前に韓国を訪れた時には、何か壁のようなものを感じていたが、今回の訪問では行く先々で歓迎していただいた。また、KNCUの方々ははじめ、通訳の方、韓国の先生方が、本当に親身に接してくださった。そうした中で自分自身の心を開いていたからか、道で会う人も、店員さんも親切で、韓国の人というのは、非常に心温かい国民性を持っているのだと思った。

最後に、全国から集まった先生方との交流が図れたことが貴重な体験となった。異校種の先生方の話も、興味深かった。

このプログラムで経験したこと、考えたこと、得たものは、私の教員としての糧にしていきたい。そして、それを生徒に還元していきたい。

地球市民のための教育

本山 早苗

参加するにあたって、

- 1) 韓国の教育事情、特に英語教育の様子を視察させていただき、日本より先進している小学校英語教育、それを受けての中等教育の在り方を学び、日本のカリキュラムに応用したい
- 2) ユネスコ世界遺産に登録された慶州、仏国寺などを訪問し、大学時代に視察した時と見比べたい
- 3) 友好な日韓関係を構築、継承していくためにも、学生交流のプログラムを近年中に企画実現したいを提案した。

ESD 韓日教師フォーラムに先立ち、韓国ユネスコ活動及び韓国 ASPnet についての紹介のビデオを見ながら、心の中に晴れ間が広がる思いがした。というのも、参加の動機の3番目に挙げた様に、勤務校の生徒達に隣国である韓国の文化に関心をもち、過去の歴史を乗り越えて友好な関係を築いてほしいと願いながら、日本人として過去の反省を踏まえてからでないと、新しい一歩を踏み出してはいけないような束縛を感じていた。しかし、ユネスコ憲章にあるように、“心の中に平和をつくるのが地球市民として歩み出す第一歩”であり、“私の心の変化が世界の変化を創り出す”という、明るく前向きな言葉を目にした時、青少年が世界や地球環境に関心をもち、ことで世界平和に貢献できる、この国際理解教育という観点からの ESD の可能性を実感することができたからだ。

実際にユネスコクラブの活動を積極的に行なっている、ソウルの淑明女子高等学校や、プサンの南星女子高等学校の生徒さん達の様子を拝見し、勤務校の生徒達が日頃生徒会を中心に行なっていることを、再度国際理解教育という観点で捉え直しながら、是非生徒達中心に相互交流を進められたら、それは地球市民を生み出す働きにつながるという希望をもてた視察となった。

また、同じ日本の教育現場に携わりながらも、普

段なかなかお交わりする機会の少ない、小学校や公立中学・高等学校の諸先生方と、それぞれの勤務校で進められている教育の一端を伺う機会となったことも、自国の子ども達の教育の現状を統合視する視点を与えられ、感謝だった。特に、気仙沼から参加して下さった諸先生方の前向きな姿勢に大変励まされ、それぞれの持ち場で再び励む勇気をいただいた。

地域を生かした教育

村上 美和

私は、地域理解教育を通した ESD の取り組みについて学んできたいと考えていました。本校では小規模校という条件を生かして、地域・学校・家庭が一体となった教育に取り組んでいます。まずは子ども達が自分たちの住んでいる地域について知り、そこから市や県、国、そして世界に視野を広げていければと考えていました。ただ、まだ初任校ということもあり、他の学校ではどのように取り組んでいるのか、ましてや違う国ではどのように取り組んでいるのか興味がありました。韓国は日本と似ているところがたくさんあるので、気付き、学ぶことが大いにあるのではないかと期待していました。

そして、十日間という限られた時間の中で、たくさんの学校や教育機関の訪問を行うことができました。その中で、日本も韓国も「人格教育」を目標におき、それをどのように達成していくか、やり方は似ていると感じました。確かに、韓国は教育にける思いやそれに対する投資額も日本を上回っていると思います。しかし、子どもが楽しそうに学習するために、先生方は様々な努力をしていることも分かりました。さらに、学習だけでなく、テコンドウや合唱など、学校訪問の際に演じてくれたものは、韓国の伝統を受け継いでいます。それは、先生方が指導する中で、子どもたちに韓国の伝統文化を指導するのだと思います。

また、小学校で地域との関わりについて質問したところ、地域の名人に教えてもらったり、博物館を利用したりする学習を行っているとのことでした。その地域にある素材を活用し、自分たちの住んでいる地域をよりよく知ることは、本校の取り組みと同じだと感じました。それに、「(自分たちの地区には)何もない」から「何があるの？」に考えを変えようとした取り組みを始めている学校もあると聞きました。その点では、日本の方が取り組みは早いですが、

地域を生かした教育をする大切さは世界共通の課題なのかもしれません。なぜなら、そこが子ども達の教育の原点だからだと思います。

そして、全国の先生方との交流は、非常に有意義なものになりました。地域によって取り組みも考え方も違う中で、お互いの学校紹介をし合ったり、教育について語り合ったりすることは、普段の生活を見直すよい機会にもなりました。それに団長から「ESD=今のままじゃだめだ。だから、どうする？」が出発点になっていると聞き、改めて ESD のすばらしさを感じることができました。その視点から考えると、あらゆることがつながってきますし、今回の訪韓が視野を広げてくれる大きな存在になったと思います。

「生きる力」身に付けること

中村 徳之

昨年度韓国教職員団を受け入れた際に、韓国教職員の話から子どもたちの学習意欲の違い、外国語指導や国際理解教育への積極的な取り組みに感銘を受けました。この機会を得て、私は「国際理解教育」の捉え方の違いや今年度より始まった「外国語活動」に関わる指導法など実践的指導を学ぼうと参加をしました。

このプログラムを振り返って見ると私自身の研修テーマは掲げましたが、自分の意識の小ささにカルチャーショックを感じました。それは、訪問校がユネスコスクール登録校だからではなく、韓国教職員の「地球村としてのコミュニケーション」という捉え方をしている点です。つまり、子どもたちにグローバルな国際意識をもたせ、人間交流が自在にできる人材を育成しようとする点だということです。私たち日本の教職員も国際人として社会の競争に勝ち抜く人材の育成を目指した提言のもと、「英会話や国際理解教育など」実践しているが教職員の意識や実践・成果の欠如は否めないところだと感じました。

このような背景には、近隣諸国との競争に伴う韓国教育の力強さがあるなど、日本以上に教育に対する力の入れようを肌で感じました。「人権」「環境」「平和」「福祉」など、人が人として関わりながら、課題解決しようとする行動を起こすことの大切さを基盤として、実践力を学んだ気がします。よく他者の考え方は理解できてもその立場に立って行動するという事は難しい」といいます。だから人の力は

小さいけれど継続的、持続的、発展的な関わりが大きな力になるということです。

私は社会全体が速いスピードで変化している中、知的・技術的な分野が進展し、益々、基本的・基礎的学力を向上させ、変化に対応できる人間を育成することが重要だと考えます。そのためには、教育環境を整え「国づくりは人づくり、人づくりは教育にあり」を目指すということです。このことは、両国の教育的な点から共に同じであることを感じました。この中で大切なことは「知識中心教育」から「人間性重視の教育」を重ね合わせて、バランスある教育課程を編成することが求められているということです。つまり、さいたま市が提言した「知・徳・体・コミュニケーション力」のバランスの良い子どもたちを育成し、新学習指導要領の趣旨を踏まえた知識や技能を身につけさせ、思考力・判断力・表現力を養い「生きる力」身に付けさせることであります。そのためには「確かな学力」「豊かな心の育成」「健やかな体づくり」「人との関わり方の育成」など「生き生きとたくましく困難を乗り越え生き抜く力」を子どもたちに身に付けさせ「夢を持ち、未来を切り拓く子どもの育成」を図るという重要性が、我々教職員の課題であるということを再確認することができました。

私は基調講演の中や学校訪問先での学生のことが忘れられません。「私たちは今、何を考え、何ができるか。行動を起こすことが大切だ。」これだけの論理・主張をとうとうと述べられる学生は日本にいないでしょうか。(私が知らないだけかもしれませんが)英語教育や国際教育はどう指導していくべきかという課題をいただく以前に、もう少し我々教職員が英語教育や国際教育の重要性を鑑み、地球村という意識を持ちグローバルリーダーの育成という視点で子どもたちを育てることの重要性を強く感じました。

教育格差の是正

野村 健太郎

勤務校において進路指導を担当していることもあり、韓国の学校ではどのような進路・学習指導が実施されているのかという点にもっとも関心があった。

韓国で最初のフォーラム「韓国の教育改革」についての報告を聞き、韓国では「受験（競争）」と「教育格差の是正」という二つの側面が国家主導のもと改革が進められているという印象を強く受けた。本

来、両者は矛盾・対抗する側面を持つため、どちらか一方を推し進めれば他方が成り立たないはずである。しかし、近年の韓国の改革においては両者をいかにして共存させるかという点が国の政策においても現場の学校においても優先事項であることを学んだ。

名門といわれる私立学校への訪問においても、その点はよく知ることができた。「放課後学校」や「進学実績の向上」など受験への体制を日本以上に推し進めながらも、私立学校への入学が抽選であることには驚いた。また、ほとんどの学校において教育の質の差がでないような工夫、たとえば IT 設備の普及や教育福祉の充実などが本格的かつスピーディに行われている面でも、日本はいぜん遅れているという実感を抱いた。

もうひとつは、所得格差と「戦争」という面において学ぶことが多かった。国の方針として所得格差が教育格差に結びつかないことが重要な政策であることはよくわかったが、じっさいに街などを歩いてみると、山の手の側に高層マンション、下町に貧困層の建物が並ぶという、ひと目でわかる光景があった。韓国の先生方が「危険」として第一に挙げたことが「経済格差」の問題だとした理由もわかるような気がする。日本以上に貧富の差が激しい実情があるのだろう。さらに、学校現場における戦争に備えた避難訓練の実施や、さまざまな対策なども、最近の若い人たちは危機意識が薄れているとは聞いたが、やはり徴兵制などのことを考えると無視できない問題であろう。

このプログラムにおいてもっとも印象に残ったことは、ホームビジットである。心の通じ合うコミュニケーションが出来たこと、また率直な話や対応なども心温まる一時であった。

子どもたちの前に立てた喜び

大谷 清人

本プログラム参加にあたり掲げた個人課題で達成できたものとそうでないものがあるが、韓国の教育の実態を参観したり、韓国の自然・文化・歴史に接したり、生徒や先生方と交流したりすることができ、大変有意義であった。

この視察を通して、特に印象に残ったのは、ソウル進龍山初等学校において、学校紹介や子どもの遊びの紹介が出来たことである。私の勤める小学校の

施設や児童の活動の写真をプロジェクターで映しながら説明をしていった。通訳の後「うん」とうなずいたり、「おお」と驚いたりしているのがこちらからも、見て取れた。遊具や教室などの様子も韓国の学校のものとよく似ているためか、内容が伝わりやすかった。1 学期に行なった運動会での 5・6 年生の組体操をとっても興味深く見てくれていたように思う。とくに、59 人で作るピラミッドには、映した瞬間歓声が上がった。素直な子どもたちの感性に触れることができた。その後、昔から伝わる子どもの遊びを紹介した。こま、だるま落とし、あや取りなど。こまが回せるようになった子は、大喜びしていた。短い時間ではあったが、子ども達の前に立たせてくださったことは、何よりの思い出となった。

国による教育方針

大越 里江子

ユネスコスクールや ESD についての知識が全く無い中での参加で不安でしたが、開会式でのユネスコスクールの活動紹介や、講義、ESD 日韓教員フォーラムを受け、さらに参加された先生方と話していくうちに、理解することができてきました。そして現在行っている教育活動は ESD につながっていることを感じました。

特に印象に残ったことは、韓国の教育が国を挙げてのもので、施設・設備が大変充実しているということです。全教室にパソコンとテレビがあり、授業で効果的に活用されていたり、放課後教室を行ったり、私立高校では深夜 12 時まで利用できる自習室があったりと驚くことが多くありました。韓国では勉強をしっかりやらせること、子どもの得意なことをのばすことに国の方針で学校が中心になり力を入れていると感じました。また韓国の先生方のお話や授業参観から、教育に熱心に取り組む姿勢や子どもたちが素直で一生懸命に活動する姿を見ると、日本も韓国も似ているとも感じました。

ホームビジットでは、中学生と高校生の男の子の兄弟とそこそ両親がとても温かく迎えてくださり、とても楽しい時間を過ごすことができました。他にも学校訪問や町で会える人々など、今回の韓国訪問で出会った全ての韓国の方々が大変温かく接して下さり、言葉があまり通じなくても、気持ちは通じ合う喜びを感じることができました。

平和の砦を築く 大隈 賢

限られた時間ではあったが、韓国教職員、韓国ユネスコ職員との交流、学校訪問、ホームビジット、一つ一つの体験が私の心を大きく揺動かした。

ユネスコ憲章「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」、頭では理解しているつもりであったが、今回の研修をしたことで、この言葉の重みを心の底から感じることができ、胸が熱くなった。

奈良教育大学副学長の加藤久雄団長は「学ぶ事＝自らの体で興奮すること」とおっしゃり、Aグループ長であり与謝野町立嘉悦中学校校長の森垣薫先生は、「聞いたことは忘れ、見たことは覚え、体験したことは力になる」とおっしゃった。私にとって、今研修での体験はまさにその通りであった。韓国の文化に触れ、韓国の児童生徒や教員、KNCUの方々とは話を食事をしたことで、韓国という国が好きになり、彼らと同じ言葉を使ってもっと自由に話し、もっと韓国を知りたいと思うようになった。

このような体験を子どもたちもするということは、子どもの心に平和の砦を築く上で、とても重要があると確信した。

こうした実感は、どんなに本を読んだり人から聞いたりテレビで見たりしたとしても、得ることはできなかったであろう。

公教育を目指す努力 黄地 健男

本プログラムへの参加にあたって2つの課題を設定した。1つ目は、「韓国の教育の動向と成功の秘訣」2つ目は、「韓国と日本の小学校の比較」である。

1つ目の課題である「韓国の教育の動向と成功の秘訣」であるが、韓国や日本の教育界が、これからの未来を生き抜く子どもたちにどのような力が必要だと考えているかといった教育の方向性に大きな違いはないと感じた。ただし、目指す頂上は同じでも、登り方やルートが違っていると感じた。日本の教育は各教科バランスよく学習を行い、浅く、幅広い教養を身に付けるといったイメージがある。韓国の教育は、教育に対する国家統制が強く、英語教育やICT教育がトップダウンで推進されている。国際的な人材を

育てるために何が必要かという意識が強いので、現在は英語教育やICT教育に比重をかけている。ただし、たびたびカリキュラムが変わるといった現場の先生方大変さもあるようだ。政府はやると決めたら言葉だけでなく、人・もの・金の支援もしっかり行う。これが韓国の教育を成功させた原因であろう。どの学校でもコンピュータやテレビが整備されていたり、ALTが常勤として全校配置されていたりと、国の施策が具体的な形となり、各地方の隅々まで行き届いているといった印象を受けた。

2つ目の課題である「韓国と日本の小学校の比較」であるが、英語教育やICT教育において韓国の方が進んでいる面もあるが、教育内容や施設設備など基本的なことは同じである。しかし、韓国では、日本よりも教育格差に対する支援が強化されていた。

学校に通いにくい子どもや勉強の苦手な子どもを個別的に支援するため、私教育費の負担を軽減するための放課後教室の充実、パソコンを利用した個別学習の教材開発、低所得者層へ公平な教育機会を提供するための教育費援助の拡大、学歴の格差を解消するための多様な類型の学校運営などの政策を行っていた。どれも私教育に依存しないより良い公教育を目指す努力が見られた。

もちろん、政府は言葉だけでなく、人・もの・金の支援をしっかり行うといった徹底する姿勢が見られた。

子供たちのためにいつも本気 須田 夏紀

どのときでも暖かく迎えてくださり、歓迎してくださった韓国の方々。大人も子どももみんな勉強熱心で、己を高める意識を常にもっていることに驚きました。いい学校に行くために頑張る子どもたち、いい学校に行ってもらいたいと願って頑張る教師たち。国家の中で様々な事情はあるにせよ、頑張る姿はとてもすてきでした。

また、韓国の方はとても日本に関心をもっている方が多く、素直にうれしいと感じました。小学校では日本研究クラブがあったり、高校では日本語の授業があったりして生徒たちは楽しそうに勉強をしていて、私たちは自信をもって日本人の一員として頑張らなければいけないと思いました。私たち日本人ももっと自分たちの国を知って、好きになって世界の国の人たちと紹介しあえたら、理解し合えたら

素敵だろうと思います。

このプログラムを通して、韓国の方だけでなく、日本の各地域、幼小中高の先生方と出会えたことにも感謝しています。このプログラムで出会えた先生方との話は、どれも私にとって新しい刺激、勉強でした。

でも、やはり日本韓国で共通だったことは、「先生は子どもたちのためにいつも本気で考え、よくなることを願って教育に向かっている。そしてそのために日々試行錯誤している」ということです。

10 日間、毎日すべてが刺激的で私の財産になりました。

文化遺産や自然遺産を学習に活かす 辻倉 史子

1) 参加にあたっての課題や抱負

国語の歴史を遡れば、韓国・日本の両国は、深く漢語の影響を受けています。また、日本に、そして奈良に残る有形・無形の文化遺産の多くは、韓国との古くからのつながりを示すものばかりです。実際にこれらを自身の目と耳と心で学び、そこで得た知識や感動を手掛かりとして、より魅力的な学習を子ども達に提供すべく、書写や世界遺産学習、さらには国際理解学習といった授業に活かしたいと考えてプログラムに臨みました。

具体的には、韓国の小学校における漢語学習や学校教育における書法の位置づけに興味・関心がありました。また、韓国にける美術館・博物館等の文化施設の教育的な利用と学校教育との連携という点についても現状を知りたいと思っていました。韓国にある文化遺産や自然遺産が、ESD という観点から、地域学習や諸学習にどのように取り入れられているかの好事例を学び、今後の奈良市における世界遺産学習等に活かすことを今後の課題にしたいと考えていました。

2) 特に印象に残ったこと

大きく二つ挙げられます。まず一つ目は文化・歴史の地の見学です。私にとって、今回は初めての訪韓でした。日本の歴史に深く影響を及ぼした隣国の、現在の都市や郊外の雰囲気を体感することはもちろんですが、文化・歴史の地を訪問することを何より楽しみにしていました。ソウルにおいては李氏朝鮮王朝時代の歴史を、場所を移しての慶州においては新羅の歴史を、そして慶尚南道においては伽倻の歴

史の地をそれぞれ辿ることができました。南に下るほどに、日本と、そして地元の奈良との歴史的な繋がりを感じることができました。

そして、二つ目にはプログラムで出逢った方々との交流です。日本各地から参加された参加者の方々は、学校文化の違いや共通点、特色も含めた興味深い情報交換ができました。さらに、韓国現地スタッフの方々との交流で、現韓国の生きた文化を学ぶことができました。こうした方々との出会いがあり、本当に楽しく、「濃厚」で、充実した 10 日間を過ごすことができました。

3) プログラムを終了して

この報告紙面に綴りきれない学びと感動がありました。帰国後は教育現場で日本の子どもたちへの実践に、この学びを出来る限り生かしていきたいというモチベーションが得られました。

教育行政の情報化 山本 泰久

全体としては、韓国の歴史・文化・教育現状等について、実際に見て聞いて肌で感じ体験できたことは自分にとって今後の人生についてプラスになると思う。

韓国の教育現状については、白紙の状態であったが資料や学校訪問・ホームビジット等を通して少しは認識できたかと思う。

「私教育費」の負担を軽減する施策として「放課後学校」が実施されているが、それでも学習塾・家庭教師などの習い事に通わせている家庭は多く、「質の高い教育を子どもに受けさせたい、子どもの教育のためなら出費が嵩んでもよい、いい大学に入学していい会社に就職してほしい」という思い・願いは特に強いように受け止めた。

韓国政府においても、ICT における教育について積極的に取り組みを行っており教育行政の情報化は世界トップレベルではないかと思う。今後はますます子ども・親ともインターネットを活用していくことになろうかと思うが、逆に健康的で心豊かな人材を育て教育が失われていかないかと心配である。

韓国の文化・歴史については、今回の訪韓がなければ知る余地もなかったところかと思う。当町の地域ともゆかりがあるかもしれない伽耶文化などは興味深いものであり、日本文化だけではなく世界の文化に触れられたことは自分自身にとっても少し視野

が広がったこととなり、これも1つの国際理解に結びつくかと思う。

学校訪問、韓国文化・歴史の地探訪、ホームビジット等多くのことを体験することができたが「百聞は一見に如かず」ということわざがあるように、何回も韓国教育・文化等のことについて聞かされても頭には入らないと思う。やはり本当に実際に見て・感じることによって得るものは大きく、何よりも体験できたことは自分にとって目に見えない財産であり今後の教育行政に生かしていきたい。

来年1月に予定している当町での韓国教職員の受け入れでは、今回受けた歓迎以上に訪問団を出迎えられるよう努めていきたい。

国家、社会をあげて人材養成 大和 晃二

韓国への渡航経験は何度かあるが、今回は観光だけではわからない韓国の学校現場やそこで学ぶ子どもたちの生き生きとした姿を見学し、教育関係者の考え方や悩みについても学ぶことができ、得難い体験ができたと思う。生活指導や進路指導も含めて生徒の面倒を見ていくのが、日本の教師のあり方である、以前、韓流映画で見た韓国の教師は、生徒の生活指導のために映画館に入り、生徒を補導していた。訪問前に、実際はどのようなのであろうか、と疑問に思いながら研修に参加をした。

11日間の研修を終えての実感とは両国の教育には本当に似ている面もあるが、その目標を実現する方法がかなり違うというのが実感である。主席教師制(日本の主幹教諭)や小学校での英語教育、創造的な体験活動(総合的な学習の時間)、学校給食の無償化、高校平準化政策(日本で言う合同選抜)と学校選択制の導入、大学受験の加熱ぶり、家計を圧迫する私教育の費用(塾や予備校)、学校経営委員会(学校運営評議会)、不登校やいじめ、何れもわが国でも、導入が論議された制度であったり、解決が叫ばれている教育問題である。しかし、韓国の方が、方針が徹底しており、ドラスティックに改革を行っているように感じた。韓国の先生方から「先進国である日本から学びたい、日本ではどうなのか」と尋ねられることもあったが、韓国の方が先行している分野が多いように感じた。これは、資源がなく日本よりも人口も国内市場も小さな国が国際社会で工業国として生きていくためには、国家、社会をあげて人材養成

をしていくことが何としても必要だという強い国家意思からくるものではないだろうか。

研修を振り返ってみて、今回、日本の教育と韓国の教育を客観的に比較する機会を得ることで、改めて、日常の自分の行っている教育活動の意義について問い直すことができたように思う。

また心に残るのは、どの訪問先でも、歓迎の横断幕や多くの先生方の出迎え、一人ひとりの名札や韓国の伝統菓子、飲み物のもてなしやお土産など心からの歓迎を受けたことである。両国の歴史的な経緯や、様々な難しい問題はあるが、他者に対して、誠実、敬愛の念を持って接しようとする韓国の人々の心を感じ取り、人と人との交流の大切さを改めて感じた。

放課後学校のシステム

吉田 弥

初めて韓国を訪ねる者にとって、実によく考えられたプログラムだと感じた。日本での事前学習会で前年度の報告や韓国の最新教育事情を知り、ある程度の予備知識を持って現地へ入ることができた。訪問する学校の規模や校種、教育機関、教育施設も多様であり、また、韓国の歴史や文化、自然を理解するための見学先も精選されていると感じた。また、ホームビジットが設定されていることで、一般的な韓国の家庭の様子、子どもたちの帰宅してからの様子を肌で感じることは大変有意義であった。10日間という限られた日程の中でバラエティーに富んだプログラムで大変充実していたと思う。

訪問先の学校では、どの学校でも温かで心のこもった歓迎を受けたのは大変うれしかったが、歓迎セレモニーや出し物が簡素化され、授業を自由に参観したり、子どもたちや教職員とじっくりと話したりする時間が十分確保できればさらによかった。また、教育行政機関訪問や教育施設の見学は韓国教育を理解する上で必要ではあるが、現場の教員としては学校を訪問している時間がもっとあるとよいと思った。特に、放課後学校のシステムの説明を聞き大変興味をもったが、実際の様子を見ることができればよかった。また、公教育ではないので難しいかもしれないが、私教育の部分(塾で子どもたちが学習している様子など)も実際に見られたらよかった。

B グループ

多くの人との出会い

本多 成人

今まで韓国のことをあまりにも知らなさすぎる自分がいた。プログラムで、ソウルにある教育博物館や順天女子高校の歴史館を見て、自分の中では忘れていた日本が韓国を統治していた時代があったことを思い出した。日本人が原爆のことを忘れないのと同じように韓国の人にとって日本統治のことは忘れないものだろう。そんな意味から今回参加した意味は大きかった。

日本では韓国の受験競争のことが報道されている。韓国では受験競争を緩和するために国を挙げて様々な施策を打ち出し、それもすごいスピードで実施しているのには驚かされた。

初日のユン先生の講義「最近の韓国教育の改革動向Ⅱ」で韓国教育界のあらましがわかり、全羅南道教育庁で主要事業や重点課題を聞き、それを受けて実践を行っている高校と小学校を訪問できたことで行政と教育現場が一体となって教育を推進していることがとてもよくわかった。順序立ててわかりやすい構成プログラムでよくできていると思った。

また多くの人との出会いがあった。李協力事業本部長をはじめとする韓国スタッフの人たち、ホームビジット先でお世話になった家族、訪問した学校の先生方と子どもたち、順天市長をはじめとする教育庁のスタッフ、報告会においでいただいた順天女子高校の校長先生、そして同行した仲間と ACCU のスタッフの皆さん。多くの人との出会い話をする中で、自分自身が感化され成長していくのを感じた 10 日間であった。

初めの一步の意識が高い韓国の生徒 藤塚 正

(1) 参加するにあたっての課題や抱負

私の勤務する学校がある多摩市は、高度経済成長と共に首都圏のベッドタウンとして、既存の丘陵地を切り開き水と緑の豊かな自然に恵まれた街作りに取り組んできました。そして、快適で便利な住宅都市建設が計画的に進められてきました。こうした中、現在では、都市の自立を図るために、いままでの住

宅を中心とした単一型都市から、業務・商業・文化・情報・交通など様々な機能を整備し、地域の「心」としての多機能複合型都市を目指した街づくりを進めています。また、多摩村であった頃からの農村の伝統文化も引き継いでいる街です。このような多摩市は、公立の小中学校が多摩市全校で ESD の取り組みを始めました。

ESD の研修会には何度か参加し、ESD の重要性を意識するようになりましたが、今回の本格的な交流事業に参加させていただく機会に感謝すると共に学んできたことを現場や地域等に広く発信してゆくことを目標の一つにしました。

(2) 特に印象に残ったこと

「百聞は一見にしかず」と言われますが、まさしくその通りで、今回のプログラムで経験した一つ一つの内容は、何一つ無駄がなく貴重な体験となりました。また、韓国の街や自然、現地の人たちとのふれあいも直接体験したから学ぶことができた一生の宝物となりました。

未来社会を構築していくのは、紛れもなく全世界の一人一人の人間です。危険社会と ESD を考える中で、教育の重要性が再認識できました。今回訪問した学校の施設や教育内容、そして教職員や生徒の意識の高さには、たいへん驚きました。何よりも生徒と先生が生き生きしていました。日本のけん玉、おはじき、駒、おちゃらか、浴衣の着付けなど交流授業がありましたが、生徒は進んで体験し、とても楽しそうでした。韓国の生徒は、日本の生徒よりも、取り組んで見ようとする第一歩の意識が高いように感じました。

ホームビジットでは、韓国の心暖かな家庭の雰囲気や一人一人の優しい人柄を感じ取ることができました。金 大松（キムハンソル）さんは、日本語でお礼のお手紙をくれ、また、日本語で話しかけてくれました。父の金 東連（キムトンヤン）は、国語の先生だったこともあり、漢字が詳しく、日本との歴史に関して関心を持たれていました。改めて両国の友好と相互発展の重要性を感じ取りました。夕食はすべて、母の眞心（チョンチシム）さんの手料理をいただきました。韓国での誕生日は、人を呼んだ日だそうです。また、東連さんが手配してくれた宝海 純の果実酒をいただき大満足でした。また、今回は、高校の国語の先生（教育委員会所属）で叔母さんにあたる英玉（ソヨンオ）さんが、通訳してく

れました。ソヨンオさんは、第1回のACCU交流事業で韓国の教員代表として訪日していただきました。改めて縁の深さを感じました。また、お仕事の中なのに、仕事の合間に通訳にきてくれました。21時過ぎなのに、勤務校の高校を見せにつれていってくれました。生徒はまだ活動していて、バスが待機していました。ライトアップされた沼地見学も忘れられません。

ソヨンオさんの親切にも感謝の限りですが、彼女は、九州大学の大学院で日本語の勉強をしていました。「日本でお世話になった恩返しです。」といって、日本で購入したトヨタ車で、ホテルまで送ってくれました。金さん一家が、訪日したら、今回お世話になったこと以上のお礼をしたいと思います。また、今回の感謝の気持ちは、異国文化でふれあうあらゆる人にしたいと思います。

最後に、夜遅くまで学校で勉強し、さらに塾や家庭学習をして、深夜1時頃まで勉強している生徒の皆さんに質問した「勉強は何のためにするのか？」に対する回答に、保聖女子中学校の生徒会長さんが、①「未来に向けて夢を叶えるため。」、②「世界の困っている人を助けるため。」、③「良い大学に行くため。」の順番に回答されました。あまりの意識の高さにびっくりしました。また、「夜遅くまで勉強していると嬉しい。」と答えていました。

今回の交流事業を通して、小さな行動が地域を変化させ世界への変化と結びついていく、「私の変化が世界を創る。」

こんな気持ちをもてる未来人を教育する必要があると思いました。

ユネスコスクールから学んだこと 濱中 葉子

本プログラムにおいて私は次の二つの課題を持って臨んだ。一つ目は韓国の英語教育の視察を通して、高いレベルの英語教育をどう実践し、維持しているのかを知ること。二つ目は勤務校が今年からユネスコスクールに登録されたので、今後ユネスコスクールとしてどう取り組み、教育環境を整えていくべきかを考えることである。

一つ目の英語教育については、残念ながら、中・高等学校の英語の授業をじっくり見て回る時間がなかったのも、正直言ってあまり知ることができなかった。しかし、廊下ですれ違う韓国の生徒たちが「こんにちは」や「Hello」と挨拶してきたり、私が英語

で質問したことに対して、臆することなく知っている英語で答えようとしてくれたりしたことは驚くと同時にとても嬉しく感じた。未知の人に対して、日本の生徒より積極的にコミュニケーションがとれるように感じた。その辺りに韓国の英語教育の成功があるように思った。

二つ目のユネスコスクールについては、韓国のユネスコスクールの理念にもあるように、「私たちの小さな変化が世界を変える」という意識を持たせることが大事だと感じた。ユネスコクラブとしての活動やボランティア活動などが参考になった。

印象に残った交流は学校訪問とホームビジットである。小・中・高等学校、特別支援学校を訪問して、予想していた以上に、韓国という国が教育に熱意と予算を注いでいるということに驚いた。訪問したそれぞれの学校は各教室にコンピューターやスクリーンの設置は当然であり、空調設備も整っていた。また、質の高い教育を提供したいという韓国の先生方の熱意が伝わってきた。

学校訪問の中で、特に授業交流が印象に残っている。訪問させていただいた中学校では、中学生に浴衣の着付けをすることで、直接話をすることができたし、浴衣の説明をすることもできた。また、小学校の音楽の授業に参加させていただいたときは、日本の民謡「ふるさと」を一緒に歌い、手遊びの「おちゃらかホイ！」を児童と一緒に楽しんだ。児童・生徒と直接交流することが、韓国を知る近道であるように思った。

学校教育の成果を感じた学校訪問 平元 舞

昨年度、韓国教職員の方が本校に訪問されたときに、韓国の先生を私の家にホームビジットでお招きしました。それまで、韓国の方との交流がなかったのですが、その経験を通して韓国に対する興味をもつようになりました。韓国は教育に大変力を入れていて、親の子どもに対する期待や教育への投資が大きいと聞いていました。韓国の教育の実情を見てくると、また、韓国へ行き、様々な交流をすることで自分の教養を深め、識見を高めたいと思いました。そして、日本の先生同士のつながりを作ること、地域・県を問わず、全国的・国際的な視野で教育を考えていけるようになりたいと思いました。プログラムを通してたくさんのことを経験させていただき、

1日1日が充実していて、これと取り上げることは難しいですが、次の2つがとくに印象に残っていることです。

1つ目は保聖女子中学校で生徒・教師と懇談したことです。保聖女子中学校の生徒の学習意欲の高さに驚きましたが、懇談会のときに、日本の教員から「何のために勉強していますか。」という質問に対し、生徒会長が「目標を達成するため。」「人助けをするため。」「よい大学に入るため。」と堂々と答えたことに、この学校の教育の成果の一端を見ることができました。また、子どもたちの中には「こんにちは。」「かわいい。」などと、日本語を使ったり、英語を遣ったりして話しかけてくる子どもがいました。中学生の段階でこのように日本語や英語を使えることはすごいと思いました。その点においても学校の教育の成果を感じました。

2つ目は海龍初等学校に訪問したことです。私が小学校勤務であるため、韓国の小学校はどのようなものなのかとても興味深いものでした。校舎に入っただけの玄関の造りや、校内の設備が充実していることに驚きました。しかしそれには、市をあげての教育予算が投資されているものだと知り、この町の教育に対する熱意と、韓国民の教育に対する学力向上の意識の違いを感じました。また、海龍初等学校の4年生の子どもたちと韓国と日本の民謡を歌い、交流したことは、とても心に残っています。国は違っても、子どもたちの純粋さや真っ直ぐに取り組む姿勢は同じであるということを感じることができました。

持続発展教育のパートナーとして 稲垣 成光

今回のプログラムにおいては、事前にオリエンテーション及び韓国での教育動向、ESD教育について学べたことは、事前の準備として大変効果があつたと考える。

まず学校訪問では、ていねいな学校紹介により教育の概要が良く分かり、教育目標に反映された子どもたちの実態を垣間見ることができた。特に、子どもたちとの交流の機会を設定していただいたお陰で、子どもたちの背景にある教育事情を感じ取ることができた。また、教職員との意見交流会などを通じて、国は違っても同じ教育に当たるもの同士の情熱や悩み、疑問について共有しあうことができた。さらに、順天市の歴史的建造物や文化遺産、自然遺産などを

市民の住環境に効果的に生かした都市づくりと人づくり、そして、未来志向型の発想は、子どもたちに夢や展望を持たせ、将来地域のために貢献しようとする市民の育成に直結しているものと深く感銘した。

一方、私たちを温かく受け入れてくださった順天市のホームビジットのご家庭では、膝を交えながら韓国の郷土料理に舌鼓を打ちながら楽しく会話することができ、大きな財産となった。そして、この出会いを通じて韓日両国への親近感をお互いに一層深める機会となったものと感謝している。

当然、今回の10日間の訪問だけで韓国の教育の全体像が分かったわけではないが、21世紀が教育の世紀といわれる中、今後、韓国との友好協力関係を教育を通じて一層発展させながら、持続発展教育の推進に向けて世界をリードできる関係でありたいと強く感じたところである。さらに、韓国での豊富な研修だけに終わらず、全国から参加した教職員や行政関係者との交流を通じて、日本全国の教育の現況及び方向性についても研修できたことは、何よりも得がたい経験であった。

学校と行政との連携

石原 伸浩

本プログラムに参加するにあたり、3つの課題の設定がいずれについても、学校訪問や教職員交流、ホームビジットなどを通し、日韓の共通点と相違点の中から学べたことが意義深かった。(詳細は〔成果〕参照)

特に、ホームビジットや歓迎晩餐会等での直接交流の中で、韓国の教員一人一人が使命感を持ち、意欲的に教育に取り組んでいることがよく伝わってきた。「教育は人なり」という言葉は使い古された言葉であるが、改めてこのことを感じさせられた10日間であった。施設面等の充実には大変うらやましさを感じたが、ハード面の充実だけでは教育は成り立たない。教員の能力、資質の向上はどの国にあっても教育の基盤であることを再認識させられた。

教育委員会からの参加ということで、学校と行政(市)の関係についても大きな関心があった。韓国の良さは、行政の教育方針の具現化を各学校が行っているという点にある。各学校の教育の重点は、いかに行政の教育方針を実現できるか、というところにあると感じた。行政・学校が、同じ目標に向かって進んでいる印象がある。一方、日本の教育の良さ

は、各学校が自分たちの学校の課題と特色を見極め、特色を生かし課題克服に向けて教職員が一致して進んでいくところにある。トップダウン的要素の大きい韓国に比べ、ボトムアップ型の教育が日本と言える。

質の高い教育を提供していくために、韓国教育の特色から学ぶところが大きいと感じた。

幼稚園における ESD

石井 希和子

昨年、自園がユネスコスクールに登録されましたが、ESD についてまだまだ知らないことが多いので、知識を増やしていきたい、また教育熱心な韓国では幼稚園と小学校がどのように連携されているのか知りたいと思い、課題・テーマを設定しました。

このプログラムに参加させていただいて、一番強く感じたことは‘韓国がとても近い国’であることです。さまざまな学校施設や文化施設、世界遺産などを見学させていただいて、日本と似ていることも多く、日本にいるような気持ちになることもありました。衣食住においても似ているところが多く、韓国の方については、とても優しく出会った方々はとても親日的でした。イ・ソンジェさんが、「日本人には親しみを感じ、会えることがうれしい」とおっしゃられましたが、私も韓国人に対して、同じような気持ちを持つことができるようになった気がしますし、それをとても嬉しく思います。

また、フォーラムでの韓国の ESD に対する講義や学校訪問を通して、ESD は将来を担う子どもたちにとって、とても大切な活動であるということを、改めて感じました。幼児期の子どもはたくさんのに興味を持ち、吸収する力もとても優れています。幼児期に過ごす幼稚園でしっかりと伝えていくことで、ESD に対する芽生えを身に付けさせていかなければいけないと感じました。

10 日間で本当にたくさんの人と出会い交流を持つこともできました。フォーラムや見学地での韓国の先生方やガイドの方、ホームビジット先のご家族、学校訪問での子どもたち。たくさんの笑顔や優しさに触れることができました。

ESD と障がい児教育

菊池 亨

私は韓国へ行く前に、「障がい児教育」、「人権教育」、「外国語教育」をどのように行っているのか知りたかった。

第一に「障がい児教育」である。フォーラム中、韓国の教育動向で障がい児教育に関して少ししか取り上げられていなかったが、今日は障がい者福祉等に力を入れているとのことで、ESD と人権教育（障がい者の人権）の観点から話を聞いてみたかった。特別支援学校では、2、3 時間の訪問で終わってしまったが、ここでは多くのことを学んだ。その一つが「右側通行キャンペーン」である。キャンペーン運動中は徹底的にそれを遵守するように指導を行い、生徒にそれを意識させた行動をとらせることである。勤務する学校全体でキャンペーン運動等を行うことは難しいかもしれないが、学級や学部単位なら何かキャンペーン運動ができるかもしれない。児童生徒たちが目標を決め、それを実行することは必要であると考えているため、見習いたい取組であった。

第二に「人権教育」である。今回は危険教育と ESD であったが、人権教育と ESD も興味深いものである。わが国と韓国は、ともに年間自殺者数が多く、一人ひとりを大切にした教育を学齢期から発達段階に応じて行うことが必要であると考え。今回は危険教育と ESD がテーマであったが、機会があれば人権教育と ESD の取組について情報交換を行い、それを実践と摺り合わせができればよいと考える。

第三に「外国語教育」である。初等学校、中等学校、高等学校での授業を拝見したが、どの校種でもヒアリングやスピーキング中心に展開され、実践的な授業に努めていたことが印象的である。ただし、都市部の学校と田舎の学校とで外国語のスキルに格差があるなど感じた。たとえば、ソウル市内では大体英語も通じたが、順天市内では英語が通じない等を感じたことである。生徒の英語能力の実態もそれに準ずるものを感じた。

今回のプログラムを通じて多くのことを学んだ。実践を行うときはそれらを踏まえ、フィードバックやフォローアップに努めた指導を行いたい。

人の温かさ

木村 正太

今、プログラムを終えてみて、改めて振り返ると、私が期待した以上の充実した 10 日間であったと実感している。

本プログラムを通して最も有意義だったことは、10 日間すべての時間で「人の温かさ」に触れることができたことである。私個人としては、初めての海外ということもあり、目で見たもの、肌で感じたもの、それらすべてが新鮮で、今までに感じたことのない興味と刺激を受けた。特に、ホームビジット先での順天女子高等学校生徒との学校での再会は、言葉ではなく気持ちで会話でき、お互い同じ人間であることを感じる事ができたとても貴重な時間となった。

その他、韓国ユネスコを中心とした韓国のスタッフの方々や、街へ出かけた時に会った韓国の方々のやさしさがうれしく、とてもありがたかった。歴史や社会状況など、日韓関係にはさまざまな事情があると思うが、お互いを認め、理解した上で、協力し合うことの方がもっと大切なのではないかと強く思った。

そのような人とかかわりが素晴らしかった本プログラムであるので、学校訪問ではもっと子どもたちとかかわる時間が欲しかった。実際に、子どもと一緒に歌を歌ったり、手遊びをしたりした学校は、韓国の子どもたちを直に感じ、表情などを見ることができた。その様子から韓国教育の成果を感じることもできたように思う。

また、本プログラムでは韓国の方々だけではなく、他の日本から参加された方々との出会いも、大変素晴らしく、有意義であった。特に、宮城県気仙沼市から参加された方との出会いは特別だった。プログラム終了後、私は島に帰る船が出るまで数日の時間があった。その時間を利用して、実際に気仙沼を訪ね、この目で震災から半年後の気仙沼を見てきた。その際に、夜泊めていただいただけではなく、学校訪問もさせていただいたり、小学校の子どもたちに小笠原を紹介する授業までもさせていただいたりした。子どもたちとの時間は本当に楽しく、そのパワーから元気と勇気をもらった。実際に見て感じたことを小笠原の子どもたちの口から伝えたい。

以上のことをはじめ、本当にたくさんの素晴らし

い方との出会いがあったプログラムだった。その、「人の温かさ」や「韓国の文化」など、私が見て、聞いて、感じたことを子どもや同僚に伝えていきたいと思う。

子どもたちに還元できる体験

近藤 麻里

- ・隣国である韓国の教育の取り組みについて、生の現場をみて、生の声を聞いて学べることは、メディアに頼る情報よりも大変価値があり、尊い。
- ・教育における悩みは、国が違っていても共通点が多いことがわかった。
- ・韓国が大切にしていることを知るなどし、他文化理解につながった。また、この経験は日本の自校の子どもたちに返していけるよい機会となった。
- ・ユネスコの取り組み、ACCU について、他文化であり、PISA テスト 1 位の韓国の教育について等、多くのことが学べた。生で見聞きできたことは、実感を伴った体験として、子どもに返していくことができ、これからの実践につなげていくことができる。
- ・内容がもりだくさんで、それぞれの時間が短く、「もっと知りたい」という希望が満たされていない。

3つのありがたさ

黒飛 雅樹

プログラムを通して感じたのは、①生の韓国に触れられるありがたさ ②生の韓国の学校で生徒・教職員と触れられるありがたさ ③全国から集まった日本の先生と触れられるありがたさを感じました。

①生の韓国に触れられることについて。まず、KNCU のスタッフの方やフォーラムや懇親会に参加して下さる先生方、ホームビジットで受け入れて下さった御家庭、どの方も「人」として温かかったです。また公式プログラムの後に自分たちで動くことができる時間が多かったので、そこで一般の方との交流や観光では行く機会のない場所に寄ることができたことも貴重な経験でした。

②生の韓国の学校で生徒・教職員と触れられるありがたさについて。まずホームビジットで受け入れて下さった御家庭とはとても貴重な時間を過ごせました。家庭料理をいただいたり、学生の日を直接知ったり、また買い物に連れて行ってくださり、そこで食材やお土産一つ選ぶにしても、そこでの会話が

貴重な経験でした。その生徒さんのいる学校に翌日訪問できたのもとても良かったです。ソウル精進学校での一人一特技、順天女子学校などでの教科教室制など先生方が子どもたちの可能性を伸ばしたいと思う気持ちは同じで、アプローチが違うことを肌身で感じました。

③全国から集まった日本の先生と触れられるありがたさについて。日本にいて公開研究会などに参加させていただいてもなかなかこんなに多くの先生と話したり行動を共にする機会がありません。学校の実態や実践など直接交流させていただいて、とても貴重な機会を得られました。

外に発信する ESD の重要性

松本 和子

韓国での 10 日間は長いような気がしていましたが、振り返ってみるとあっという間でした。限られた時間の中で、韓国の教育や様々な文化や習慣に触れることができた貴重な体験でした。

一番に印象に残っていることは、韓国の ESD は外に向かって教育がなされているということです。それはボランティア活動であったり、国際社会を意識したコミュニケーション力としての英語や討論する力の育成であったりだと思います。順天市の海龍初等学校では、自分たちが育てた白菜や大豆を使って、キムチや味噌作りをしていました。そしてさらにすごいのはそれを地域の低所得者やお年寄りに配布するという活動を行ったところです。本校の ESD でも、似たような体験活動に取り組んでいますが、成果（この場合製品）を地域に返すということはしておらず、自分たちの中で完結していました。しかし、今回の学校訪問で、自分たちが体験して作った物を地域に返すことや、外に向かって自分たちの ESD の取り組みを発信することの重要性を感じました。こういう小さな活動が、身近な地域に広がり、さらに世界を動かす活動につながって、国際人・地球人としての意識を育てていくのだと思いました。

また、いろいろな人とのコミュニケーションのツールとして、レベルの高い英語活動や ICT 教育の推進にも驚かされました。シンガポールの教育が英語に力を入れていると聞いていましたが、韓国でも小学校 3・4 年は週 2 時間、5・6 年は週 3 時間と時間数を増やす取り組みがされていました。幼稚園から身近にキーボードに触れさせ、その後一人に 1 台

の PC での操作や PC を使った授業をしていくのはすばらしいものでした。同じアジアの国々が世界を意識して英語教育に力を入れている現状を知ることができ、日本ももっと英語教育を推進していくべきだと思いました。しかし、これにはかなりの予算が必要であり、韓国では、国自体が子どもの教育に力を入れているのだと改めて思いました。

最後に今回一緒にプログラムに参加した先生方との交流も私にとって、大きな収穫でした。いろいろな校種の先生方と話し合う中で、幼小中高の縦のつながりを大切にする重要性を再認識できました。また、都道府県を越えたネットワークができ、この研修で得た ESD 教育を広める活動に取り組んでいきたいと思います。

目標を持った韓国の児童・生徒

松岡 清貴

開始前、私はいくつかの課題を設定しましたが、その中でも特に「韓国の英語（外国語）教育の現状を知る」という点が印象に残りました。

海龍小学校を見学した際、小学校の掲示物や中学年の授業の様子など、児童を取り巻く教育環境に関しては、教科書があることを除けば、日本でもよく見られる光景だと思いました。

つまり、スタートは、ほぼ同じはずなのにも関わらず、中学生くらいになるとその差は歴然としていました。

私がホームビジットで訪れたお宅にいた中学校 1 年生の子は、日本人である私たちと日常的な会話をする程度であれば、何ら問題なく、むしろ私たち日本人よりも積極的に知っている単語でコミュニケーションを取ろうとしていました。また、その中学生のお姉さんに至っては、英語はもとより、日本語が堪能で、私がホームビジットのお礼として出した e-mail に対して、即日、漢字仮名交じりの流暢な日本語で返信してくれたことには、ただただ驚かされました。

ではどうしてこのように差が開いてしまったのかを考えたときに、教育に対する人材や設備云々の差を除けば、児童・生徒達が、勉強の必要性を感じ、目標をもって学習に取り組もうとしている点に、韓日で大きな相違が生じているからだと思いました。学校訪問で訪れた先の中学生は、「未来に向けて夢を叶えるため、困っている人を助けるため、そして良

い大学に入るために勉強している」と話してくれました。勿論、優秀な学校の生徒の回答と割り切ってしまうとそれまでかもしれませんが、私にはこれが韓国の大半の学生達の考えであり、夢や志をもたせ、児童・生徒が主体的に学ぼうとする教育を提供していく点が韓日の大きな相違だと思いました。

では、どうやってこの問題を解決していけば良いのかを考えました。参加者として、一緒に行動を共にした文科省の方に、「今後、日本が進むべき方向性は韓国のようなスタイルか、あるいは日本が今後進める脱ゆとり型が良いのか」と質問した際、「一概にどちらが良いとは言いきれない。学力主義とゆとりの中庸が良いのだろうが、はっきりと『こうする』ということは言えない」という答えが返ってきました。「バシッとしたことを言うことができれば良いのですがね…」と言われ、少し残念に感じた反面、これからの教育の方向性を早急に確立しなければと思いました。

今後、日本の各学校が独自のスタイルを模索し、益々、各地方自治体の教育差が開いていくのではという懸念がありますが、私がやるべき事は「韓国は学習に対して熱心であり、日本が見習っていくべき点が多々ある」ということを周囲に伝えていくこと、そして目の前にいる子ども達に良質の教育を提供していくために、教材研究を熱心に行うということを切に思いました。韓国の先生方のように…

新しい交流関係の構築

森内 直子

1月に韓国教職員の方々をお迎えし、先生方と意見交流を持つことができました。それがご縁で、今回のプログラムにお招きいただき、大変貴重な体験をすることができました。本校を訪問してくださった時、メモを取りながら見学されたり、意見交換の時には英語教育や英才教育、受験対策、教職員の勤務体制などについて熱心に質問されていました。このようなお姿から子どもたちのためによりよい教育したいという意気込みを本校に残してくださり、私自身韓国について学びたいという気持ちがおきました。

4つの学校や教育庁の訪問が印象に残ったのは交流の場でした。お互いの教育事情の共通点や相違点から学ぶことがたくさんありました。韓国は、国家主導型のもと、行政と学校が緊密に連携し合って教育が実践されていました。特に低所得者家庭や障害

者、農漁村地域にも質の高い平等な教育を行うために莫大な予算を投入し、国が一丸となって次世代を育てることに一生懸命であることに感銘を受けました。

また、特に印象的だった意見交流は、女子高校生との懇談会でした。生徒へ向けて「何のために勉強していると思いますか」という質問を投げかけたところ、「夢をかなえるため・困っている人を助けるため・良い大学に入るため」と生徒会長が堂々と答えたことには、各自の目的意識をもって勉強している自立した生徒の姿を見たような気がしました。

また、どの学校を訪問しても心温まるおもてなしをうけ、相手を大切にできる精神がみなぎっていました。加藤先生が最終日におっしゃっていたように「日本が失いかけている未来の子ども像が韓国にはある」とおっしゃっていました。同感です。地球サイズで物事を考え、連帯していくこれからの時代にあって人と人との絆をもっと強化していきたいと思いました。

このようなESDの深化のプログラムや韓日の交流は大変有意義であったと思います。過去の戦争の傷跡によってお互いにマイナスの先入観を抱えていると思いますが、この体験によって、特に「出会い」によって、過去にとらわれず、未来の子ども達の人材育成のために、「今」という時に新しい交流関係を構築していくことこそが大切だと思い、今後の韓日交流に対する意欲が高まりました。また、10日間も一緒に学びあった教職員の皆様との絆も深まり、自分の学校ということに囚われず、日本の青少年の教育という広いヴィジョンに立って、一致し、共通認識がもてたことは大変意義深いことだと思いました。

人を育てるという意気込み

長山 誠也

事前オリエンテーションで、本プログラムに参加するメンバーと集い意気投合し韓国の訪問に対する不安も少し取り除けた。まず、最初に韓国教育の改革動向を聞き、競争力をいかに重視してきたかが分かった。そして競争力を重視する傾向がエスカレートして教育の格差が拡大していったことも分かった。あらかじめ韓国の教育事情を学んでいたもので、訪問先での交流や施設見学ができ有意義であった。

韓国の教育体制について、初等教育における学力向上の指導体制や、中等・高等教育における放課

後学校等の実施により学力をアップさせているということを知った。事前の説明会では児童・生徒に合わせたオーダーメイド型の指導を行っているということ。一人一人の児童・生徒に何が必要なのかを把握し、その児童・生徒に合わせて支援を行うということ。特に驚かされたことは、全校児童無料放課後学校プログラムである。それに関わる人材確保、協力教員や補助教員などを地域から採用し、個人のレベルに合わせたきめ細かな指導を展開していた。学習遅延児がいなくて驚かされた。

韓国の教育施設設備、教育機器の充実度について、教育現場での電子機器の活用が盛んであると聞いていたが、今回の訪問先の学校施設設備を見ると、各教室にはコンピュータと電子黒板やモニターが設置され、それらを有効に活用して指導を行っていた。図書室も過ごしやすく、図書も充実しており、それらを活用して討論の授業を展開していた。また、特別教室は学習活動の内容によって細かく分かれていたことに驚いた。

今回の訪問で私自身が得たことは、先進的な指導体制とそれを支える人、施設の充実度、それに伴う教育にかかる費用が日本とは大きく違い、これからの人材を育てるという意気込みを感じることができた。また韓国の先生方や生徒と直接話をするのができ、教育事情についてくわしく知ることができた。そして日本各地から参加された方々と、貴重な体験を共有できたこと。

都道府県を越えたネットワークづくりができたこと。この経験を通して仲間となったことを嬉しく思い、この和を継続するとともに、この研修で得た ESD 教育を広めていく活動を推進していきたいと考える。

外に目を向けると自分がわかる 小原 愛子

今回のプログラムでは、学校訪問を軸に、文化遺産の見学やホームビジットなど、様々な体験ができるように計画されていた。どの体験の中でも一番ためになったのは、その場にいる「人との交流」であった。目で見て感じるものももちろんたくさんあったが、現地の人に聞く話が何よりも刺激的で説得力もあり、多くのことを考えさせられた。

学校の果たす役割は総じて日本と大きな違いはないと感じたが、今回訪問した多くの学校では、学校独自の工夫がかなり盛り込まれており、それは学校

の活動実績により予算配分が変わってくるという制度によるところもあるようで大変興味深かった。ユネスコスクールとして地域とどのように関わり活動しているかを具体的に教えてくれた学校もあり、勤務校で生かせるのではないかなと思えるものも見つけられた。また、全体での質疑応答や意見交換の場はどの学校訪問でも設けられていて、その意見交換は大変有意義であったと思う。しかしグループ討議などで個人的な意見交換をする場は少なかったため、教育面でどのように日韓が協力していけるかということについて直接伺うことができなかったことは、少し残念であった。

英語教諭として、「外に目を向けると自分のことがよくわかる」ということは常々感じていたが、今回も期待通り、異なる世界を見てたくさんの刺激を受けることができた。その刺激を具体的にどのように勤務校で生かしていけるか、これからさらに考えなければいけないと思う。10 日間という期間で得た経験は消えるものではないが、何か実践できる形にして残すことが必要だと今感じている。

国内外での良い出会い 及川 篤史

振り返ると、忙しいプログラムだったが、学校訪問もでき、韓国の児童・生徒ともコミュニケーションができ、文化にも触れることができ、とても充実した、そして韓国をととても身近に感じることができた 10 日間だった。

特に全体を通して思うことは、このプログラムでとてもよい出会いが多くあったということである。私は職員なので、普段日本でも他校の先生方と交流する機会がほとんどなく、まず日本の全国各地の先生方に会い、様々な意見交換ができ、プログラムを共に過ごせたことはとてもよい経験になった。そして、韓国でも KNCU のスタッフの方々や、学校訪問でお話しをすることができた韓国の先生・児童・生徒、またホームビジットで訪ねたホヤン先生とご家族など多くの友人を韓国に作ることもできたのではないと思う。さらに言えば、自主研修の際に道を聞けば丁寧に教えてくれた高校生や、食事をしていたら意気投合し、同じテーブルを囲むことになった青年達など、名前を知ることなかった出会いも含めて、いい出会いが多くあった。そしてその分韓国を身近に感じることができたと思う。

より身近な隣国に

岡保 史雄

今回、改めて自分の中の韓国に対する知識を振り返ってみた。韓国のことで知っていることは食生活が一番であった。次に、受験戦争、徴兵制ぐらいであった。一番近い国でありながら、多くのことを知っていなかった。

そこで、このプログラムに参加するにあたって設定した課題やテーマを次のようにした。

- ・韓国の教育の実状と日本との違いを知る。
- ・韓国の家庭生活の様子を知る。

10 日間のプログラムを通じて、この 2 つのテーマは十分達成できたと思っている。ユン・ジョン・ヒョクさんの「韓国の教育講義」によって、韓国の教育状況を詳しく説明を受けた。更に、今後の教育改革についても説明を受けた。それが、教育現場でどのような方策として進められているのか、ソウル精進学校、保聖女子中学校、順天女子高等学校、海龍初等学校と 4 つの校種の異なる学校を訪問して理解を深めることができた。

また、ホームビジットで韓国の家庭生活も見ることができた。ホームビジット先の親子との触れ合いは一生の思い出になる。

これらのプログラムの間に、教育博物館、景福園、民族資料館、迎賓館センター、松廣寺、樂安邑城、仏国寺と韓国微分かを知る機会が多数あり、韓国がより身近な隣国となった。

韓国の教育事情を理解する

桶谷 圭介

個人として設定した課題、テーマ

- (1) 韓国の教育事情や環境について理解する。
- (2) 韓国の ESD の実践例や児童・生徒の活動の様子を知る。
- (3) 韓国の教師や児童・生徒と意見交換を通じて、お互いの考え方の共通点や相違点を知る。
- (4) 韓国の文化や歴史にふれる。

プログラムを通じてすべての課題・テーマを網羅するものとなっており、学ぶことができた内容に大変満足しています。

(1) の「韓国の教育事情や環境について理解する」については、講義や学校訪問を通じて韓国の教育事情や教育環境を理解することができました。韓国の学習熱は高く、放課後学習や学習塾に参加する生徒が多く、また、その機会を教育政策の中で準備することが、教育環境の格差を埋めることにつながっていることが分かりました。また、受験競争の緩和から高校入試が廃止され平準化されたことや学校給食の無償化や特別支援教育における幼稚園から高等部までの義務教育化など韓国の教育事情の一端を知ることができました。訪問させていただいた学校では大変うれしい歓迎を受け、児童・生徒の明るさや学習意欲、教師の熱意に触れ、感動しました。また、施設も大変すばらしく、韓国が教育にかけるものはソフト面、ハード面ともに充実していました。

(2) については、ESD の授業を参観できなかったことは残念ですが、保聖女子中学校の農漁村地域でのボランティア活動やユネスコクラブの活動、順天女子高等学校の順天湾の保全活動は地域の特色や実態を生かしたまさに ESD であると感じました。

(3) については、児童・生徒ともっと話す機会がほしかったです。しかし、保聖女子中学校での生徒とのディスカッションでは、生徒たちは一生懸命学習し、また、夢を叶えるために日々努力をしているということが聞けました。順天女子高等学校では、日本語の授業を参観することで、日本の言語や文化を習得しようとしている韓国の学生が多いことに驚きました。また、韓国の教師は児童・生徒たちを教育するために努力している様子は、当たり前ですが日本と変わらず、児童・生徒が良い環境で学習できるようにしたいという希望を持っていました。これは、学校が高い評価を受けると教育に関することであれば自由に使うことができる資金が国や地方公共団体からもらえ、さらに教育環境を充実させることができるという特性もあると思いました。

(4) については、松広寺や仏国寺、景福宮などの韓国の歴史や韓国の衣食住に関わる文化にたくさん触れることができました。日本との共通点や相違点もたくさん発見できました。

充実した特別教室

小野寺 龍哉

今回のプログラムでは主に2つの視点を持って学校訪問に参加した。1つ目は韓国の初等教育における学力向上の指導体制についてである。中等・高等教育においては、放課後学校等の実施により学力をアップさせているということを聞いていた。事前の説明会では児童・生徒に合わせたオーダーメイド型の指導を行っているということを話された。一人一人の児童・生徒に何が必要なのかを把握して、一人一人に合わせて支援を行うということだった。今回訪問した海龍初等学校では、学習面においては学力向上のために自然環境を生かした様々な体験活動や全校児童無料放課後学校プログラム、保護者公開授業などを行っていた。

さらに、協力教員や補助教員などの活用により、個人のレベルに合わせたきめ細かな指導を展開していた。学習遅延児がいないと聞かされたときには驚きを隠せなかった。

2つ目は学校の施設設備、教育機器の充実度である。韓国では教育現場での電子機器の活用が盛んであるということは聞いていた。今回の訪問先の学校施設設備を見ると、各教室にはコンピュータと電子黒板やモニターが設置されており、先生方がそれらを有効に活用して指導を行っていた。図書も充実しており、それらを授業の中でうまく活用して討論の授業を展開していた。また、海龍小学校では学級数7つ（特別支援を含む）なのに対し、特別教室が28個もあるのに驚いた。その特別教室は学習活動の内容によって細かく分かれており、児童がより高度な授業を受けられるように配慮させていた。例えば英語学習では、会話場面によってファーストフード店や電話ボックス等のエリアがあり実際の場面を想定して会話練習ができるようになっていた。

今回の訪問では先進的な指導体制とそれを支える人や物の充実度が日本の相当上をいっているという印象を受けた。そして韓国の先生方と直接話をすることができ、教育事情についてくわしく知ると共に、教育についての情熱も感じる事ができた。

感想を共有する

齋藤 武

事前に設定していた課題は、高校入試を行わない実情と大学入試ではかなり過熱気味との報道が日本にいても伝わってくる教育事情とについてであった。勿論、10日の滞在でこれらのことが全て把握できなかったが、様々な学校施設や文化施設を見学し、韓国の先生方や生徒との交流を通じて多くのことを学ぶことができた。

印象的であったことは、訪問した学校の施設設備がどの学校も充実したものであったことと各教室に国旗があることにも新鮮に感じられた。訪問した全ての学校で歓迎してもらった。校門前から生徒が出迎えてくれ、先生方は熱心に簡潔に学校の説明をしてくれた。こちらからの質問で「何のために勉強をするのか」という問に対しても「未来に向けて夢を叶えるため」「困っている人を助けるため」「勿論よい大学に入るため」の答えが中学生から返ってきたことは驚きであった。

学校訪問が中心で、意義深い研修となった。特に韓国での報告会の資料作成時に参加された各先生の得たことや感想を共有できたことは大きな財産となった。

海外のユネスコスクール活動を学ぶ

島田 哲弥

韓国に訪問する前は、10日間という日程はすこし長いのではないかと思っていたが、充実したプログラムであり、あっという間に日々が過ぎたという印象である。

韓国の小・中・高・特別支援学校を見学した総括としては次の二点をあげたい。まず、ユネスコスクールの取り組みについてである。私の勤務校はユネスコスクールに昨年度加盟し、現在教育課程の中でどのようにESD教育を行っていくかという課題を持っている。そのような状況の中で、日本国内のユネスコスクールの活動だけではなく、海外のユネスコスクールの活動を知ることが出来たのは大きな成果になった。韓国の教育活動における、国際的な視野や今子どもたちが世界のために何をする事が出来るのかを問う姿勢は、私にとって大きな刺激となった。二点目として、韓国の教育制度について、外か

らではなく、現地の教職員の立場、生徒・保護者の立場から考えることが出来た点である。ホームビジットで訪れた家庭は、高校三年生の受験生を抱えており、自然と現在の教育制度についての話となったが、現在の教育制度について、過酷な受験競争などすべてを肯定的に捉えているわけではなかった。しかし、そうした中でも教職員はもちろん保護者や地域のボランティアなどが学校教育のため、さまざまな支援を行っていることを見聞した。そうした社会条件のもとであるからこそ、国家も教育に予算がかけられ、見学した各学校のように恵まれた施設の中で子ども達も勉強することが出来るのではないかと推測した。このように推測できたのも韓国の教育行政について学ぶだけではなく、中から学校現場を拝見できたからであり、感謝したい。

日本の、自校の教育を見直す機会 鈴木 誠治

プログラム全体を通して感じたことは、韓国の教育に対する熱意の強さである。各学校への訪問では、ハード面の充実ぶりにただただ驚かされた。逆に言えば、もし韓国から先生方を我が校に招いたとしたら、その施設・設備の貧弱さに逆に驚くのではなどと卑屈な感情がわき出てきたほどである。その一方で、中高生が深夜遅くまで学習に取り組むなど、教育熱が過度な進学熱につながっているのではと心配になる面も見られた。韓国の教育現場の視察を通して、我が国・我が校の教育を見直すよい機会となったことは間違いない。

また、プログラム中で韓国の文化や生活に触れる機会があったことは、たいへんありがたかった。文化公演鑑賞で訪れた「ナンタ」ではそのパフォーマンスの高さに圧倒された。ホームビジットでは順天市の一般家庭にお邪魔し、心づくしの歓待を受けた。子どもたちと共にゲームをしたりする機会など、このような旅行でなければまずないであろう。

とにかく、結論でいえば「行ってよかった」ということになる。本プログラムがこれからも永くつづき、日韓交流の架け橋となると共に日韓それぞれの教員に多くの刺激を与え続ける機会であってほしいと願うばかりである。

日韓の教育文化の違いを理解する 田中 正勝

今回の訪韓について、自らのテーマ設定として3つを掲げた。1つ目は韓国の教育制度および学校における生徒指導状況の確認、2つ目は ESD への取り組みについて、3つ目は韓国の文化・伝統に触れるであった。事前の研修プログラムの確認や昨年度以前の報告書等から読み取ることができる内容として、現地における交流プログラムの際に確認したい内容を事前に検討し、様々な手段を通じて事前の情報として得たうえでの渡航を目指した。

1つ目については、本年1月の韓国教職員訪日の際におおよその情報を得られていたため、より具体的な質問内容を提示することができた。また、2つ目については、ESD そのものの在り方や諸外国での取り組みを検証する必要があり、今回の訪韓の際に現場での実践例を確認することができた。3つ目については、ホームビジットの際の触れ合いに集約されよう。習俗はその土地に根付くものであるが、それをいかに継承し発展させているかが、そこに生活する人々の課題であり、今回の訪韓では教育現場の方々のみならず、様々な人々とのコミュニケーションで確認することができた。様々な学校への訪問は、韓国の先生方の職場での様子を垣間見ることができた。特に宝城女子中学校の先生とは、短い時間ではあったがプログラム外での会話も弾み、生徒指導の様子や教育観、国家と学校教育の関係もお話いただいた。また、順天女子高等学校の先生とは、学校訪問の際のみならず、その後の懇親会や報告会でも席を共にし、日常の韓国国民の生活の様子やご本人の学生時代の様子、現在の学校教育の問題点や課題などについて日本と韓国の教育文化の違いを含めてお話しすることができたのは非常に意義深かった。

ESD の具体的な実践を学ぶ 横山 豊治

ESD への理解が深まっていなかったのも、ぜひこの機会に ESD への具体的な実践を見て、参考にしようと思っていた。今回訪れた韓国の学校は、どの学校も ESD への取り組みが素晴らしく、本当に参考になることが多かった。また、現場での実践を見るばかりでなく、事前に ESD への考え方や、両国間の発

表も聞き、理解の深まりがスムーズにできたことは、このプログラムの組み方のすばらしいところであった。ESD への具体的な考え方は、自分の視野を広げる結果となり、子どもたちの将来を考えた、かなり幅の広い考え方ができるようになった。今後はいろいろな実践例を参考に、実際に発達段階を考えながら取り組んでいきたいと思った。

他に設定していた課題は、韓国における公教育と私教育の違いを理解することである。韓国の教育へのイメージは、とにかく学習への取り組みが熱心で、受験への考え方も厳しいというものであった。実際に現場での先生方からの声を聞いても、その様子は変わりなかったが、一番興味をひかれたのは公立と私立の間に教育に対する考え方の違いがほとんどないことであった。日本の場合は、大学受験でいうとどうしても私学の方が指導が盛んで、公立はここ数年おいて行かれているように感じる。実際の大学受験結果も一部の公立を除くと、私学教育の方が優れていると言わざるを得ない。しかし、韓国は公私の区別なく、学習に対する考え方が厳しく、大変熱心に取り組んでいることがわかった。国として優秀な人材を一人でも多く育て、国の発展のため教育にはたくさんのお金をかけているという姿勢は、本当に参考になった。

その他、あまり他の学校のようにすを見る機会がない私にとって、他の学校、しかも他の国の学校のようにすを直接目にできることは大きな成果をもたらすだろうと期待していた。その期待通り、現場で子どもたちと触れ合い、直接指導に当たる先生方の話を聞き、直接施設を見学できたことは、本当に大きな成果であった。



8月27日の歓迎交流会にて、今年1月に日本を訪問した韓国教職員との再会を喜んだ



今年1月に日本を訪問した韓国教職員と記念撮影



プログラムレビュー会議の様子



報告会

6. 成果と課題

Aグループ

加藤 久雄

【成果】

学校におけるユネスコスクール活動の中で、児童・生徒が、学校全体のカリキュラムの中で、どのように活動しているのかが具体的に知ることができました。特に、ユネスコクラブの活動の様子を知ることができ、活用すべき知見を得ることができました。学校カリキュラムとしてのユネスコスクール活動を考えて行きたいと思います。

【貢献・課題】

今年度、学内にユネスコクラブができました。大学の行うユネスコスクール活動に参加する学生、また、ユネスコスクール事業の運営に学生が参画する場合の中心的役割を果たしてくれることが期待されます。ユネスコスクールとしての活動の主体が学びに主体である学生であることに留意して進めたいと考えています。

【今後の日韓交流】

短期研修プログラムの充実を図りたいと考えています。留学は1年間で基本でしたが、就職活動や経済的な理由から、留学学生数が増えません。そのような状況の中で、交流を深める工夫を考えたいと考えます。

森垣 薫

【最も有意義であった内容】

国は異なりますが、同じ未来に生きる子どもたちを育てる教師として共感をしました。

【成果】

私の課題の全てが理解できたわけではありませんが、総合所見で述べたとおり、直接、韓国の学校を訪問し、

子どもたちや現場の先生方と交流できたことで韓国の学校教育の実情が理解できたことが大きな成果です。

とりわけ、各学校の教室や職員室をはじめ、高速道路のサービスステーションにも韓国旗が掲揚されているのは驚きました。そして、「3月1日の記念日」には一斉に民族意識の高揚を高める指導がなされていることも聞き、日本の教師として日本の子どもたちへの歴史教育の大切さを認識しました。

訪問中、日韓両国間の問題や歴史認識に係る課題についての質問はなかったですが、教科書の記述や教育博物館の展示物等から、日韓の問題がどのように扱われているか再認識できました。

また、今後、国際社会に生きる子どもたちを育てるためにも、偏狭なナショナリズムではなく広くグローバルな視点から、日本の国旗、国歌をしっかりと指導していく必要性を感じました。

【貢献・課題】

1. 本校の「国際理解」教育の内容整備

本校は英国のスインドン市イスラムバード中等学校と交流を行っています。このことに加えて、ESD 教育を視野に入れ、国際理解教育の内容の整備を行う。具体的には、現在の「総合的な学習の時間」の「環境学習」等について、ESD 教育の視点で見直し、「ESD 教育」としてまとめていく。

2. 韓国の学校と継続的な交流活動の推進

今回の学校訪問をはじめ、来年1月には本町に韓国訪問団が来町されると聞いています。

この時の学校訪問を機に継続的な交流や、できれば姉妹提携も含めて交流活動をし、相互理解と友好を図りたい。できれば、本校と同じ呼び方（かや）である慶尚南道の「伽倻中学校」と交流したいのだが。

3. 韓国の教育の実情を紹介

「近くて遠い国」韓国の学校現場の状況を、校長会等で紹介したい。すでに、校長室前には地図やパンフレット等を机上において、生徒が自由に見られるようにしている。報告冊子を作成し、職員会をはじめ校長会等で紹介する予定です。

【今後の日韓交流】

今回の交流事業は、2001 年よりスタートしたと聞いています。

まず、日韓の教員がそれぞれの国の教育事情を実際に見聞し、交流する中で友好を深めるという点では、相互理解と友好の観点からとても有意義な取組と実感しています。

与謝野町ではユネスコ校の姉妹校提携はありませんが、ESD 実践を広めユネスコ校の姉妹校提携をすすめていくように考えたい。

こうした点を前提として、下記の点についてまとめ

す。

＜教職員の交流＞

- 1.相互の学校訪問をはじめとする授業交流をはじめ、学校行事、教育課程等
 - 2.教職員の勤務状況（勤務時間、給与、服務等）
 - 3.教育行政のシステム、教育予算等
- #### ＜児童・生徒の交流＞
- 4.相互の学校訪問（授業体験、学校行事への参加等）
 - 5.ホームステイ等

藤田 篤志

【最も有意義であった内容】

「学校訪問」である。今回、ソウル新龍山初等学校、淑明女子高等学校、進礼初等学校、安南中学校の4校を訪問することができた。そして、各学校では、我々の訪問に合わせて盛大に歓迎してくれた。教員はやはり国は違っても子どもたちの笑顔に会えるときがとてもうれしい。その笑顔が元気と勇気を与えてくれることは万国共通であることを確信した。今後も観光で韓国に行くことはできたとしても、今回のようにいろいろな学校を訪問することはできない。だからこそ、今回の学校訪問はとて有意義であった。

【成果】

- 1.韓国における環境教育の具体的な取組についての把握について
韓国では「環境問題」に対してとても真剣に考え、具体的に活動していることがわかった。EDS日韓教員フォーラムでは「危険教育とESD」について討論が行われた。日韓を比較すると「危険」に対する教員のとらえ方が若干違っていた。日本は「情報」、「放射能」、「管理」だったのに対し、韓国は「経済危機」、「環境汚染」、「温暖化」という結果であった。韓国は世界市民としてとてもグローバルな考えをもっているような気がした。日本ももっと世界に目を向けた取組が必要であると痛感した。
- 2.韓国の学校教育におけるESDの現状の把握について
韓国の学校を実際に訪問して、韓国の教育に対する熱意を感じた。学習環境が充実しているという点では日本をはるかに上回っていると感じた。教室には空調完備、ICT環境の充実、教育研究情報院が整備している家庭学習支援プログラム「E-LEARNING」、不適用生徒への支援事業「WEE-PROGRAM」など、生徒を取り巻く学習環境がとても素晴らしい。また、日韓教員フォーラムで韓国の先生方との交流や、ESDに関わる取り組みについて講義を聴いたり、討論したりする中で韓国におけるESDの現状を把握することができた。
- 3.韓国のESDと気仙沼のESDと比較し、気仙沼のよさ

を再確認し、特色あるESDカリキュラムの構築に生かす。

韓国にも湿地帯として有名な牛捕（ウポ）池などとても自然豊かな場所はたくさんあった。そして、それらの場所はしっかりと保護されている。気仙沼も豊かな自然に恵まれている。お互いに似ている部分が多いことを感じた。これからは韓国のESDを参考にして特色あるESDカリキュラムの構築に役立てて行きたい。

4.東日本大震災後の気仙沼でできるESDの模索

韓国では、訪問する先々で、東日本大震災で被害に遭われた方々に対してお見舞いと励ましのメッセージを頂いた。私も被災地である気仙沼市から訪問したひとりの人間として、今まで頂いた心温まる励ましのメッセージ、支援に対する感謝の気持ちを伝えることと、気仙沼の現状について伝えるという使命感をもって、このプログラムに参加した。それも「持続発展教育」になると考えたからだ。将来の担い手である子どもたちに現状を伝え、「今自分たちにできること」を考え、行動してほしい。それを日本、韓国、そして全世界に伝えてほしいと思っている。震災から半年経った今、気仙沼は徐々に復興してきている。しかし、10年後、20年後の気仙沼をイメージすることはできない。本校に避難されている方々もまだ約30名もいる。そんなだからこそ出来るESDがあると思う。それを今回のプログラムに参加したすべての先生方からのメッセージで感じることができた。さらには韓国のこどもたちとの交流、支援のネットワークなどを通して、今後の気仙沼を担う生徒への指導に生かしたいと思う。

【貢献・課題】

- 1.このプログラムに参加して得た韓国教育や文化、学校訪問で感じたことを生徒に全校集会等で伝講したいと考えている。
- 2.職員会議等で今回のプログラムを通して得た韓国の教育に関わる知識と様々体験から感じたことを伝講したいと考えている。

【今後の日韓交流】

韓国教職員の学校訪問は可能である。現在、生徒会を中心に行っている「復興プロジェクト」や2学年が震災後に総合的な学習の時間を使って行っていた「今自分たちにできること」などの紹介ができると思う。

また、先生方との交流も放課後であればグループミーティングが可能である。ただし、どちらも通訳が必要である。

原田 知佳

【最も有意義であった内容】

充実したプログラム内容で、韓国の歴史や文化について楽しみながら、深く知ることができたと思います。また、学校訪問や教育施設訪問など、普段の旅行では体験することのできないような施設の見学ができました。特に、学校訪問では、初等学校・中等学校・高等学校の先生方と直接お話しする機会を持てたことがとてもよかったと思います。また、子ども達と触れ合うことができ、とてもよい経験になりました。そして、ホームビジットで韓国の家庭の雰囲気を味わえたことも有意義でした。今回の韓国のたくさんの先生方や子ども達と交流できたことが、最も有意義であったと思います。

【成果】

今回のプログラムに参加して、小学校2校、中学校1校、高等学校2校を訪問することができました。その中で、国際理解教育やESD教育の取り組みが、創意的体験活動（日本の特別活動と総合を合わせたようなもの）や教科教育の中で行われていることが分かりました。また、地域の人材の活用も積極的に行われ、地域・学校が一体となってESD教育に取り組んでいることが分かりました。

国際理解教育では、自国理解や他国理解が行われていました。他文化理解教育では、「カエルの鳴き声」の違いから日本と韓国のカエルの歌を通して、多文化理解を行うという授業を見せていただきました。子ども達にとって、親しみやすい動物の鳴き声や歌などを通しての多文化理解は、とても楽しく行われていました。特に、子ども達が何度も日本語でカエルの歌を歌いながら輪唱にチャレンジしている姿は、とてもほほ笑ましかったです。また、このような授業を見せていただき、日韓の授業交流のヒントを得ることができました。

また、小学校の外国語教育に関しては、日本の外国語教育とは比べものにならないほど、レベルが高いことに驚きました。英語の時間には、担任あるいは教科担任の先生とネイティブスピーカーのT.Tで授業が行われていました。その際、授業は、All Englishで行われていて、子ども達も聞かれたことに対して自然と英語で答えていました。外国語教育を行う際には、教師が積極的に外国語を話すことが非常に重要であるということを実感しました。また、韓国では、小学校3年生から外国語教育が行われ、主に、スピーキング、ヒアリング、リーディングに重点が置かれているということでした。これらの外国語活動は、習得に時間がかかるため早くから学習を始めることが大切だとのことでした。また、外国語教育の

目的は、外国語を学ぶということ自体が目的ではなく、様々な科目等で学んだことを世界に発信するためのツールとして学ぶということが目的だということでした。このような考え方で外国語教育は、ESDの視点から見ても非常に重要な役割を果たしていると思います。

今回のプログラム参加によって、韓国の国際理解教育やESD教育、外国語教育について、実際に見学できたことが、わたしにとって非常に貴重な経験となりました。

【貢献・課題】

まず、お互いに、顔の見える交流を図りたいと思います。相手の顔が見えると、親しみもわき、相手のことを知りたいという気持ちも大きくなります。特に、児童同士の交流を図るためには、お互いに、顔を見ながら、自国文化紹介等を通して、交流を進めていけたらと思います。

また、外国語教育については、教師側の語学力が非常に重要になってきます。英語及び韓国語について、自分自身が語学力を磨く必要があると感じました。また、子ども達にも、日常生活の中で使える簡単なフレーズを紹介するなど、コミュニケーションツールとしての外国語を紹介していきたいと思いました。

【今後の日韓交流】

教育交流については、学校同士あるいは教員同士の交流が必要になってくると思います。その際に、どのような交流を行っていくのかという日韓の教員同士の共通理解が必要だと感じました。まずは、教員同士の交流を行い、共通理解をした上で、児童の交流につなげていく必要があると思います。具体的な交流内容としては、テレビ会議システムを使った交流、教員同士の相互訪問や児童による手紙の交換や自国文化の紹介等が考えられます。しかしながら、その際に、一番大きな問題として、言葉の問題（日本語と韓国語）があります。通訳を介しての交流になるのか、お互いに英語を使用するのか、他の方法を取るのかなど、コミュニケーションの取り方についての工夫が必要となります。

平澤 佑加子

【最も有意義であった内容】

ホームビジットはとても価値のあるものだと思います。韓国の家庭や子どもたち、文化など、さまざまなことを知ることができました。韓国の方々の人格のすばらしさを感じることができたのも、このホームビジットでした。特に、もてなしの心と、相手を一生懸命に理解しようとするやさしさは、どの国の方も勝てないのではないのでしょうか。それだけ私は彼らに魅了されてしまいました。コミュニケーションにおいて大切なことは、「相手

を知る」ということですが、そのために「自分の心を開く」ということが必要になると思います。今回のホームビジットは、通訳がつかなかったことでより深く自分を表現しようとし、相手を知ろうと思いました。交流の原点を体験することができ、本当に有意義な時間となりました。

【成果】

英語教育の研究を進めるにあたって、実際の資料を手に入れることができたということがまず一つです。小学校3年生から行われている英語教育で、6年生であれだけの力がつくということを証明してくれました。彼らは英語を「教わる」というよりは、「習得する」という感覚なのだろうと思いました。その感覚は、年齢が早ければ早いほど良いと思います。どの学習でもそうですが、英語教育は「いかに子どもに興味を持たせるか」「話をさせたい気持ちにできるか」が重要だと、今回の小学校の訪問で分かりました。

教師の学級経営と、保護者との信頼関係を結ぶための努力を知りたいと思っていました。特に今年の1月に韓国の先生方に日本でお会いした際に、モンスターペアレンツのような存在はないという話を伺っていましたので、気になっていました。一つは、保護者や児童に教員の評価をさせていることに、もう一つは、教師が子どもたちにたくさんの活躍の機会を与えていることで信頼関係を築いているのではないのでしょうか。どの学校に行っても、多くの子どもたちがステージに立って歓迎をしてくれました。子どもを主役にすることがとても上手だと思いました。

【貢献・課題】

本校では、2011年度より、全学年が英語教育を行っています。1年目である今年度は、試行錯誤で他の学校からヒントを得て行っていますが、来年度からの英語教育は、今年度の子どもの実態をよく把握し、より良いものにしていかなくてはならないと考えています。そのために、今回のプログラムで学んだことを生かしていきたいです。特に1時間の授業の展開にこだわること、他の授業と同様に、児童に考えさせる場をつくり、それを単語だけでもよいから英語で意思疎通することができるようになれば、英語力は伸びていくと思います。

地域と共に作りあげる学校は、ESDとも大きく結びついています。現在本校は、地域の方の力をお借りしてクラブ活動や部活動を行っています。地域に開いた学校を今後も目指し、持続発展可能な社会をつくりあげることのできる力を持った児童の育成を行っていきたいと考えています。

【今後の日韓交流】

ホームステイは、教員にとっても児童にとっても大変貴重な交流になると思います。実施については、ユネス

コスクールに登録して、そのような交流事業を提供していただく、または学校独自に交流をすることも可能であると思います。

星野 明人

【最も有意義であった内容】

有意義な交流や体験ばかりで一つには絞り難いが、やはりホームビジットが印象に残る。

訪問先の呉さんの「精一杯のもてなし」を強く感じた。夕食での自炊で育てた食材を使ったフライや自家製キムチ、そして誕生日の定番メニュー。お土産も手作りのキーホルダー（奥さんと野村先生と3人お揃い）。言葉の壁をなくすために知り合いの日本語がわかる大西さんを招く配慮…。

集まった呉さん、大西さん、近所の奥さんの関心事は東日本大震災。震災・津波が、日本全国を襲ったという誤解を持参した地図帳で解き、話題は互いの年齢に。集まった3人と私が2歳と違うことがわかり、子どもの進学に関する話題に盛り上がった。

あつという間の4時間で、機会があればホームビジットの受け入れもしてみたいと思わせてくれる一時であった。

【成果】

1. 「韓国のユネスコスクールにおいて、ESDの推進拠点として校内の体制をどう整備し、地域社会との連携をどのように図っているのかを直に見て、生の声を聞くことで今後の当校における取り組みに生かす。」について

淑明女子高等学校のユネスコクラブ長の発表にあった「私の周りから、私の学校から、そして私から」というフレーズが構えのキーになると思った。

また、地域社会との連携の進め方については、私の「ユネスコスクール1年目の学校へのアドバイスと活動による児童の変容は？」に対する進札初等学校の先生のアドバイスが参考になった。

まず、ユネスコスクールの理念を子どもや保護者に知らせ、理解してもらうことで学校の教育活動に新たな価値付けを行う。その際、地域教材を開発するため、地域で誇れるものは何か事前に地域のアンケートを行い、コンセンサスを得る。その結果、学校と保護者・地域との共通認識が形成され、活動に対して地域の協力を得やすくなったそう。そして、子どもや保護者が、自分の学校を誇らしく思うようになったと同時に、連携先のクレーアークも、もともと地域にあったのだが、より身近に感じるようになったとのことである。

地域を誇りに思い、愛し、地域に根ざすために、児童だ

けでなく、保護者も地域も、そして教師も足元から見直していく地域基盤の ESD からスタートしたいと考えた。

2. 「視察する韓国の協力校の関係者や同行するメンバーとの情報交換から、ユネスコスクールとしてのネットワークも広げる。」

移動バスの車内・往復の機内、朝食・夕食等あらゆる機会を生かして今回同行した訪問メンバーとの情報交換を積極的に行った。

韓国がどうのこうのという前に国内でも地域や校種が違うだけで、活動やシステムもいろんな面で違いがあることを知ることができた。

また、各校のユネスコスクールの取組みについても聞くことができ、それぞれの工夫や苦勞を知り、また、それに向けた気概も感じ、いい刺激になった。

【貢献・課題】

ア. 各方面への報告

今回のプログラムの成果を事実を基に、見つめ直し、早いうちに報告をする。

- ・教育委員会への報告。
- ・市のホームページへのアップの検討。
- ・校内

イ. ESD の活動計画の見直し

- ・今年度に生かせること、来年度の計画に盛り込むこと
- ・保護者・地域のコンセンサスの取り方の検討
- ・活動を支える体制作り

ウ. 今回出会ったメンバーとの情報交換の継続

- ・活動計画見直しの際、相談をする。

【今後の日韓交流】

聞いたり、見たりするだけなら、インターネットを通じてテレビ会議のようにすることで手軽にできると考えていた。しかし、今回のプログラムに参加してみると実際にその場を訪れて直に見聞きし体験することが何倍も大きな収穫・理解につながることを実感した。

望ましいのは児童生徒が相互に訪問し合うことだと思う。ただ言葉の壁が大きく、通訳の存在が欠かせない。さらに相手校との交渉（期日、移動手段、受け入れ体制）等を整えようとする児童・生徒の交流は単一校同士では、ほぼ不可能。教師間の交流も難しい。

今回のように、交渉等を進めてくれ、渡航費用も捻出する機関の力を期待したい。教師交流だけでなく、児童の交流プログラムも積極的に作り上げてほしい。

伊藤 浩志

【最も有意義であった内容】

ホームビジットで4人家族のキムさん宅を訪問し、夕食をごちそうになったことである。食事の内容が良かったのは当然のことだが、韓国の家庭に行き、日本語ではあるが会話できたという体験が何より心に残るものであった。最初、緊張感はあったが、すぐにうちとけ、部屋を案内してもらい、2匹の犬と戯れながら、出してもらった料理の話や、お酒のお話、家族の話に至るまで様々な話をする事ができた。中学3年生のセジンさんは、日本で人気の「少女時代」のダンスまで披露してくれた。また、キムさんの会社には、定年退職した日本企業の方が再就職の形でチャンウォンに来てもらっているという話もしていただいた。とにかく、今までにない経験でした。

【成果】

課題として設定した内容

韓国の ESD についての課題意識をもちたい。

- ・韓国では、「人や環境とのつながり」をどのようにとらえ、生かそうとしているのか。
 - ・韓国では、各地域と ESD をどのようにつなげているのか。
 - ・韓国の学校現場における ESD の役割や位置づけは、どのように計画され、実践されているのか。
- 異文化である韓国の教育について、知り得たことを伝えようと今後に生かしたい。
- ・文化の違いによる教育の違いや良さを、自分の五感で感じてみたい。

初めての海外でした。時間的に余裕もないので、最初で最後かなと思っていました。しかし、韓国へ行ってみて自分自身がグローバルな考えをもつことがこもたちの視野も広げていくのだという考えに至りました。韓国の環境教育の一端にふれ、ウポ湖を眺めながら、人と自然と環境のつながりについて、もっと深く考えていきたいと思いました。

【貢献・課題】

11月に環境教育の全国大会が宮城県気仙沼市立大谷小、中学校を会場に開催される予定です。その中で、ESD と環境教育の関わりを再確認していきたいです。また、韓国の ESD を様々な場で伝える形があれば、意欲的に伝えたいと思います。さらに、津波によって計画の見直しを余儀なくされている大谷中学校の環境保全計画の再構築に今回の研究を生かしていきたいです。

【今後の日韓交流】

参加する先生方から日本の児童・生徒の質問を集めておいて、聞いてみるというのも楽しいと思います。ビデオ

オレターの形式でも良いかもしれません。逆に韓国の児童・生徒には、日本の児童・生徒に向けてメッセージを送る授業というのもおもしろいと思います。

垣見 弘明

【最も有意義であった内容】

8月25日に東京で開かれたオリエンテーションから多くの先生方と知り合いになれたこと、考え方や教育、不安なことなどについて共感し合い、自信をもらえたこと。通訳のミョンシンさんが、私のわからないことについて丁寧に説明してくれたこと。韓国という国に興味を持ち、また行ってみたいと思える国になったこと。などが挙げられる。いずれも、人と人との出会いであり、もてなしの心を持って接してもらったことに感謝したい。特に同じグループで行動した先生方とは、以前からの知り合いみたいと感じられるようになった。

みんなで練習した「上を向いて歩こう」の韓国語版は今でも耳に残っている。ホームビジット先で、韓国語で歌ってもらった時、改めてこの曲でよかったと感じた。

【成果】

本校もユネスコスクールに加盟し、2年が経つ。生徒会を中心に地域と連携した活動を行っているが、ユネスコスクールとしてのメリットや、全生徒としての活動には至っていない。韓国でのユネスコスクール認定の基準の高さと、ユネスコスクールの認知度を考えると、学校運営の方針がいずれも明確で実効性の高いものであった。また、生徒の自主性が活動の原動力になっていた。活動の中心をユネスコクラブが担っている場合も多く、そのユネスコクラブに入るにも、学習の成績が大きく左右し、意欲知力行動力が必要だと感じた。生徒をその状態まで向上させる教師や学校の支援を本校でも参考にしたい。

「明新（ミョンシン）」という言葉に、「人格を完成した後、民衆を導いていくための人材の養成」と示された建学の言葉に、韓国の国を愛し、世界に目を向けた人材育成を感じた。国際社会で生きる人材を育成するには、世界に飛び出すために必要なスキルとたくさんの自発的活動や考え方を学年の早い段階で教育に取り入れることが、日本の学校にも必要だと考える。

また、身近な地域と学校とのかかわりについては、PTA代表者の方が歓迎式典でも出席されており、日本と同じような形態だと感じた。しかし、新龍山初等学校に訪問した際には、多くの保護者の送迎に出会った。教育熱心といわれる韓国で、その保護者の努力も熱が入っている。塾に通わせるために、親が昼夜を惜しんで働くなど、国の政策で私教育の負担減がとられている中であっても、親として子どものために努力する姿は、同じ子を持つ親

として感心させられた。教育の基本は国や学校が担うものであるが、親として教育をどのように考え、生活の中に位置づけているか、そのことを改めて考えさせられた。私が小学校の頃、夕食後、親に漢字や算数の勉強を見てもらい、毎日のように宿題のことや忘れ物のことを親から言われていた記憶がある。今の日本では、家庭での学習や親からのしつけなどが薄れがちになっているように感じる。競争社会にある中で、韓国の家庭から学ぶことがあると思う。それは、「私たちの家庭では、このように教育する。」という明確な方針と家庭の行動力である。

【今後の日韓交流】

2学期中に、淑明女子高校、安南中学校と生徒を通じてメール交換を始める予定である。

本校では生徒会を中心としたユネスコスクールの活動が多いため、時差がないことから授業でも取り上げ、交流を行っていききたい。

以前より、ACCUの訪問団を受け入れ、体育館での歓迎会や各クラスでの紹介などを行ってきたが、ホームビジットや生徒が奈良の観光案内をするなど、生徒たちとの交流時間を設定したい。また、PTA活動として、韓国の先生方との交流ができれば、親の思いなどの共有ができると考える。

兎玉 健司

【最も有意義であった内容】

特に印象に残ったのは、私が勤務する中学校と同じ校種の安南中学校を訪問させていただいたことである。日本とほぼ変わらない学校全体の雰囲気、屈託のない子どもたちの様子。物珍しさに心を躍らせたのか、こちらに笑いながら近づいてきて「こんにちは」と話しかけた後に爆笑しながら仲間たちが待つ場所へ戻っていく年頃の女の子の姿は、日本で見る光景と同じだった。安南中学校では、そこに勤める先生方とかなり長い時間話すことが出来た。日本では「体罰は許されているのか」や、「退勤するのは何時くらいか」などといった質問を受けて答えた。他の研修生の話題にもあがっていたが、施設の見学や説明といった受動型より、体験や交流といった参加型のプログラムの方が有意義であるといえるのは間違いのない話であろう。

【成果】

最後の訪問校であった安南中学校において、私が一番聞きたかった質問をすることができた。「PISA2009の読解力テストで韓国が1位となった理由についてどう考えるか」とストレートにぶつけてみた。すると、返ってきたのは意外な答で、「PISAって何？」や「1位になったの？」と聞き返されてしまったのである。中にはPISA

の読解力テストについて知っている先生がいたが、その方が言うには「学校教育が理由でなく、皆が私塾に通っているから」というのである。

私が最も知りたかった課題について、韓国の現場の先生から回答を得ることができたのは大きな成果であった。しかし、たった一つの学校の、ほんの数人の先生方の声をもってして、それが答えだと考えるのは性急であろう。本当の理由が何であるのかについては、多角的かつさらに多くの情報によらなければ見えないはずだ。ただ、一つははっきり見えたのは、韓国という国の教育改革に向けた取り組みの本気度の高さである。その凄みは、日本のそれとは比較にならないほどのものであった。

【貢献・課題】

私ごとではあるが、この訪韓のついで一週間ほど前はシンガポールを訪れていた。本校の19人の生徒が交流先の中学校へホームステイをしに行くための引率をしていたのである。シンガポールと韓国の教育には多少の違いはあるものの、目指している方向性は一緒である気がした。そうした方向性だけの話題であるならば、我が国日本も同じであると言えるだろう。思えばこれらの三国は歴史的にもつながりが深く、皆、東アジアに属する国でもある。しかし、今、現場で行われている教育の実態を考えると、グローバリズム一つをとってみても日本には大きな課題があると言わざるを得ない。

本プログラムの始まりに際し、我々の団長である加藤久雄先生が、「人として学ぶとは自らが興奮することである」と話された。その時の私は、その言葉の意味を理解したつもりでいたのだが、今、こうしてプログラムを振り返ってみると、あの時はまだわかっていなかったのだと思える。それは、10日間にわたる訪韓を経た自分は、それ以前の自分とは比較にならぬほど興奮しているからである。

自分が設定した課題に対する成果は、1において簡単にまとめた。そうした辺りから今後について考えてみると、この訪韓プログラムは、私の教師生活の新たなスタートになった気がする。具体的には教務主任として、本校生徒が地球市民として幸せに生きる将来の大人像をイメージしつつ、来年度の本校教育課程の工夫することである。総合的な学習の時間の改善をはかり、キャリア教育も生かしながら新しい教育課程を編成したいと考えている。

【今後の日韓交流】

大人のレベルでの交流ならば、これまでの本プログラム参加者が一堂に会して、その後の取り組みについて交流し合う時間を設けることが必要かと考える。交流というと、日韓の関係だけで考えがちであるが、日本サイドで言えば、本プログラムに参加した日本人たちのアフターこそを重視することが重要ではないかと思う。また、

こうした考えは生徒のレベルでも可能であり、日韓の教育交流に参加した子どもたち（ここでは日本人のみ）が集まって交流するといった活動も意味あるものになるのではないかと考える。

倉前 光太郎

【最も有意義であった内容】

はじめて訪れた韓国であるが、プログラムの内容は何もかもが有意義であった。古代のヤマト王権と密接に関わる「伽耶」諸国および「新羅」の首都慶州を歩けたこと、中世以降の朝鮮王朝の首都漢城（ソウル）と世界遺産の王宮を見学して回れたことなど、今後の授業実践の中に生きてくことと思う。また、韓国の経済・政治・社会の実相を、フォーラム、学校訪問、市街地散策、ホームビジット等から吸収できたことも大きな収穫である。そして、ユネスコ活動とESD実践の意義についても、知識としてでなく意識として体感することができたように思う。

しかし、それらにもまして有意義だったことは、今プログラムに同行した多くの方々との交流である。日本全国からさまざまな「課題」と「思い」を携えて集まってきた方々とのふれあいである。わずか10日間ほどにすぎなかったが、話し合い協力し合って、研修を成功に導くことができた。帰国前日の報告会準備のため連日深夜まで作業したり議論したり、議論する前に飲んだり食べたり、そうしながらも故郷の話をお聞かせいただいたりした。それぞれの職場・地域での取り組みや悩みごと、家族のことなどを含めて語り合えた。韓国にいながら、いや韓国にいるからこそ、日本全体の様相が窺い知れたのだろう。なかでも東北の震災に遭遇された先生方のお話には、毎回、涙がこぼれないようにするだけで精一杯であった。言葉にできない苦しみをくぐりながら、明るくたくましく生きておられる姿に感動した。皆さん「上を向いて歩」かれていた。

【成果】

「韓国の歴史教育のあり方と日本」について「歴史の授業では日本についてどのように取り扱いますか？」

「校庭にある李舜臣の銅像を説明する際にはどのような切り口からなされるのですか？」といった質問を失礼にならないよう配慮しながら訪問先の先生方に向けてみた。当たり障りのない大枠の説明をしてくださる方、もしくは逆に誤解が生じないようにとのご配慮から、やや懸命な様子で詳細に説明される方などがあつた。内容と時間の制約から、どちらの場合も、対話、言葉の往復という相互理解のためのキャッチボールまでに至らなかったが、互いの溝に向かって近づきたいという気配を誠意

として感じる事ができた。

設定課題以外の成果としては、第一に、全国から同じ教職の仕事にある者が集まり、意見や情報を交換して、短時間のうちに共通の目標（集約・発表）を完成させたことである。第二に、歴史遺産の訪問などを通して、日本史授業やホームルーム運営に役立つ生きた情報・知識が得られたことなどである。

【貢献・課題】

外国語という言葉の障害があったにもかかわらず、韓国の様々な方々との交流が深められたのは、「言葉よりも先に心を置いた」からであり、それが相手に届いた結果であろう。素直な気持ちは目線に表れ仕草にも表れる。今後、授業やホームルームを通して、自身と生徒の、また生徒同士に「心がつながるきっかけ」を提供していきたい。

また、全国各地の先生方と知り合えたこと、学びあえたことの素晴らしさを子どもたちに話していきたい。

ユネスコの基本理念や ESD の考え方をいっそう学習し、人生観の中に取り込む作業を開始していき、教師として深めていきたい。

【今後の日韓交流】

交流プログラムは、学校・教育機関の訪問、世界遺産の訪問、ホームビジットなど、個々の充実度も全体のバランスもともに優れていると思います。ですから、大きく変える必要はないと思います。中でも大切なのは、訪問先の学校において 1. 授業を参観し、2. 班別の生徒グループに所属して課題を一緒に考え、3. 授業を一部担当する、ようなことだと思います。また、4. 日韓の教師間の懇談・討論・質疑もとても大切です。さらに学校や行政の方針・施策をうかがう時間も貴重なので、こちらも削らないほうがよいと思います。

また、今回のような交流プログラムに参加した経験のある日韓のそれぞれの教職員は意識が高くなっているもので、学校訪問時には窓口としても期待できることと思います。同時に、教室にいる在日韓国人、在韓国日本人の児童・生徒に、事前の希望調査に基づき、何らかの出番を与えると、いっそう親しみがわき距離が縮まります。保護者も同様です

松尾 聡子

【最も有意義であった内容】

日韓の人との出会いと交流。日本全国から集まった先生方から、地域の話や学校での話、趣味の話など色々な話を聞いた。三者三様の学校の様子に、ただただ驚くばかり。また、大震災の時の話や被災地の現状も聞き、心が痛かった。

韓国の先生方とは、フォーラムや各学校、時には文化地巡りで一緒に、色々と質問をさせてもらった。

そして、何と言っても、ホームビジット先のご家族。とても良い親戚関係だった。その空間が心地よく、かなり長居してしまった。韓国は「近くて遠い国」と言われるけれど、私にとって心理的な遠さはなくなった。

【成果】

1. 韓国の教育事情について

どの学校の教室にも、PC とそれに連動するプロジェクターが設置されていた。また、私が見たどの授業も、その画面を使っていた。完全にその形が定着しているように見えた。ただ、私たちに随行してくれていた 20 代後半の KNCU のスタッフの方が学生の時には、PC を使った授業は全くなかったそうで、10 年弱の短期間で ICT がこれだけ普及・浸透していったことに驚いた。

また、英語教育が日本より進んでいると感じた。特に優れた学校を見たから、ということもあるが、見学した中・高の生徒達は伝達するための英語を習得していた。日本も現在「話す」ことに重点を置いた英語に変わりつつあるが、韓国の方がこうした英語の習得に関しては先を行っている。世界で活躍する人材を創るためにも、伝達手段としての英語の習得が必要だと感じた。

そして、小さなことではあるが「教科書は 1 種類しかないこと」「中学校からは男女別クラスになっていること」などの韓国の教育に関する知識は、私の財産となった。これらの知識は、私の狭い視野を広げてくれた。

2. 韓国の伝統文化について

韓国の新聞を見ても、漢字はほとんど見あたらない。しかし、「古典」は漢字でかかれているはず。いったい、古いものを韓国ではどのように扱い、生徒達に教えているのだろう、ということが疑問だった。まず、古典にあたる漢文については、授業では扱うが、大学受験の試験には出ないそうだ。授業での扱いは各校に任されているようで、ほとんどやらない学校もあれば、淑明女子高等学校のようにカリキュラムに組み込まれているところもある。そう考えると、日本は「古典」を韓国より重視していると感じた。

景福宮や仏国寺などの伝統的な建物には、遠足や修学旅行の時に来るそうで、子どもの時から世界遺産などを見ることは、心を豊かにし、「国」について考えるきっかけになる。

こうして、韓国の伝統文化について学び、考えることで、自分自身が日本文化をどう捉え、どう伝えていくかを考えることになった。

3. ユネスコスクール・ESD

課題としては設定していなかったが、このプログラムに参加するまで、ユネスコスクールや ESD 教育についての知識がなかった。今回、ユネスコスクールに加盟して

いる学校を3校見学して、意識が外に向いている、グローバルな視点を持っていると感じた。ユネスコスクールやESD教育についての知識を得たことは、私にとって大きな成果となった。

【貢献・課題】

まずは、今回体験したことや学んだことを、生徒に還元していきたい。グローバルな視点をもてるように意識した指導をしていきたい。

また、韓国の英語教育やICT教育の現状、そしてユネスコスクール等について、本校教職員に知ってもらい、それぞれの指導に生かすと共に、学校として何かできることがあるかを考えていきたい。

【今後の日韓交流】

- ・今年の1月のように、韓国の教職員の訪問を受け入れることは可能である。今回訪ねた学校の先生方と再会することができたら嬉しい。
- ・生徒同士の交流ができれば良いと思う。生徒同士ならば、インターネット（スカイプなど）での交流がよいのではないかな。もっと世界に目を向け、視野を広めるためにも、学校全体の取り組みが必要になってくるだろう。

本山 早苗

【最も有意義であった内容】

韓国の小学校、中学校、高等学校の現場を実際に見学し、生徒さん達の様子を自分の目で見てくることができたことは、何よりの韓国の現状理解につながった。どの学校の子ども達も生き生きとした笑顔にあふれ、楽しそうに学校生活を過ごしている様子であり、国策として教育に重点を置いている韓国の勢いを肌で実感する視察となった。大学受験のために、幼い時から塾に通い熱心に勉強することが社会通念になっており、それを疑問視する様子も生徒達の中には見受けられなかったが、ユネスコクラブのメンバーとして、世界に視野を開かれた生徒達の目の輝きは、さらに自信と充実感で満ち溢れているように思えた。

また、ホームビジットや、韓国ユネスコ委員の方々、そして日本各地から参加された諸先生方と新たな友情のネットワークが築けたことは何よりの喜びである。この経験を糧に、さらに勤務校での責務に邁進する新たなエネルギーを頂けたことが、最も大きな収穫である。

【成果】

- 1.ソウルの進歩的な新龍山初等学校や淑明女子高等学校の英語教育の例を見ても、最低でも小学校3年生から週に2時間、リスニングやスピーキングを中心に英語学習が進められており、やはりグローバル社会で自分

の意見を発信することができる英語力を身につけさせねばならないと強く思った。日本の学習指導要領も改訂され、更に言語活動重視のカリキュラムに移行する時でもあるので、工夫しながら授業の活性化を図りたいと思う。

- 2.約30年ぶりの慶州、仏国寺、釜山訪問であったが、現地のガイドさんによる丁寧な説明でじっくりユネスコ世界遺産を見学できた。やはり、日本の奈良と通ずる落ち着いた空気が流れ、いにしえからの文化のルーツを再び感じる事ができた。

釜山は韓国第2の都市らしく、貿易港として美しく整備されており、釜山タワーから眺める夜景も10日間の旅の締めくくりとして大変素晴らしかった。

【貢献・課題】

第3の抱負であった学校間交流について、勤務校の建学の精神である、国際理解と平和の実現に労する人材の輩出というモットーを、ESDの側面から捉え直し、まずはユネスコスクールの登録を推進し、生徒達の活動の中にユネスコクラブの導入をどのような形で実現できるか、来年度からの発足に向けて方向性を見極めたい。

【今後の日韓交流】

今回各訪問場所で熱烈的な歓待を受け、次回訪問をお受けすることがあれば、韓国の先生方に韓国語や文化を紹介する授業をしていただいたり、もっと生徒達と交流できるプログラムを用意したいと思う。

釜山の南星女子高等学校の先生が前回の訪問団として本校を訪問して下さっており、同じキリスト教主義の女子校であるという点で、今後は非生徒同士の交流の機会があれば進めたいと願っている。

村上 美和

【最も有意義であった内容】

小学校訪問が一番、有意義な時間になりました。やはり、自分の校種ということもあり、すべてにおいて日韓の違いを感じ、自分なりにとらえることができました。

中でも、教科担任性や設備の充実に驚きました。

教科担任性での授業は、第一外国語の英語と、第二外国語の日本語の授業を参観させていただきました。英語の授業では、高学年とはいえ、ALTとの英会話がいレベルで、こんなに韓国の英語教育が進んでいるのかと思いました。韓国の先生方との会話の中で、英語の授業は週3時間学習していると聞きました。日本では週1時間なので、簡単に考えても日本より3倍以上の力がついています。訪問先が特定の学校ということもあるのかもしれませんが、国全体で教育に力をかけていることを考えると、ソウルや釜山などの中心地だけでなく、地方の小

学校に行っても英語教育が進んでいると思います。世界に向けた発信力を育成しようとする、明確なねらいがあると感じました。

そして、その英語教育の重要性を痛感したのが、韓国の先生方との会話でした。私はハングルが分からない、韓国の先生方は日本語が分からない。そのような中での共通語が英語でした。自分の思いを伝えたくて、必死に少ない単語や語彙の中から英文を練りだしたり、身振り手振りで表現したりしました。日本にいと、そのような体験をすることがなく、思いを必死になって伝えるという体験がありません。しかし、今の社会の中で、自分の国だけということはありません。まして、先進国とされる日本が背負う責任もあると思います。「できることから、はじめる」「自分の一歩が世界を変える」という思いを実現するためには、異文化を積極的に認めたり、相手を知るためにも世界で最も多く話されている公用語の英語を学んだりすることが重要だと思いました。日本にいとその必要性がないので、それを自分自身で感じることはできたのは、これから指導をする上で見方を変える大きな経験だったと思います。

【成果】

今回の研修の成果として挙げられるのは、「自分たちの取り組んできた ESD への自信」「国際理解教育の可能性」「ネットワークづくり」です。

私は課題設定として「地域理解教育」について挙げました。しかし、残念ながら、地域理解について詳しく韓国の状況について知ることはできませんでした。紹介していただいた韓国の ESD の多くが、国際理解教育に重点を置いたものだったからです。

私の学校では基幹産業である「稲作」や「伝統文化」について取り組んできました。学習だけでなく、自分たちの住んでいる地域を知り、体験活動から大切なことを学んでいます。韓国では学歴社会のため、体験や経験が少なく、その機会を設けることが求められているそうです。学んだことを、体験を通して習得していったり、そのものの価値に気づいたり、たくさんのことに気づくことができます。それを、地域を巻き込んで、地域と一緒にやっている取り組みは、まさに ESD であり、意味のある教育なのだ改めて認識しました。韓国でのそういった取り組みは、牛捕池生態教育で見られました。この取り組みがどんどん広がり、身近な地域でも環境教育や地域理解教育が行われるのではないかと感じました。

そして、自国の文化を知るだけでなく、それをどのようにして世界へ目を向けさせていくかも、今後さらに重要になって来ると思いました。私はこれまで地域を知ること、自分たちを知ることだと考えてきました。だからこそ、外へ目を向ける前にしっかり足下を見る必要が

あると。しかし、それは同時にできるのではないかと感じました。自分たちの文化を知り、相手との類似点や相違点を見つけられると、興味がますます湧いてきます。だからこそ、その視点を教員がもっていないと、子ども達には世界へ目を向けるチャンスが回ってきません。地球人として違う国に目を向けていくことが、国際理解教育の可能性をさらに広めていくと思います。

また、全国の先生方や韓国の先生方と知り合えたことは、大きな財産となりました。全国の先生方とは教育について語り合い、教育に対する視野が広がったと思います。特に、自分の校種の先生方だけでなく、違う校種の先生方とも話すことで、よい刺激になりました。そして、人の出会いは財産だと聞いたことがありますが、まさにその通りだったと思います。韓国の先生方とは教育について話し合うことができ、国は違うけれども思いや熱意は同じなのだと感じました。だからこそ、通じるものがあり、連絡先を交換するなど親密な関係が持てたと思います。全国だけでなく、世界につながるこのネットワークは、私の世界観を大きく変えてくれると思います。

【貢献・課題】

本校の教職員に、今回の研修について伝講したいと思っています。韓国ではどのように ESD に取り組んでいるのか、また小学校の取り組みについても紹介したいと考えています。何もかもが違う訳ではないのですが、やはり国が異なると相違点や類似点が多くあると思います。また、その背景にある国や地域での教育事情を踏まえることで、なぜそのような教育方針がなされているのか、そのことについて考えていきたいと思っています。確かに、韓国は日本より二歩も三歩も先を行っているかもしれませんが、しかし、それだけを取り上げても、何の改善にもならないので、自分たちにできること、学ばなければいけないことを中心に取り上げたいと考えています。

また、朝会で児童対象に韓国の小学生についても紹介する予定です。それに伴って、写真や資料を掲示したり、韓国の伝統的なおもちゃで遊べるコーナーを設けたりして、お隣の国について少しでも興味を持ってもらえるようにしていきたいと思っています。そして、私たちが取り組んできた ESD の取り組みが、間違っていなかったと確信をもつことができました。当初は、日本の取り組みしか知らなかったのも、自分たちの行っている取り組みがどのような意味をもっているのか、自信をもって言えませんでした。しかし、韓国の先生方や日本全国の先生方とお話をする中で、その重要性を再確認することができました。だからこそ、これまでの取り組みを継続していくとともに、それを国際理解に結びつけられないか等、取り組みに対しての位置づけを再検討していきたいと思っています。

【今後の日韓交流】

教職員同様、日韓の児童生徒の訪日／訪韓研修がいいと思います。実際、行ってみないと分からないと思います。インターネットを使った交流もいいと思いますが、どこか他人行儀で、その場限りになりかねません。お互いに顔を見合わせ、直接ふれあうことが一番のコミュニケーション能力の育成に繋がると思います。

しかし、予算の問題など様々な課題がある中で、厳しいかもしれません。その時は、先程のskypeを使ったインターネットでの交流がいいと思います。ただ、学校同士で打ち合わせを行ったり、子ども達の会話を通訳したりする英語が話せる教員が居なければなりません。中学校は専門教科の先生方がいらっしゃると思いますが、小学校ではなかなか話せる方が少ないので、難しいかもしれません。

中村 徳之

【最も有意義であった内容】

教育フォーラムでの講演会「最近の韓国教育の改革動向Ⅱ」の内容が、プログラム以後の韓国教職員交流に大いに役立ちました。学んでいくうちに日本の教育との違いや自分の考え方の小ささを改めて感じる事ができたからです。それは、自分の目で見て、聞いて、一般の人（市民）と触れ合うことで実体験から感じる事ができたからです。私にとっては見るもの聞くものすべてが有意義でした。

私は多少の反日感情もあるのではないかと感じてきましたが、見ると聞くとではまったく違いました。韓国の人々のやさしさや温かさに触れることが出来ました。お金を多く払ってしまった時など勘違いを指摘してくれました。また、町で迷った時、困っているとき年老いた人も若い青年も日本語と片言の英語を理解して、私の問いかけに熱心に答えてくれるなど、素晴らしい出会いと人間交流を感じさせていただきました。特に青年層の英語力は素晴らしいものがあると感じました。出発前の私の気持ちは、少し固いものを感じていましたが、教育フォーラムで学習したことが間違いのない着実な教育実践を実感しました。

歴史の重さや過去の重さも実感しました。

また、本校に昨年度来校した、ジョンさんとジャンさんに教育フォーラムでお会いした時は、どのように喜びを表現しているのかさへ戸惑うほどで国境を越えた1年ぶりの再開は遠い友達と会うような喜びでいっぱいになりました。

私にとって多くの方々との出会いは、忘れられない交流であります。今の時代の中で最も大切なことは、課題を解く努力と持続発展可能な世の中をつくる鍵は教育で

あり、信頼であるということを教えられ学びました。そのうえで、我々人間が地球村という発想を持ち、社会の信頼と希望を次の世代に受け継ぎ、伝える責任を持っているのだということです。

【成果】

教育現場にしながらこのような体験や経験をさせていただいたことは私の一生の宝であり、生徒・児童にこれを伝え、教育者として改めて成すべきことに努力したいと自分自身が変化してきたように思います。これからの日々の実践を通して「何を考え、今何をすべきか」を常に考え、自らの考えや行動にあらわしていきたい。教育現場でのこれからの私の実践を通して、貴重な体験を生かしていきたいと思います。

【貢献・課題】

1. 体験や経験を掲示板に工夫し国際理解教育として教室に掲示し、授業での参考資料として補助教材とする。
2. アジア文化交流としてベトナムとの交流をしていますが、ユネスコに登録する働きかけをするなど先生方の理解を得てより確実な実践に結び付けていきたいと考えています。

【今後の日韓交流】

児童生徒の交流では、絵や作品の交流、DVDによる学校紹介、インターネットによる交流など出来ることからやってみてはどうかと考えます。ベトナムとの交流では作品交流がうまくいっていますが課題は、学年間の引き継ぎや継続性にあります。

野村 健太郎

【最も有意義であった内容】

韓国の先生方との分団協議がもっとも有意義であった。はじめは通訳の方を介してぎこちない会話であったが、だんだんとお互いが国は違っても同じ教員である意識が生まれると、共通の話題が生まれ、非常に興味深い経験であった。

こうした韓日の教員による対話がもっと長い時間あったらと思うが、少しでもこうした時間を共有できたことは大切である。日本にいれば、竹島問題をはじめとした政治の立場や、イメージでしか語れないものが、じつさに目と目を合わせて会話をしてみれば、事前の情報など、そのほとんどは誤ったイメージか、誤解でしかないと感じる事が多い。こうした対話が教員間で行われるだけでも、韓日の関係が良好な道へと進むものだという確信を持つことができる。閉会式のときに韓国ユネスコ委員会の本部長の李氏が「思い出」をつくる事がもっとも大切だと語っていたことを忘れることができない。「もしかりに戦争が起きても、思い出の場所に私たちは

銃を向けることはできない。平和を作るとは、心の中に思い出を作ること。開会式での「心の中に平和の砦を作ること」という言葉と重なるこの考え方の意味が、韓国との先生方との対話の中ではっきりとわかった気がする。

【成果】

韓国で得られた進路指導・学習指導と総合学習やESDの取り組みについて、とくに「勉強」と「総合（創意）」は対立するものではなく、前者を発展させるものとして後者をとらえるという視点を得られたことは非常に大きい。グローバルな世界に対応する質の高い教育と競争意識を推し進めることが大切であり、そのためにこそ国や行政が教育格差を是正すること、また本当の「学力」とは、基礎的な勉強の上に築かれなければならないという点は学ぶべきものであった。

【貢献・課題】

本校の総合学習の一年間のプログラムを見直し、EIUやESDの課題に取り組んでいきたい。とくに本校では地域学習が不足していたことを反省し、次年度から地域との交流や生徒の教育について研究していきたい。

また、本校では今年度から各教室にメディア設備を導入したので、韓国の公開授業で学んだ授業方法やIT教育の向上などについてもさらに質の高いものへと発展させていきたい。

【今後の日韓交流】

本校でもESDの教育に取り組みながら、韓国のキリスト教の学校とも交流を持ちたいと考えている。現在の済州島にある細花高校との交流は継続しながら、より発展的な国際理解教育を本校のプログラムとして展開していきたい。

大谷 清人

【最も有意義であった内容】

学校訪問・教育庁での教育行政の説明・博物館見学・ホームビジット、どれをとっても大変有意義であり、充実した日々を送ることができた。強いてあげるなら、韓国教育の改革の動向が理解できたことである。事前にレポートには目を通していたが、実際の学校の様子を見たり、子どもたちと接して説明を受けたりすると、より深く理解することができた。改革の基本方針として心に残ったのが、貧困格差による教育格差の是正である。裕福な家の子どもは塾や習い事でますます力を伸ばすが、貧しい家の子どもはその才能とは反して、十分な教育が受けられないという社会問題が顕著になってきているのだろう。十分な教育を受けられなかったり、学校へ適応できない子どもたちが増えるのは、国家の危機と捕らえ国を挙げて教育改革に取り組んでいる。そのための政策と

しての、Weeプロジェクト、低所得者層の学費軽減なのであろう。他にも私立と公立の学費が同じであったり、修学旅行費が無償であったりする。最近では、給食の無償化も検討されているようだ。

これほどの政策を裏付ける予算は、国家予算のどれほどを占めているのか知ることはできなかったが、各教室や体育館にカーラーが完備されていることを含めて、韓国の教育政策は国の主導の下、国力増強を目指し、第一義とする予算の裏づけを基にして、強力に推し進められていることは、想像がついた。政府の教育政策の方針や改革の動向が実際の視察でよく分かった。

【成果】

課題1.「韓国における教育システムとその課題」について

韓国政府の教育政策の方針や改革の方策が理解できた。

課題2.「学校におけるESD活動の実際」についてESDを進める授業としては、参観することはできなかったが、ESD活動とは地域を教材とし、地域の持つあらゆる人的物的財産を活用して、教育を行なうことが分かった。地域を知り、地域と共生するところから持続可能な社会づくりが始まるのだと思った。

課題3.「韓国の児童・先生との交流」について

今回のプログラムを通して最も思い出深いものが交流である。児童との交流・先生方との交流・ホームビジットでの交流。子どもたちが身を乗り出して、聞いてくる姿が今も忘れられない。子どもの反応は、世界共通だ。

【貢献・課題】

課題1.については、本校職員への報告をし、海外の教育情勢に視野を広げる契機となるようにしていきたい。

課題2.については、自分の学校でも地域の持つ人材や施設を見直し、総合的な学習の時間において、ESDの視点から題材を見直してみる。

課題3.については、来年1月に韓国の先生方をお迎えする予定だが、児童・教職員としっかり交流してもらえるようにしたい。特に韓国の先生方には、韓国の学校を紹介したり、子どもの生活を紹介したりするなど、積極的に関わられるようなプログラムになるよう気をつけていきたい。

【今後の日韓交流】

ESDに取り組む始めて間が無く、ユネスコスクールに登録して初年度という本校の状況からすると、児童同士の具体的な交流というのは、現段階では思い浮かんでいないが、少なくとも来年1月には韓国教職員の方々が、来岡されるので、それに向けて韓国への関心を高めたり、教職員の方々との親睦を深めたりすることが出来ればと考えている。

大越 里江子

【最も有意義であった内容】

1. ホームビジット

韓国の方のご家庭に訪問させていただき、一般的な家庭の様子を見せてもらったり、お食事をごちそうになったりしながら、お互いのことを話すことができたのでとてもいい出会いをいただいたと感謝している。全くタイプの違う中学生と高校生の兄弟が、お互いに認め合い助け合っていることが感じられたり、将来の夢について教えてくれたりした。またご両親もとても親切で、お子さんを温かく見守っていらっしやう。そんなすてきなご家族と過ごした時間は国は違っても言葉があまり通じなくても気持ちの通い合う居心地のよい一時だった。

2. 淑明女子高等学校での日本語の授業

淑明女子高等学校では、日本語の授業に参加させていただいた。各グループに私たち訪問団が入り、先生の出題する日本についてのクイズに答えるという内容だったが、問題が韓国語で出されているので、生徒達は日本語、英語、ジェスチャー、絵など色々な方法で私たちに問題を伝えようと努力していた。クイズに答えるという目的があったので、お互い積極的に活動することができ、とても楽しかった。

【成果】

- ・韓国の教育制度は国が中心に行い、教育の施設や設備が大変充実している、教育を平等に行うために放課後教室を行っているなど、これまで知らなかった韓国の教育について知ることができた。
- ・ホームビジットで一般のご家庭に訪問させていただいたり、名所を見学したり、韓国料理を食べたりしてこれまで以上に韓国の文化に触れることができた。
- ・韓国の教職員の質の高さと熱意、児童の素直さ、勉強熱心さを交流の中から感じる事ができた。

【貢献・課題】

- ・韓国の教育制度について知ったこと、韓国訪問で体験したことを勤務校の教職員に伝え、少しでも韓国について知って国際理解教育に役立ててもらえるようにしたい。
- ・社会科や国際理解の授業で、韓国で体験したことを児童に話し、興味関心を持たせていきたい。

【今後の日韓交流】

- ・児童同士の文通。できれば興味関心が似ている子同士が文通をするより親しみを感じるのではないかと思う。
- ・国際理解教育において、児童がお互いの国についてのアンケート調査をメール等で行うとより意欲的に、広

がりのある活動にしていけると思います。

大隈 賢

【最も有意義であった内容】

当初は教育政策のハード、ソフト、また国のあり方に関心を持って研修に臨んだ。

しかし、終わってみると、「人との交わり」が一番に残った。これは、韓国の人々と交流するという体験を通じて、自分自身の考え方の枠組みが変わったからだと思う。

教育設備や、文化や、学校の授業、それらはどれも新鮮に見えたり、多くのことに驚いたり感心したりした。しかし、今回の研修であえて「最も有意義な」というのであれば、そうした「政策」「教育方法」「社会」を見たり知ったりしたことよりも、韓国の児童生徒、教職員、ユネスコ職員の皆様や、日本全国の先生たちとの交流できたことを第一に挙げたい。

どんな場所においても、どんなに IT 社会が進んだとしても、やはり教育で大切なのは人と人との交わりなのだと思います。そして、こうした交わりは、プログラムという意図的に作られた中だけにあるのではなく、それ以外の「あそび」の中にも同様、あるいはそれ以上にあったように思う。

KNCU メンバーや、ホームビジット先でした会話、学校にいる子どもと交わした挨拶、歓迎会で見た子どもの姿、そういった小さな交わりの 1 つ 1 つが何よりもかけがえのない体験であった。こうした自分自身でした体験から、子どもたちにも同じような体験が必要であり、ぜひさせたいという思いを持た。また、そうした体験こそが、心の中に平和の砦を築く上で必要であると実感できた。

【成果】

1. 国としての教育方針と、社会、家庭、児童、教師の実態把握

教育方針は生徒の才能を伸ばす教育と、教育の平等性の両立を目指していた。また公教育の信頼を得るため放課後教室の実施に力を入れていた。しかし、現実には厳しい競争社会があり、塾や予備校に通う児童生徒は多かった。その結果、体に不調をきたす子どもが多かったり、地域の地価水準により教育格差が生じていたりするようであった。教師のステイタスは日本でのそれより高い一方で、子どもが好き、こんな教育がしたいというような熱意よりは「給与が多い」「安定した地位」という理由で教師になるものも多いという面もあるようである。

2. 日本の教育設備との比較

ICT 環境は、国家、道(日本でいうところの県)レベルで

整備されている。英語ルームも充実していた。これらは日本の10年以上先を行っているように思われた。

3. 教師の指導法、児童の学ぶ姿勢の観察

進礼小学校では教師の指導法については、導入、展開、発展というように授業の進め方は決まっているそうである。英語に関しては全ての学校で英語教師+担任というTT体制がとられていた。

児童の学ぶ姿勢については、韓国の先生方曰く「あまり高くない」とのことだが、大人も子どもも「勉強すれば、夢がかなう」という信念を持って教育、学習していた。

4. 文化、風習、日本に対しての姿勢など、韓国についての理解を深める。

国家の政治レベルでは竹島問題など生じているが、個人レベルではどなたも友好的であった。

文化風習は、言語や、人をもてなす心など、その表し方に違いこそあれ、内面的な部分は日本と多くが共通していた。古来から、日本との結びつきが強いことを実感した。

【貢献・課題】

- ・写真、動画を用いて、児童・教職員への韓国研修の報告と、ユネスコ活動の紹介。
- ・学校として取り組める活動の模索と発案、実行可能なものの着手。
- ・ESD教育活動研修への参加。

【今後の日韓交流】

サッカーや野球、陸上などの交流試合、合唱や合奏などの発表会など、身体を使って交流をすることは、言葉を超えて理解しあえる機会になるのではないだろうか。

黄地 健男

【最も有意義であった内容】

1. ホームビジットで韓国の家庭の様子を知ることができたこと
2. 同じ校種である小学校に訪問し、教職員や子どもと交流できたこと

【成果】

1. 「国や文化が違って、人は同じ地球市民である」
韓国に来る前は、日本とどのようなことが違うのか見つけようといった気持ちが強かった。しかし、韓国の学校教育、歴史・文化、人の心と触れ合う機会を通して、数多くの共通点を見つけたり、数多くの思い出を心の中に作ったりすることができた。国や文化が違って同じ人間だと頭で考えたことはあったが、実際に触れ合う体験を行ったことで、人は同じ地球市民であると確信することができるようになった。

2. 「自分のまわりの人から変化を起こすという意欲と行動力を身に付ける」

ESDを行い、より良い世界を創り上げていくことは、一人ではできない。自己完結型ではなく、人との関わりを大切に、共に行動を起こしていくことのできる人間を育てることはとても大切であると感じた。そのためには、まず自分がそのような行動を実践することが必要である。学校や地域においても、より良い変化を自ら創り出せる人間になれるよう努力していこうと思った。

3. 「未来を生きる子どもたちの教育の在り方を考える」

未来の国際舞台で活躍できる生きる子どもを育てるために、何が必要であるか改めて考える必要があると感じた。学習指導要領に書かれている内容を子どもたちに伝えるだけではなく、ESDの概念をもとに各教科・領域をつなげ、地球市民として必要な資質・能力を育てるという大きなテーマで、現在の教育課程を見直し、整理していくことが大切であると感じた。

【貢献・課題】

1 つめは、「韓国文化を子どもたちに伝えること」です。韓国をはじめとする世界各国の文化を題材とした単元の開発を行い、授業を行います。また、校内に韓国文化を紹介する掲示板を作るなどして、世界のいろいろな文化を発信するといった活動も考えています。

2 つめは、「韓国の教育を教職員に伝えること」です。韓国の教育システムやユネスコスクールについての報告会を教職員に行うことで、情報の共有を行います。

3 つめは、「自校でESDの教育を推進すること」です。今ある学校の教育計画をESDの視点で見直し、整理することで、ESD教育の推進を行います。

4 つめは、「韓国の学校と継続的に交流すること」です。韓国の学校との交流を今回限りで終わらせず、学校訪問やホームビジットでの縁をもとに、姉妹提携を模索したり、プライベートに日韓の教育情報の交換を行ったりすることで、継続的な交流を行うことができたかと考えます。

5 つめは、「教師自身の国際感覚を磨くこと」です。未来を切り拓き、国際舞台で活躍していく子どもたちを育てるためには、教師自身も国際感覚を磨く必要があります。今後もESDの研究や語学をはじめとする多文化理解の研修に励み、自己啓発を行いたいと考えます。

【今後の日韓交流】

ESDで学習したことを紙・動画・HPなどの制作物にまとめ送付し合う。または、国際理解教育として、韓国の文化や言葉を学習し、日本で生活の様子を手紙にし、定期的に文通を行う。今回訪問した学校やホームビジットのホストファミリーの方とACUUを通じて連絡を取り合えば、実現できる可能性は高いと考える。姉妹校の提携については、校長判断となる。

須田 夏紀

【最も有意義であった内容】

やはり学校訪問・ホームビジットです。

韓国の方と話、触れ合うことが一番の国際理解につながり有意義だと感じました。

【成果】

このプログラムを通して得たことは、「出会い」「つながり」「理解」です。

「出会い」は、韓国の子ども、家族、先生方、日本各国の先生方。様々な人と出会い、話をしていく中で、自分とは違う文化・環境・考え。を知るきっかけになりました。

「つながり」1度あって話をする。心がつながって人と人のつながりになる。

「つながり」を感じ話することによってお互いを「理解」する。「理解」することによって、出会った人たちと同じ喜びを感じることができました。

「理解」しあうことは喜びを分かち合うことができるということを感じました。

【貢献・課題】

国際理解の活動は常時的に行いたいと思います。一番近く文化も似ている韓国から始め、自分たちの文化と共通点・相違点を知り、理解し認め合う活動をしたいです。

(服・食・陶芸・言葉等)

「韓国の文化を知ろう」

↓

「似ている文化があったよ！」

↓

「良いところを紹介しよう」

できることならば相手国の小学校とつながりをもち、お互いに紹介しあいたいと思います。

【今後の日韓交流】

交流としては、教員のホームステイ・学校1日体験をしたいです。

短い時間でいろんなところに回るのはではなく、1日体験をさせていただきたいです。

辻倉 史子

【最も有意義であった内容】

フォーラム、懇親会、現地見学や学校訪問など、いずれのプログラム内容も有意義であったため、その中からひとつを挙げることは難しいです。しかし、それらの中からあえて一つを挙げるならば、グループでのプログラ

ムレビュー会議です。限られた時間ではありましたが、それまでのプログラムを総括して振り返る上で大変有意義でした。

韓国最終日(9月3日)の報告会に向けての話し合いの場として用意された時間でした。最終日の報告内容に沿って、「本プログラムに対する事前の期待」「本プログラムを通じて学んだこと」「帰国後のフォローアップ活動」などについて話し合いました。

グループ内で項目毎に更に担当を分けて話し合いが進められました。参加者が互いに学んだことを確認できたと共に、韓国と日本を「教育」という観点で見つめた際、それぞれの見解を知ることによって多くの気づきがありました。

【成果】

韓国と日本との古くからのつながりを示す文化的な遺産を、自身の目と耳と心で学ぶことを第一の課題としていました。実際にこれらを目にした感動と共に、改めて「歴史を知る」ことの喜びを体感しました。民芸品、伝統芸能、陶磁器、漢語など、韓国で目にするあらゆるものに、日本との文化的な繋がりを感じることができました。

参加当初は温故ばかりに関心を持っていたのですが、今般のプログラム参加で、韓国の世界の動向に目を向けたグローバルな教育、革新力に目を見張りました。韓国の教育現状からは、その先進性とナショナリズムを強く感じました。これら韓国の文化や教育についての再認識や新たな知識が大きな成果であったと思います。

また、韓国にある文化遺産や自然遺産が、ESD という観点から、地域学習や諸学習にどのように取り入れられているかの好事例を学ぶことを第二の課題としていました。本プログラムにおいて、1.焼き物の町、金海市の金海粉青陶器館及びクレーアーク金海美術館と進礼小学校の提携、2.牛浦池生態教育における施設と学校との連携、これら2つを実地見学する機会を得ました。韓国における美術館・博物館等の文化施設の教育的な利用と学校教育との連携と現状を見ることができました。いずれも文化施設と学校との提携については、日本においても見られる実践と共通点が多かったです。地域が誇る自然や伝統産業を学校教育の中で活用することで、地域を愛し、地域を守ろうという未来の担い手を育む ESD の取り組みの好事例でした。

【貢献・課題】

帰国後に早速、韓国の初等学校や児童の様子を、担任をしている学級の子もたちに写真とビデオ映像で紹介しました。テコンドーの演武の映像に拍手が起こりました。運動会に向けて「組み立て体操」に取り組む児童にとって、精神統一して気合いの入った演技が、見る者に感動を与えることの手本となりました。隣国の同世代の様子に興味をもつらしく、多くの質問もありました。

これから同時代を共に生きる隣国の仲間から、少なからず影響を受けた様子が伺えました。インターネットや図書などを用いた隣国、韓国についての調べ学習にも取り組みたいと考えています。姉妹校提携は難しいかもしれませんが、互いの生活や文化、興味・関心を直接交流できる機会を探ろうと思います。

プログラム参加中に見学した地域や施設との連携事例と照らしてみると、日本の教育現場での同様の取り組みを確認することができました。奈良市における世界遺産学習では平城宮跡資料館や奈良国立博物館の施設協力を受けています。今後も、これらの施設のみならず、その他多くある県下の美術館・博物館の文化的な財産を、学校教育とのつながりの中で活かすことができる提携を考えようと思います。地域が一体となった教育をめざして、学校側から積極的に協力を呼び掛けていきたいです。

【今後の日韓交流】

勤務校についてはユネスコスクール未登録です。ユネスコスクールへの参加で、より日韓の交流の可能性が広がると感じました。登録審査については、国内ですでに待機校が多いとの現状も聞き及びましたが、本校も登録に向けて、まずは校内への提案を考えたいです。

今回の訪韓の際に我々に求められた文化紹介の授業や質疑応答は、国際理解教育の機会として、児童にとっても大変意義のあることだと感じました。これまで考え及びもしなかった訪日の韓国教員訪問団の受け入れや文化交流の機会を、積極的に、前向きに考えてみたいと思いました。また、取り組みの継続のためには校務分掌の設置など諸問題もありますが、日韓交流のために、自分にできることに、前向きに取り組んでいきたいです。

山本 泰久

【最も有意義であった内容】

すべての内容において、見る物・聞く事・感じる事が初経験であり有意義であったが、1つに絞るとなると学校訪問だと思う。小学校・中学校・高等学校に訪問したが各学校それぞれに地域性や特色があることを感じた。ただ、どの学校においても環境整備は日本より優れており教室はもちろんのこと体育館にまで空調設備が完備されていることは驚きであった。環境整備面においては、今後の参考としていきたい。

淑明女子高等学校の訪問では、日本語の授業に参加させていただき生徒といっしょに問題を解いたが、言葉の壁があり四苦八苦しながら答えを導きだした。答えが正解となったときは生徒と共に喜びを分かち合い、間違えれば残念がり少しの間ではあるが一体感を味わうことができ楽しい時間を過ごすことができたことは心に深く印

象づく出来事であった。

安南中学校においては、生徒との質問のやりとりを行い生徒の本音の部分を引き出しことができたし、教師との懇談においても韓国教育の生の声が聞くことができた。

国の違いはあるけれども、日本も韓国も教師は教育に対して真摯に向き合い、生徒は生徒で色々悩んだり学ぶことは学びながら一步一步確実に成長していく姿は両国とも同じだと感じた。

【成果】

学校教育については、学校の環境設備面・家庭での教育方針など日本と韓国の教育現状の相違点、また国際理解教育に対する重要性についても改めて認識させられた。

プログラムとは別となるが、日本の教育現状についても参加された方の各地域における学校の現状等についても情報を入手することができた。参考となる事例も多く今後の当町の教育行政の推進に役立てていきたい。また、学校訪問や歓迎会では温かく迎え入れていただき感謝した。その内容や体制づくりを参考とし来年1月に予定している当町での韓国教職員の受け入れに活かしていきたい。

各自で設定した課題の1つ、学校不適應等の児童生徒の問題についても、学校訪問時の韓国教師との懇談会やホームビジット、また参加者の学校の様子を聞くことにより、今後の取組みの参考にできる情報を得たことは成果として大きかった。もう1つの課題とした危険社会の対応についても、自然災害に対する認識の低さを痛感し防災計画が単に計画で終わらないような取組みをしていきたいと思った。

【貢献・課題】

学校の施設整備面については、児童生徒が安心安全に教育できるような環境を整備していくために年次計画を立てるなどして関係機関と調整を図っていく。

災害関係については、既に各学校においても防災に対する意識付け・対策を講じているがより具体的に何をどうしなければならぬか、何が必要なのか何がたらないのかをひとつひとつ協議し防災意識の徹底を図ってきたい。学校組織だけでは対応できないことも多くあると思うので、教育委員会・学校・地域・町が連携し町全体の防災計画についても見直しを図り、更なる防災対策の徹底・意識の高揚を図ってきたい。

国際理解教育については、教育委員会・学校で調整を図り教育の重要性の周知を行い、1つでも多くの学校で国際交流の充実が図れるよう姉妹提携やユネスコスクールの情報提供を行い広めていきたい。

来年1月には韓国教職員の訪問団を当町において受け入れする予定であるので、今回韓国で受けた温かい歓迎を参考にするとともに日本で受け入れられた他地域の状況等についても情報を入手し対応していきたい。

【今後の日韓交流】

相互に学校訪問を重ねることができれば良いかと思うが現実的には難しいかと思う。その他での交流となれば、学校紹介ビデオの交換・児童生徒・教師間の文通やメールでの交流、また教材・教具の提供やプレゼント交換などの実施は可能性と考える。

当町においては、来年1月に韓国教職員の訪問受け入れを予定しており、訪問受け入れ学校の調整や歓迎の仕方について今後検討していきたい。

大和 晃二

【最も有意義であった内容】

初等学校（小学校）から中学校、高等学校まで様々な校種の学校現場を見学できたことやそこで教える韓国の先生方の話を伺うことができたことがもっとも有意義であった。

私の場合、ホームビジット先が自分と同じ高校教員をしている鄭先生のところであったので、様々なことを教えて頂き、おおいに参考になった。韓国の高校生の放課後の多くは、放課後学習といわれる受験のための自習時間に費やされる。先生の勤める高校でも、テッコンドーなど一部の強化クラブを除いて、日本の部活動のように毎日活動をするものはないということであった。

それほど強くはないが、部活動に汗を流しながら、勉強にもある程度、努力するという日本でいえば平均的な学生は、韓国では存在できないのであろうか。鄭先生の高校生の娘は訪問時間中は学校での自習で戻ってこず、日本であれば、親は心配するものであろう。帰国後、本校でハングルを教えるネイティブの先生にこの話をすると、彼女は逆に、来日時、放課後に日本の生徒が自由に下校したり、部活動をするのを見て、信じられず、衝撃を受けたといわれていた。

このように一生懸命、受験に取り組んでも、非正規雇用者が50%を越え、大卒就職率が6割に届かないという厳しい格差社会の現実が、日韓教師フォーラムで貧困こそが最も危険社会の要因であるという認識につながっているのだらうかと感じた。

【成果】

1.韓国の情報教育や英語教育の先進性とそれを支える国の教育投資の手厚さ

どこの教室や学校においてもモニターやICT機器が備わっており、授業での活用がなされていた。英語教育についても、初等学校3年以上に正規教科として英語を導入し、強化策がとられている。韓国には教育税があり、この税により公立学校の施設設備はもとより、教材費などの様々な支出にあてていると聞いた。日本との教

育システムの違いといえばそれまでだが、国として教育への投資が充実しており、うらやましく思えた。

2.韓国教員の養成システムや研修制度について。

韓国では初等学校や中学校免許は教育学部に進学しなければ免許が取得できない。

日本の開放性免許制度とは異なるようだ。教員の職業としての人気や社会的地位は高く、待遇も良いようである。学校の独自予算で海外研修に派遣されているケースもあり、公立学校であっても実績による学校毎の予算額の違いや校長の予算裁量権が大きいようだ。学校独自予算で教員を雇用しているケースもあった。

3.韓国での国際理解教育や持続可能開発教育の実際について

ESD教育について、見学した学校の多くでユネスコクラブが実践の中心となっており、学校全体というより特定のクラブや個人活動によって支えられているようにも思えた。各学校が世界市民を意識したグローバル化に取り組む姿勢が印象に残った。

4.韓国と日本の健全なナショナリズムについて

韓国の学校では、どの教室にも当然のごとく国旗である太極旗が掲示され、愛国心が協調されている。研修期間中、竹島（独島）問題についての見解が聞きたいという質問を韓国側の先生から受けた。我々の主張を理解しているのかを知りたいという趣旨であったが、日本人は往々にして相手を配慮したり、摩擦を避けようとして、自己の主張をせず、かえって誤解を招く場合がある。語弊があるかもしれないが、韓国ではやや自国の立場を「教えすぎ」、日本では「教えなさすぎ」ということを感じた。学生から韓国人としての誇りを持ちなさいという教育を受けているということを各所で聞くことがあり、それはとても新鮮に感じた。

5.韓国の学校における先生と生徒の姿について

睡眠時間を削ってまで、日々勉強をする韓国の教育は私から見ると知育に偏っているように思えるが、実際は子どもたちは屈託なく、積極的な学校生活を送っていた。徳育の面でも、儒教文化のせいなのか、目上の人に対して敬意を持つことが行き届き、あいさつや授業を受ける姿勢はどの学校でも、きちんとしており、教師や学校の権威が、生きているように思えた。特に先生方が自信を持って子どもたちに対して世界のリーダーとなるような立派な人間になり、国民としての気概を持つように教育をされている点が印象的であった。

【貢献・課題】

もともと新設高である本校は門司港という歴史的、地理的に韓国、中国との関わりが深いという特色を生かして「アジアに開かれた学校」というスローガンを掲げて種々の取り組みをおこなってきた。中国、韓国からの留学生を迎えてのクラス単位の国際交流会や意見発表会を

行ったり、ハングル、中国語の講座でのネイティブの講師の方を通じての文化祭等での発表などをおこなってきた経緯がある。残念ながら、数年前に北朝鮮のミサイル問題が持ち上がり、韓国への修学旅行が中止になって以来、このような国際交流の取組みが動きが活発でなくなっている。今回の研修で学んだことを踏まえて、私は、校内の様々な場で多文化共生・国際理解教育や持続発展可能教育の視点を本校の教育・学習活動に取り入れていくことの意義を提案していきたいと考える。

【今後の日韓交流】

本校はユネスコスクールではなく、福岡県の状況を考えて、すぐに申請をして取組みを行うことは難しいと考える。まずは今回の研修を契機として日韓教員同士でのメールでの交流を通じて、意見交換をしながら、双方のつながりを深めていきたいと思う。日韓交流については、長期的には前項で述べたような取組みを進めていきたい。

また今後、このプログラムが継続することを、願うとともに、韓国の教員が来日し、福岡に来られるような場合には、できる限りの協力をしてお返しをしていきたい。

吉田 弥

【最も有意義であった内容】

どのプログラムも有意義であったが、学校を訪ねて授業中や休み時間の教室に入り、授業の様子や子ども達の態度、教室掲示などを見ることができたこと、子ども達や教師と交流することができたことが特に有意義であった。

小学校では、見た限りの全教室で机が全員黒板を向いており、教師や黒板、モニターに集中しやすい配置であった。教師はパソコンを使ってモニターで教材を提示していたが、子ども達が討論をしたり、自ら調べたことを交流したりするような場面がなかったことから（参観できた授業が少ないので何とも言えないが）、教師主導の教授型授業スタイルが多いのではないかと推察された。整備されたICT環境を活かして子ども達自らプレゼンしたり討議したりする授業を想像していたので意外であった。日本ではICT環境は整っていないが、表現活動や問題解決的な学習展開を重視した授業を工夫しているので大きな違いを感じた。しかし、子ども達は真面目な学習態度で、教師の発問に真剣に答えている様子が見られた。子ども達の一生懸命学習に取り組む姿勢は日韓で少しも違いがないと思った。

中学校で子ども達と交流した際には、子ども達からいろいろな質問が出された。特に子ども達が興味津々だったのは、日本の子ども達がどれくらい勉強しているか、塾

や家庭学習についてであった。厳しい受験戦争に勝つために必死に勉強している彼女たちも、韓国の受験競争の有り様に少なからず疑問や不合理を感じているように思えた。毎日夜遅くまで学校や塾で勉強する子ども、お金をかけて支援する保護者、保護者の負担を減らすための放課後教室…。少しずつ改善されてきていると説明があったが、社会の仕組みや人々の意識、受験システムが根本から大きく変わらないと、「(受験勉強のためにスポーツに親しむ時間がなく) スポーツが苦手な子どもが多くかわいそうだ。」という韓国の体育教師の嘆きの声はなくならないと感じた。

【成果】

ESDの授業参観、具体例な実践事例と子ども達の変容について知る

残念ながら訪問した学校でESDの授業を実際に見ることはできなかったが、理論や取組みの概要については知ることができた。日本では地域や日本のよさを再確認し、環境や伝統を守るところで留まっている実践事例が多いように思うが、韓国ではよりグローバルな人材の育成に目標を置いていると感じた。ボランティア体験や、英語教育、学力向上のための取組みに力を入れ、よりよい変化を作り出す国際人の育成をESDの主体として取り組んでいることが分かった。しかし、授業実践によって子どもたちがどのように変容し、どのような行動につながっているのかという報告は聞くことができなかったのが残念である。

ESDの目標は「生きる力」を身に付けさせることであり、「認識能力」「批判的な思考能力」「実践力」を育成することであることが、今回のプログラムを通して再認識することができた。これからも学んだことを活かして子ども達に「生きる力」を育む授業実践を重ねていきたい

【貢献・課題】

韓国の児童生徒はいかにして高い学力を身に付けているか知る

韓国の児童生徒の高い学力は、良くも悪くも厳しい受験体制の中で、必死に勉強をしていることが大きな要因であると思った。もちろん、潤沢な教育予算からのICT環境の整備、放課後教室やインターネットを利用した補充学習のシステムなど、教育環境が整っていることも大きい。また、韓国では教師という職に就くことが難しく、教師の資質水準が高く保たれていることも要因の一つであろう。一方、指導法や授業スタイルでは日本は決して遅れをとっていないと自信を深めた。

日本でも電子黒板などのデジタル教育機器が少しずつ導入されてきている。ICT環境整備はまだ韓国に足元にも及ばないが、今ある機器を使いこなせるようになりたいと考えている。また、子ども達に自ら学習する意欲を持たせて、自学帳の取り組みなど家庭学習を充実さ

せる手だてを工夫したい。また、教師としてのスキルアップ、指導技術を磨くために、いろいろな研修に積極的に参加したい。

【今後の日韓交流】

- ・勤務校では、様々な国や地域の訪問団に来ていただいている。時間が許す限りじっくりと学校を見ていただいたり、研究授業を参観していただいたりしている。韓国の教職員が訪問されてもこれまでと同様に、普段の教育活動を自由に見ていただき、日本の教育システムにふれていただきたいと考えている。希望があれば、授業をしていただいてもけっこうだが、子ども達と自由にふれあう中で質問に答えていただいたり、日韓の教師が自由討議の中で情報交換できればよいと考えている。
- ・学校や児童生徒の交流は、姉妹校提携や定期的な交流はせず、必要ときにいつでも気軽に情報を交換したり、何かを教え合ったりする関係が望ましいと考えている。

B グループ

本多 成人

【最も有意義であった内容】

<海龍初等学校訪問>

理由：現在の勤務校と状況がとてもよく似ているが、学校運営の方法が異なる。

似ている点：1.児童数減少で120名になった点。勤務校160名。2.空き教室がたくさんあり、その有効活用を行っている点。勤務校校舎1階に特別支援学校小学部が併設。3.読書教育に力を入れている点。勤務校は創設時から読書教育を行っており、読書会や読書発表会を盛んに行っていた(市民図書室が校舎内に併設されている)。しかし、海龍校のようにディベートで読書討論会を行い未来学習力量強化するまでは行っていなかった。4.児童の写真や活動写真の掲示。5.地域の協力が得られている。

異なる点：1.学校予算の使い方。本校は枠にとらわれず自由に使われるが、勤務校では使い方が決められている。2.学校運営がトップダウンに対して、勤務校ではボトムアップ(教職員からの提案)が多い。

同じような環境に置かれた小学校を訪問でき、教室環境や掲示の仕方などで見習うところがずいぶんとあった。予算規模は異なるが、よりよい教育活動を行うために知恵を出しあっているところは同じであった。

【成果】

<個人が設定した課題に対して>

1.『韓国における特別支援教育の実態と学校間交流』

ソウル精進学校を訪問した。特に配慮を要する児童のうち、約30%が特別支援学校、52%が特別支援学級、18%が普通学級で学んでいる実態があった。学校の施設・設備はすばらしく、個々の能力を伸ばす教育がおこなわれていると感じた。またここで学んだ生徒が社会で生活できるように様々なプログラムが組まれていた。

2.『給食制度の実情と環境との関係』

どこの学校にもすばらしい食堂があった。寄宿舎のある学校や放課後教室のある学校では一日3回も給食が出る学校もあり、給食が児童生徒にとりとても重要な位置にあることがわかった。また無償給食制度は「義務教育は無償にする」という条項に当てはまると聞き、日本とは異なると感じた。給食制度は受験と関係があり家計負担の減少につながるが、それだけの予算が確保されるかどうか。給食制度が大統領選挙の争点の一つになるまで大きいとは気がつかなかった。

3.『韓国におけるESD』

高校訪問する中で、ユネスコ活動はユネスコクラブやユネスコ組を中心として進められており、学校全体でユネスコ活動を行っているところは、今回は見る事ができなかった。またユネスコ活動を行っているといふ学校へ行けるチャンスがあることを聞いて日本と随分違うと感じた。

<各自が得られた成果>

1.『島津事務局長の話から得たこと』

私の学校はESDで縦割り活動を行い、リーダーシップとメンバーシップを備える人間育成を行っている。グループ内で発生する課題を解決するため話し合いを持ったり、卒業生にどのようにして課題を解決したのか聞いた。創作ダンスや創作劇の中心としてリーダーシップを養っている。島津事務局長の話から、一歩進め、自分たちのグループ内の課題だけでなく環境や自然など視野を広める課題に立ち向かう必要を感じた。教科の中で扱うことはできそうである。小学生の段階ではあるが、小学生なりの考えがあるはずであり、また考えなければならなかった。世界で起こっている様々な課題を自分の問題としてとらえられるためにより具体的な教材を開発する必要があると感じた。

また徐協力事業本部長の日本での生活の様子を聞き、その国の人を具体的に知っていることと銃を向けることはできない。平和を作る方法はある人を自分の心の奥に納めておくことであるといった言葉が残っている。

2.『9月1日(木)市長主催晩餐会から得たこと』

当初の計画と違い、市長主催の晩餐会となった。市長が晩餐会に参加することはよくあることだが、急遽晩餐会の会場を変更して市長主催となることはまず考えられ

ない。また一人一人にお土産もいただき、それだけ我々を大切にしてくれた現れであると思う。またがんばっている学校に対して市長がポンと自由になるお金を出すことなど日本では考えられない。それができる市長の教育に対する力への入具合と権限の強さを感じた。

3. 『学校訪問から得たこと』

多くの学校訪問をさせていただいたが、共通して言えることは、「先生の言うことはしっかりと聞く」という雰囲気のみなびていることである。楽しくわかりやすく学習することより、先生がきちんと伝えることに重点が置かれていると感じた。韓国の先生の凛とした表情がとても印象的だった。

【貢献・課題】

伝え広めること…ESD への参加校を増やすこと

自分の置かれている立場により広め方が違うと思われる。また「鉄は熱いうちに打て」という諺があるようにできるだけ早いうちに多くの人に報告をして興味関心を高めたい。ESD 登録校になったとしても自分からアクションを起こさなければただのエンブレムでしかない。

9月4日以降行ったこと及び、今後行うこと。

1. 学校で職員に報告…本校は週2回終礼を行っている。そこで今回のプログラム内容を小出しにして報告している。一度に話すと話が長くなり、散漫になるので1回3分で話している。前回は、順天女子高校の歴史館でみた日本人の卒業証書の話から、日本が韓国を統治していた時代があり、そこで日本の教育がされていたこと、卒業証書も現在のものと変わらないこと、卒業した人は韓国で先生になっていることなどについて話をした。昨日は給食制度について話をした。
2. ブロック校長会で報告…毎月1回市内中学校ブロック毎に校長会が開かれている。その場で報告するとともに、ユネスコスクールに参加するメリットなどを話す予定。
3. 定例研究会で報告…月1回市内教職員が定期的に研修会を行っている。28の部会があり、私は国際理解教育部会の長をしている。偶然今月は私が当番に当たっているので参加している他の学校の管理職や教職員に対して報告並びにユネスコスクール活動について話をする予定。
4. 市川市教育委員会及び市川市ユネスコ協会への報告…今回のプログラムについての説明および成果を報告。
5. 帰国教員に対して報告…私は日本人学校から帰国した教職員で作る団体に属している。その団体の教員は海外に対して興味関心はとて高い。年1回全国大会が開かれているが今年の大会でもユネスコスクールに関して報告があった。効果的かもしれない。
6. 学校だよりに韓国の学校の様子を掲載し、子どもたちに知らせる。9月号で実施。

7. 保護者に知らせる…2ヶ月に1回、PTA 運営委員会が開催される。その席上で、今回の内容を伝えていく。

＜横のつながりを大切にすること＞

今回のプログラムで同行した教職員の横のつながりを大切にして、情報交換を行うこと。今回メールアドレスを交換したので、それを活用して情報交換を行いたい。

1. 同行した教員の学校の公開研究会にはできるだけ参加する。千葉県八千代市の小中学校は毎年公開研究会を実施している。

2. 私の学校はESDを常時活動(縦割り清掃活動)で行っている。学校見学はいつでも可能。ESDに参加している市川鼎高校と同じバス(JR 市川駅発国分高校行き)。

【今後の日韓交流】

1. 韓国内においては、ソウル日本人学校や釜山日本人学校と現地校交流が考えられる。たぶんこの日本人学校でもやっていることなので、韓国でも行っていると思う。
2. 国内においては、国内にある大韓民国学校との交流が考えられる。事前打ち合わせや準備に時間がかかるが、実現の可能性は高いと思う。
3. 韓国の教員とは個人的な交流が考えられる。私は順天女子高校の日本語を教える先生のお宅にホームビジットをした。その先生は日本語ができるので手紙等で交流をしていきたい。可能性は高い。
4. 言語の壁が大きいと思われるが、翻訳ソフトを活用して今回訪問させていただいた学校や教育庁・市長にはお礼の手紙を出す予定である。可能性は高い。

藤塚 正

【最も有意義であった内容】

一つ一つの内容が充実していて、全てが有意義な内容でした。そんな中で、敢えて一つあげるとしたら、人との出会いでした。人との出会いを通して、相手を理解し、自分を振り返る。そして、未来社会に向けて、自らの心の変容の必要性に気付いたことです。訪韓した日本のメンバーで学校や教育団体を作ったら、それこそ、立派な教育ができる集団の集まりになると確信しました。教育には、お金が必要です。必要なお金を少しでも無駄にしないように、また、教育にお金をかけてもらえるように、現場に戻って発信していくつもりです。韓国から学んだことは沢山あります。すぐにできることから現場に生かしていきたいと思います。

【成果】

1. 韓国の各種学校、教育機関と日本との違いを把握し、良い面は、日本の教育現場に普及するようにする。自律と競争、責務性を通じて教育の秀越性を確保し、

学校教育の効率性を提供する教育を政府が推進していた。そして、未来社会に必要な教育力養成に取り組んでいた。教育施設、環境の充実に取り組むことが大切であると学びました。

具体的には、英語学習の早期取り組み、英語以外の外国語の取り組みの必要性を感じました。また、教科教室制、創意経営学校支援事業、学力向上重点学校、科学重点学校、マイスター校、寄宿型学校、STEAM教育、教育福祉政策、が非常に参考になりました。不登校を抱える日本では、韓国の Wee クラス相談教室のような施設を多く設置すべきであると思います。

2.国際理解教育（EIU）と持続発展教育（ESD）の好事例を探る。

伝統文化を継承するために、体験学習が大切です。韓国では、キムチや味噌作りを、保護者が参加して実施していました。生徒が作った白菜をキムチ作りに使用し、食育教育になっていました。どんと焼きや地域のお祭り、うどんやそば作り餅つきなど生徒には積極的に参加させることが大切だったと認識しました。また、一人暮らしの老人や老人ホームの人たちにも食べさせてあげることが必要です。

3.日韓教職員同士やホームビジットなどで知り合った人と人との出会いを大切に、日韓両国が共に成長できるようにする。

日韓に係わらず、異文化の人たちとの交流の機会があったら積極的に参加し、お互いを理解し合いながら友好を深め、未来社会の構築に関与する姿勢を持ち続けたい。

4.世界遺産見学等を通して、韓国文化の理解に務め、日韓両国の文化遺産の保存を真剣に考える。

環境汚染、自然災害など危険要素に直面している現代社会では、自国だけではなく世界に視野を広げ、文化遺産を保存継承していくことが大切であると再認識しました。順天湾、樂安邑城にはとても感動しました。他国の文化遺産に触れることによって、改めて日本の良さを確認できました。有形、無形の文化遺産を大切に教育を実践します。

【貢献・課題】

まず、勤務校の地域を振り返り、伝統行事においては積極的に地域に参加し、貢献することを継続していきます。また、地域からの有識者を学校に招いて伝統文化の伝授に協力を要請します。今回のプログラムに参加した学校との情報交換や交流を活発にできるようにすると共に、ホームビジットで知り合った家庭との交流やACCUからの招へいプログラムに関して、日本で取り組む企画に対して積極的に参加させてもらいます。

【今後の日韓交流】

機会があれば日本の名所、旧跡を紹介する。また、日本の伝統文化に触れる機会を持ちたいと思います。

濱中 葉子

【最も有意義であった内容】

韓国の現場の先生方と出会い、直接お話してきたことである。実際に小・中・高等学校、特別支援学校を訪問して、韓国という国の教育に対する熱意と教育に重きをおく施策に驚いた。順天の農漁村にある学校の校長先生は「どんな家庭環境であれ、農漁村の子どもたちにもいい学校に行ってもらいたい。そのために我々教師ががんばらなければならない」とおっしゃっておられた。そして特別予算をとり、学校設備を充実させ、全校生無償放課後学校プログラムを運営し、学生を育てようとしていた。校長先生のリーダーシップの下、「未来の子どもを育てたい」「いい学校にいつてほしい」という教職員の熱意が伝わってきた。そうした熱意と実践には大いに学ぶものがあると思った。

【成果】

1.韓国に対する理解

私的旅行を含め今回が4回目の韓国訪問であったが、韓国がより身近な国になった。観光旅行では入ることのできない場所、関わることのできない韓国の教職員、生徒と触れ合うことができて、韓国理解が一層深まった。また、2013年に開催される順天の国際庭園博覧会にも是非行ってみたいと思った。

2.日本の教育を見つめ直す韓国の教育は「競争」と「人間性」という言葉で表現されていた。今までは学力重視社会だったが、学力だけではいけないということに気づき、人間性の追求にも力を入れ始めたそうだ。日本の教育基本法は教育の目的を「人格の完成」としている。教育現場においても、学力と同様にあるいはそれ以上に人間性を養うことに重きを置いている。韓国は「競争」と「人間性」をバランスよく追求していきたいということであったが、このプログラムを通して、改めて「教育の目的が何か」を考えることができた。

3.人との出会い

このプログラムに参加したことで、日本・韓国の様々な方々と出会うことができた。職種、出身地の異なる方たちと様々な話をする中で、今後の教育実践への意欲と刺激を受けた。この出会いをこれから教育実践の財産として大切にしていきたい。

【貢献・課題】

1.ユネスコスクールとしての取り組み

韓国のユネスコスクールの理念にもあるように、「私たちの小さな変化が世界を変える」という意識を持つことが大事だと感じた。国際社会を見据え、コミュニケーションのための英語や対話方法を学び、自分とは異なる人

を理解し、お互いの良さを認め合えるような国際人を育てたい。

特に異文化理解と環境教育に取り組んでいきたい。現在、本校には中国籍、ペルー籍、フィリピン籍と外国にルーツのある生徒が在籍しており、国際理解教育として今年にはペルーの演奏家に公演していただいた。そして今回の韓国訪問をきっかけに、ぜひ韓国の学生と連携を取りながら、異なる習慣、伝統、価値観に対する理解を促したい。環境教育は自分たちが住む地域が直面している環境問題を検討し解決の手段を考えさせたい。

なお、本校一年生は現在、世界遺産教育に取り組んでいる。

2. 危険教育・防災教育の取り組み

1995年1月に阪神淡路大震災が起り、2011年3月に東日本大震災が起こった。東北で今、何が起こっており、何を必要としているのか、現地に足を運んで知ることが大切である。今回参加されていた気仙沼の先生に防災教育という観点で講演していただくべく、現在話を進めている。今の自分にできることは何かを考え、それを行動に移す力、そして予測不可能な出来事に対応する力を生徒につけさせたい。

【今後の日韓交流】

生徒同士はインターネットを使ったメール交換、またテレビ会議での交流が考えられる。その際は英語を使って行いたい。どちらの国にとっても母国語ではない英語を使い、コミュニケーション能力を育むと同時に、お互いのことを理解できるようになることを目指す。年賀状の交換や学校紹介ビデオを英語で作って送るなど、身近な題材であればさらに取り組みやすいだろう。また、可能であれば日韓の教員がお互いの学校を見るチャンスがあればと考えている。

平元 舞

【最も有意義であった内容】

ESD 日韓教職員フォーラムです。ESD についてよく理解していなかった私にとって、プログラムの最初にESD についての講義や韓国教育の現状を聞いたことで、韓国教育について理解をもってその後のプログラムに参加することができました。また実際に韓国の先生と意見交換をしたことで、韓国と日本の違いを学び、韓国の方の学力向上に対する意識の高さを感じました。

【成果】

韓国は教育に力を入れているという状況を実際に見ることができました。韓国の競争的な社会が反映していて、勉強してよい大学に入るという意識を親だけでなく子ども自身も目標としてもっていた。夜11時まで学校で学習

する高校生や夜になっても塾帰りのような小学生・中学生を目にすることがありました。学校の設備や学習のプログラムが整っていましたが、それには多大な資金や国からの教育予算があるのだとわかり、国家のあり方によってまた教育の質や価値も違うのだと感じました。その中でも日本の教育とは変わらない点があることもわかりました。4つの学校を訪問させていただき、韓国の教育現場を見ることができました。

また、日本の先生方と交流することで、学校での取り組みを教えていただき、今後も継続していけるような関係ができました。

【貢献・課題】

学校に戻り、まず、学級の子どもたちに写真や映像で韓国の文化や、韓国の子どもたちの学習する姿を見せました。私が韓国に行って感じたことを伝えました。これから、このプログラムを通して私が見たものや学んだことをデータとして残るようにし、学校の職員に伝えます。それから、今回できた韓国の方や日本の教職員の方とのつながりを継続的にしていきたいと思います。

【今後の日韓交流】

韓国の教職員の方がまた日本に来られるときには、本校にきていただき、子どもたち・職員と交流ができればと思います。今回知り合った韓国の先生やユネスコの方と連絡を取り合っていれば、何かの機会に交流する場ができるかもしれないと思っています。

稲垣 成光

【最も有意義であった内容】

今回の訪問では、見るもの、聞くことの全てが有意義な研修であったことは間違いない。話しを聞いたり、写真を見たり、映像で見たりするのではなく、人・文化・歴史・自然など実物に直接触れ、かわる中で、その迫力に迫ることができた。

また、日本各地のから参加した公立・私立の教職員と日本各地の教育事情について交流することで、日本国内の横の関係を確かめ合うこともできた。多少の教育施策の違いや実態の違いはあっても、日本の教育施策の方向性を確認した上で、韓国訪問にかかわり研修を深めることができたことは大きい。さらに、東日本大震災に伴う被災地から参加した教職員の心情や今後の復興施策への展望など、被災地教職員と一体となって日本復興を誓い合え、韓国の教職員をはじめ、教育関係者に発信できたことは大きな成果である。

一方、今回のプログラムの中で、ホームビジットや児童生徒とのふれあい、教職員との研究協議の時間を設定いただけたことは大きな収穫であった。やはり、話して、

触れて、関わらなければ韓国という国が分からない。そういう意味で教育事情についての研修はもちろんのこと、人と人の触れ合いが、今回の訪問の大きな柱であったと思う。

【成果】

本プログラムに参加するに当たって、学校経営の視点から韓国の教育制度や教職員の勤務状況、そして、教育に関する評価とその教育効果などについて学ぶことを研修の中心に据えた。

韓国の教育制度については、日本国内での事前オリエンテーションで概要を把握することができた。この事前の知識が韓国でのオリエンテーションやフォーラムへの予備知識として生きた。また、韓国では韓国のユネスコ活動・ユネスコスクールの紹介をていねいに教授いただいたお陰で、各訪問地を訪問する際の研修の視点が明確になった。

一方、教職員の勤務状況については、平成23年1月に韓国教職員の招へいしたときの質問で、日本の教職員は勤務時間が過ぎて遅くまで勤務していることに驚かされていた経過もあり、逆に韓国の教職員の勤務状況についてその実態と課題を知りたかったが、細部にわたってタイミングよく質問することができず実現しなかった。しかし、海龍初等学校がスンチャン市の小学校評価の中で最優秀校として大きな評価を得ると同時に、教職員も意欲的に質の高い教育内容づくりに励んでいるとの回答を受けたとき、教職員の人材育成の背景には様々な教育施策が反映していることがうかがえた。特に、スンチャン市及びスンチャン市教育支援庁と連携をとりながら低所得層や遠距離通学児童の経済的な面にも配慮しながら明確な方針の下、衰退をたどる地域の復興を基盤とする実態にあった教育施策を推進されているところは、今後、日本の学校でも大いに参考にしなければならないと考えられる。

さらに、教育内容については、よりその効果を上げるための工夫がされており、韓国訪問団が日本訪問等で得られた教育に関する知識や情報等を韓国の教育事情に合わせてアレンジし、韓国風に早い段階で実践されていることには、韓国の校長の裁量権の大きさと教育改革への強い意気込みを感じた。

また、教育環境や教育内容の整備についても人的・物的にも多くの予算が費やされている。担任以外に、協力教員、補助教員、ボランティアなど110人程度の児童数に34人の教職員（常勤・非常勤）が配置されている。さらに、不登校児童や様々な理由で学校へ行けない児童、学習についていけない児童が家庭で再学習ができるように配慮した「サイバー家庭学習」や使える英語学習、討論に必要な基礎的な能力育成など、国際化をにらんだ教育の推進にも意識を高く持っている点は、大いに学ばな

ければならない。

【貢献・課題】

まずは、ESD教育の日本での推進状況を自分自身がしっかりと把握するために情報を入手したり、現在の教育活動の中で視点を变えて取り組んだりすることで、教育課程の中のESD教育に転化する教育活動を絞り込むなどしたい。その上で、教職員に今回の韓国訪問についての意義とESD教育について講義し、ESD教育の教育的効果を認識させていく。

教職員に一定理解が進んだ上で、教育委員会とも連携をとりながら本校の教育活動の中でESD教育推進上の課題を整理し、可能なところから取組を進めていきたい。与謝野町をはじめ近隣の市町は、天橋立及びその周辺に点在する豊かな自然・歴史を含めた地域一体の世界遺産登録を目指している。環境に優しいEM菌をプールで使用したり、天橋立の一斉清掃を地域住民総がかりで行ったりしている。すでに、ESD教育を実践しているところである。

今回のプログラムで得た成果を今後の教育活動に生かすために、友好国韓国との協力はもとより、世界の平和を目指したユネスコ憲章の実現のために地球市民として何ができるのか学校を挙げて考えていきたい。

【今後の日韓交流】

教育交流といっても訪問やテレビ会議など相手の肉声や顔の表情など人と人ができるだけ生の形で触れ合う場面を取り入れることが重要だと思う。今回の訪問で、言葉や文字だけでは感じ取ることのできないものを体感することができた。そういう意味でも、もし可能であれば、児童生徒同士の相互訪問交流が実現すればさらに効果が表れるものと思う。

また、参加した教職員の研修成果を例示したり、具体的な交流実践活動に結び付けた成功例を紹介したりするなど、日韓交流の成果が年度ごとに今後の参加者にも実感できることが必要ではないだろうか。

石原 伸浩

【最も有意義であった内容】

どの内容も大変有意義であったが、本プログラムを通して最も有意義であったことは、人との出会いである。

ホームビジット先での家族との出会いは言うまでもなく、訪問先での先生方やフォーラム、歓迎晩餐会等での先生方、通訳やガイドの方、ACCUの皆さん、そして各地から参加された日本の先生方、多くの出会いの中で、学び、自らを振り返ることができた。

李統幸ユネスコ韓国委員会協力事業本部長の挨拶の中にこんな話があった。

「昨年1月に日本を訪問したとき、気仙沼市を訪問した。漁村だったため、おいしい海産物も食べた。しかし、気仙沼市が私の中で今も忘れられず、思い出として残っている理由は、ホームビジットにある。訪問先には7人の子どもがいた。短い時間だったが、楽しい時間を過ごした。11月に仙台に行ったときも、気仙沼市まで足を延ばし、楽しい時間を過ごした。

そして、3月11日が来た。大震災だ。一番最初に浮かんだのは、あの家族と子どもたちだった。私たちが、何かについて“覚えている”ということは、平面的なことではなく、具体的な体験を通してだ。大地震のときに7人を思い出せたのは、彼らを身近に感じているということだ。

もし、ある国とある国との間に戦争が起きたとしても、相手の国に具体的な思い出を持っていれば、絶対その国の人に銃を向けることはできない。平和を作る方法として、いろいろな方法があるが、私は、“ある人”を心の奥に留めておくことだ、と考えている。」

社会が持続発展していくための根幹となるものを教えていただいたと同時に、韓国をはじめ日本各地に“ある人”ができたような気がする。

【課題に対する成果】

1.韓国の持続発展教育（ESD）の好事例から学ぶ

一番大きな違いは、政治的状況が日本と大きく違うことである。このことが、その取組にも表れていることが分かった。例えば、危険社会に対する教育については、韓国では“教える”“訓練する”という形を取る。日本でも同様な方法は行いが、総合的な学習の時間などを活用しながら、調べ学習等体験を通した学習も重要視している。このあたりについては、韓国では具体的にどのようなしているのかを知りたかったが、詳しく知ることができなかった。

韓国では、ユネスコクラブを作って活動しているユネスコ学校が多かった。このあたりの学校としての取組は参考になった。

2.韓国の教育制度全般から、初等中等教育の在り方を学ぶ

一番印象に残ったことは、韓国の教育システムの縦のラインがしっかりと確立しているということである。国の方針に基づき、道、市の教育施策が行われ、学校はそれをどう具現化するのかということに知恵を絞る。この行政と学校の関係が、PISA型学力であるOECD調査の成果につながっていると感じた。

トップダウン型の教育改革は、トップの方針が変わると教育現場も困惑するが（実際に韓国ではそんな場合もあると聞いた）、行政・学校が一体となって取り組むことで、より迅速に効果をあげることができると感じた。日本（奈良市）が同様な形で行うことは難しいが、行政と学校の

よき関係、目標達成のため連携等、学ぶことができた。

3.韓国とのネットワーク作りのきっかけとする

今回の研修では、ホームビジットや歓迎会、学校訪問等を通して、韓国の教員の誇りと自信、熱心さを感じ、教育に対する大きな使命感を持って取り組んでいることが伺えた。また、日本の教育についても、大いに興味を持っていることがうかがえた。

ネットワーク作りについては、今後双方向からの働きかけが必要であると感じている。

【全体を通しての成果】

日本と韓国では、教育システムや学校・教員の位置に大きな違いがあることが分かった。しかし、その一方で、教育のシステムや手法はいろいろあるが、その根本には、我々教員一人一人が高い志を持ち、常に自ら資質を高めようとし、教育に対して意欲的でなければならないということは、日本も韓国も共通しているということが確認できた。これは、参加された先生方との交流の中でも感じさせていただくことができた。

【貢献・課題】

教育委員会からの参加であり、その視点から大きく3点挙げられる。

- 1.本プログラムを中心とした韓国教職員、生徒との交流
- 2.行政と学校とのよき関係の構築
- 3.ESDをはじめとしたユネスコ活動の活性化

【具体的な取組として】

- 1.本プログラムを中心とした韓国教職員、生徒との交流について

奈良市は、以前より本プログラムを受け入れており、それ以外にも、韓国からの教職員や生徒との直接交流も行っている。今後も継続して受け入れていくとともに、

- ・概要説明や施設見学を短縮し、教職員交流、生徒との意見交流の時間を確保する。

- ・韓国の先生に授業をしてもらい、生徒との直接交流の時間を設定する。

等、その内容の充実が図れるようにしていきたい。

- 2.行政と学校とのよき関係の構築について

本市では、平成21年に奈良市教育ビジョンの策定をし、5つの基本目標を定めて教育改革を推進している。昨年度からは、各学校園で学校ビジョンの作成も行っている。市教育ビジョンとの関連性も含め、学校と市の方向性が一致するように努めるとともに、教員の資質向上や教員研修等、教育委員会としての教員の力量アップに向けた支援も充実していきたい。

- 3.ESDをはじめとしたユネスコ活動の活性化について

本市では、現在24校園がユネスコ学校に指定（4校園が申請中）されている。各校園の取組の充実を図るとともに、さらなる加盟校増加に向けて、積極的に各校園に呼びかけていきたい。

また、本市では、ESDにつながる学習として「世界遺産学習」を行っている。この学習は、世界遺産や地域遺産、伝統文化などの文化遺産の創造や継承、それを取り巻く自然環境の維持に取り組んできた先人の思いや努力を共感的に理解し、奈良に愛着を感じ、奈良を誇りに思う子どもを育てることを目的としている。この学習を、国際理解や環境、平和、人権等の現代的課題に結びつけることで、ESDへつなげていきたい。

今年度12月には本市で、第2回世界遺産学習全国サミットを開催するが、ESDの視点も含め、市内外の各学校園に啓発していくことができるように努めたい。

【今後の日韓交流】

既にいくつかの交流を行っている。ホームビジットについても、今回本市から参加した教員も含め、過去の受け入れ実績もある。ここ数年、受け入れ側の立場で関わってきたが、今回参加者側として感じた経験を生かし、例えば本プログラムの要請があった場合、より充実した交流ができるように働きかけていきたい。

具体的には、

- ・概要説明や施設見学を短縮し、教職員交流、生徒との意見交流の時間の確保
- ・韓国の先生に授業をしてもらい、生徒との直接交流の時間を設定
- ・ESDに関する授業、理解実験、体験学習、伝統芸能や武道など、特色ある授業の見学
- ・学校給食や休み時間の交流、掃除、部活動の見学など、日本ならではの学校生活体験
- ・小中一貫教育校での異学年合同授業の見学、体験
- ・初任者研修等、奈良市の教職員研修の見学、体験などが考えられる。

韓国教職員がより日本文化と日本の学校教育の特色に触れることができるように仕組んでいきたい。

石井 希和子

【最も有意義であった内容】

毎日がとても充実していて、どの時間も有意義であったと思いますが、その中でも海龍初等学校の同じ敷地に幼稚園があり、そこを見学させていただけたこと、そして幼稚園の先生が一人通訳の方を介して質問に答えていただけたことです。韓国の幼稚園の保育活動や幼小連携について知ることができ、また、自園のESDの取り組みの写真を持っていったことで、互いに栽培活動をしていることを理解し、玄関に掲示してあったいくつかの保育活動の写真もいただくことができました。短い時間ではありましたが、韓国の幼稚園のことを少しでも知ることができて、とても嬉しかったです。

また、ホームビジットや海龍初等学校での歌の授業は、直接韓国の方とかわりを持って触れ合うことができ、心を通い合わせられた瞬間でもあり、とても貴重な体験をさせていただきました。

【成果】

1.韓国のESDの具体的な取り組みについて

学校訪問やフォーラムの内容から、国際交流が盛んに行われていることがわかりました。また、順天市では、順天湾を生かした環境教育や栽培活動をされていて、海龍幼稚園でも“自然は私の友達”として、畑で栽培活動をされていることを知りました。

2.幼小連携について

訪問させていただいた海龍幼稚園では、初等学校の施設を使って造形遊びをしたり、保健の先生と性教育や薬物を使わない教育、教育課程に入っている病院遊びなどをされているとのことでした。海龍幼稚園は同じ敷地内にあったので施設面で交流されていることがわかりましたが、子どもについて教師同士の交流などがあるのかは知ることができなかったので、今後交流をもって知りたと思いました。

3.たくさんの人と交流をもつ

韓国の先生方やかわいい子どもたち、ホームビジット先のご家族、韓国ユネスコ国内委員会の方々とコミュニケーションをとり、韓国のことを知ることができました。また、日本の小・中・高・様々な校種の先生方ともたくさん話をし、いろいろな考えを聞くことができ、本当にたくさんの刺激を受けることができました。

【貢献・課題】

職員や子どもたちに写真や資料を見せて、学んだことを広めていきたいと思います。特に、子どもたちにはより身近な国と感じられるように指導していきたいです。

また、韓国のESDや、今回の訪問から体験した国際理解にも力を入れていきたいと思います。

たくさんの人とつながり、交流を持ち続けていきたいとも思います。

【今後の日韓交流】

急な質問に答えてくださった海龍幼稚園にはお礼の手紙を送りたいと思います。その中に自園の写真も添えて、ESDの取り組みを知らせていけたらと、考えています。

どちらの幼稚園にもインターネットは繋がっていないので、手紙や写真、絵などを使って、子どもたち同士が交流できたらと思います。

菊池 亨

【最も有意義であった内容】

ホームビジットおよび順天女子高等学校の訪問である。

ホームビジットであらかじめ生徒と人間関係を形成することができ、学校訪問のときは、互いにリラックスした雰囲気ですぐに交流することができた。また、高校生は生活年齢の接近や発達段階等を踏まえ、反応が全校種の中で最もよかった。

【成果】

- ・フォーラムや表敬訪問等を通じて、韓国の教育は日本と類似している点が多々あると認識した。そのため、良い点は多いに参考にして今後の指導に活かしたい。しかし、文化や人種が異なるため、全部を真似することは難しいため、取捨選択して取り入れたい。たとえば、「教科教室制度」は難しいが「キャンペーン運動」は取り入れることができるなどである。このプログラムに参加することができて感謝している。
- ・豊かな人間性を育むため児童生徒だけに「体験活動」を促すのではなく、大人も感性等を磨くために「体験活動」をする必要があると痛感した。

【貢献・課題】

児童生徒、学校、地域、家庭の実態等を考慮して、よい点を教育活動に反映させたい。教育内容に関しては上記を踏まえ、日本と韓国の教育制度や指導方法の良い部分の融合を図り、それを基に児童生徒へ教育を施したい。

【今後の日韓交流】

e メールや手紙を通じて学校の情報交換を行う間接交流もしくは児童生徒や教職員は学校を相互に訪問を行う直接交流が考えられる。

姉妹校の提携を結ぶことや今回のプログラムに参加する等も交流で有効な手段であると考ええる。

木村 正太

【最も有意義であった内容】

本プログラムを通じて知り合えた人との出会い。

韓国ユネスコを中心としたスタッフの方々には、準備や計画など、多くのことに気を使って頂いただけではなく、活動後も韓国のおいしい店を紹介して頂いたり、一緒に会話を交わしたりと、本当に楽しく充実した時間を過ごすことができました。

また、日本から参加された方々とも大変充実した時間を過ごすことが出来ました。

また、人とのかわりとして大変有意義だったことは、ホームビジット先の生徒との再会です。ホームビジット時には思うようにコミュニケーションが取れませんでした。もう一度会ってもっと話がしたいと思っていたところでの再会は、お互いのかわりをもっと積極的にさせてくれました。前日のことが嘘のように、お互いの気持ちを伝え合いました。

これらの経験から、人の温かさや強さ、優しさをたくさん感じることができました。本プログラムで最も有意義だった活動は、すべての活動を通して、これら人間の素晴らしさを感じることができたことにあると思います。

【成果】

本プログラムを通して、たくさんの人の温かさを感じることができました。日韓の教育がともに目指す「人間性」。その人間性の素晴らしい方にたくさん出会えました。この輪がどんどん広まれば、もっと、もっと私たち一人ひとりの人間性が育てられるのではないかと思います。そして、私たちの人間性が育つということは、私たちがかわっている子どもたちに一番の良い影響を与えることができると思います。

そのような方々に出会えたことが本プログラムに参加しての一番の成果です。せっかくこのような素敵な場での出会いですから、何らかの形で今後もお付き合いし続けることがとても大切なのではないかと思います。

【貢献・課題】

成果を生かすためには、本プログラムで知り合えた方々と何らかの形で連絡を取り合い、必ず再会することにあると思います。このことは次の一年に限らず、時間をかけてでも達成したいと思う。

また、本プログラムで学んだことを次の1年間で生かす具体的な活動は、すべての教育活動において、子どもたち、また同僚などに対して効果的に韓国の文化や人などの良さを伝えることにあると思います。子どもたちに対しては、学級活動を中心に、同僚に対しては、帰島後の報告会などを通じて行っていく予定です。

近藤 麻里

【最も有意義であった内容】

「日韓国際フォーラム」が一番有意義だった。ユネスコの理念のプレゼンは大変すばらしく、改めてその良さを実感した時間だった。

「私の変化が世界の変化をつくる」、「戦争は心の中で起きるものであるから、心に平和の砦を築かなければならない」の2つの言葉。後者の言葉は子どもたちに話してきている言葉だが、前者の言葉については、初めて耳にし、感動した言葉だった。子どもたちに話し、一緒に考えていきたいことだと強く思った。

【成果】

- ・韓国の文化理解について

→文化をじっくり理解するには、時間が少ないように感じたが、初めて見聞きしたことが多く、たくさんの文化や考えに触れることができたと感じている。韓国は日本と似ているところが多いと感じた。

・韓国教育について

→韓国の教育現場の情熱を肌で感じる機会となった。日本と韓国が抱える問題は、特別支援教育の現場で抱えていること等、似ているところが多いが、家庭事情等、違うところもあると感じた。

・韓国の図工・美術教育について

→直接的にお話を伺える機会は少なかったが、作品展示の様子から少し質問をすることができた。目指すところがかかなり大きくちがうように感じた。具体的には、韓国は技能重視、日本は発想と工夫、技能のバランス。しかし、子どもたちの伸びやかな成長を目指すところは同じである。韓国は、行政や学外からのサポートも強いように感じた。

【貢献・課題】

- ・子どもたちに韓国についての話をし、文化に触れる機会をつくる。(全校朝会等)
- ・教員にプログラムで得た学びを共有できる機会をつくり、ESD の指導に生かす。(総合的な学習の時間、東雲フェスティバル)
- ・プログラムで得た内容を、今後の教育計画に生かし、次年度からの計画につなげる。(総合的な学習の時間)

【今後の日韓交流】

- ・全校集会の時間等に、日本の唱歌等の紹介をしたり、授業の中では ESD の取り組みの発表をしたり等。(発表については年間計画で決まった内容なので、時期の変動は困難)
- ・韓国の先生に韓国文化の紹介をして頂く等。

黒飛 雅樹

【最も有意義であった内容】

どれも有意義で、甲乙つけがたいです。あえて言えば、「学校訪問」での韓国の方とのふれあいと「プログラム外」での韓国の方とのふれあいでしょうか。

教育関係者や子どもたちと交流するのに、現場でふれあえるのはとてもありがたいことです。同じ空間にいただけで、感じる場合があります。韓国の学校は、地方機関や学校現場の裁量権が非常にあることに驚きました。その分評価も厳しいようで大変そうでしたが、一人の児童生徒に関わる職員数や施設設備の充実度が相当違いました。

また大統領の意向が教育現場に相当反映するようで、国が指針を出し、国民がそれに従っていくような姿は、羨ましさを感じました。一方で教育現場が抱えている問題は日本と変わらなかったり、十数年前に起こったような問題と重なっていたりしていました。大学入試の問題もあります。ある学校で生徒が「ユネスコクラブで活動

することで、勉強する意味が変わりました」と答えていたことが印象的でした。韓国の先生方は日本でいう中学高校の受験を出口に抱える先生方と同じプレッシャーを小学校以前から感じながら指導されているのだと思うと、切ない気持ちにもなりました。

20年後の韓国は今の日本のような問題をもっと根強い形で持つことにはならないかと危惧もしました。そういう点でも今の韓国に日本は学ぶべき点が多いと思うし、韓国も日本から将来像の調整ができると思います。今後も交流が続いてほしいです。また学校外で学校関係者や一般の方（自由に歩いて店に入るなどできる）とお会いできることがとても有意義でした。ON と OFF、両方で交流できること。これはこのプログラムの強みでもあると思います。

【成果】

＜ICT 教育の現状について＞

韓国では、ICT 教育は一部中学校以上でカリキュラムに取り入れられてはいますが、選択した生徒が行う程度の印象でした。行なっている内容は、見た限りでは日本でも行なっているかと思いました。初等学校レベルでは児童が ICT を学んでいる印象はありませんでした。教職員が使うインフラとしての情報機器の充実を感じました。特にどの教室にも天吊り式のプロジェクターがあることはとても必要は事だと思いました。イギリスのようにスイッチ一つから専門家が操作する必要はないと思いますが、すぐに使える状態にしていくことは、ICT を進めるために必要でしょう。また教育支援庁にサーバーを持ったインターネット学習が成立するという時点で体系的な学習指導のカリキュラムがあることはとてもよいと思います。但し、順天市のように低所得層への配慮が問題ともなっているようなので、子どもに ICT スキルを教えるというより、教師が児童生徒のよりよい理解のために情報機器を積極的に活用し、公的機関も環境を整えているという点がとてもよかったです。情報モラルへの指導はほとんど見られませんでした。おそらく国・社会・家庭・学校の目指すものが同じ方向にあることがその原因と考えます。しかし標準化・共学化等が進んでくると必要性が出てくると思います。体罰が禁止になった今、生徒指導にも困っている先生が多いと聞きます。きっと韓国なりに必要になる時期がくるのではないかと思います。

＜外国語活動について＞

チャンツを行うにしても、音声だけでなくデジタル教材を用いて、やりやすいように感じました。持論も入ってしまっていますが、赤ちゃんに読み聞かせる絵本にも文字は入っています。日本では「コミュニケーション能力の素地を養う」ために「聞く」「話す」を重点化するべ

く文字を排除して聞くことに専念しています。その結果、今回見たような「リズムを目でも感じる」ような柔軟さを失っているような気がしました。今後の参考になると思います。小学校3年生から海龍初等学校では外国語活動を取り入れていました。英語に長けている方を学校独自で採用していると聞きました。情意的な面（まねをする、聞き取ろうとする、音声になれる）から見ても、3年生から行うのは理にかなっているかもしれません。英語を使って遊んだりコミュニケーションを取ろうとしたりすることを行い、5年生から日本式のように行うのもよいのではないかと感じました。また評価はない場合が多いとのこと。これは日本も学ぶべきです。なぜなら「コミュニケーション能力の素地を養う」のに評価をどうすればよいのか、ましてや3観点など記録する必要性が見いだせないからです。評価のための評価にならないよう、活動をもっと柔軟に行なったり、海龍初等学校でみた英語スペースのように、学習環境を整えるべきと思いました。一方で受験のための英語になりがちな部分もあり、子どもにとっての必要性を受験に合わせることで学ばせるのか、将来生かすための英語を学ばせるのかは、日韓双方の課題なのかもしれません。

<理科教育について>

1校のみ理科室を見学させていただきました。日本と印象が違いました。実験を行なうと聞きましたが、機器も見えず、流し台も見えませんでした。どのようにどんな実験を行なうのか知りたかったです。

<生徒指導について>

WeeCenter に大変興味を持ちました。私は教育相談員を2年間していました。その際、教育センターに所属していましたが、家庭訪問をして、本人の話を聞いたり、ニーズに応えながら、学校や機関とつながることが仕事でした。心理士のような社会福祉士のような。個人的なつながりもない点が大変だった記憶があります。韓国の全体的な印象にもつながるのですが、子どもを取り巻く環境で必要なことが社会全体で分担されている気がします。WeeCenter では、臨床心理士と社会福祉士がおり、教育支援庁の下にあることで教員や学校ともつながれる。非常にいい仕組みと感じました。ただ、現場の生徒指導については、最近体罰がなくなったと聞いていました。高い学習への意識の裏側に様々な苦労があると聞きました。もう少し実態を聞いた上でどうしたらよいかを交流できたらなと感じました。また今は国・社会・学校・家庭が大学受験という一つの柱でつながり、子どもを迷わせないようにしていることを感じたので、生徒指導の必要性は一部の要因に偏っているように感じました。しかし韓国の先生方の訪問時に

もよく聞かれましたし、今回も聞かれたことがあります。それは、体罰無しに子どもを指導するのはどうしたらよいのかという韓国の先生方の悩みです。日本では高い道徳心もあり、子どもの人権を尊重するという意味合いもあり、一人の人として接するときに話し合い寄り添い合いを基本とすると答えます。韓国でも暴力等は問題のようです。基本のルールがあると、ユネスコ活動に参加することにより見える広がった世界が見えなかったり、脱落したときの葛藤があったりするでしょう。ニューヨークでは小学校から警察が学校に常駐し、人としておかしいことを指導するそうです。日本のようなシステムで行きたいと願う反面、日本や韓国ではもう少し外部の力を無理なく借りる（分業する）必要性もある時期に来たのかな、と思いました。

<その他>

上記に各観点で成果を書き出しましたが、結局韓国でも日本でも民間レベルでは交流を求めている、人としてどう子どもの可能性を伸ばすかを教員たちは考えていることは同じだと、頭だけでなく体で感じたことが収穫でした。ただそこへのアプローチが反対とっていいくらいでした。子どもを迷わせない、教員も自信をもって指導するという意味では韓国のような形がいいでしょうし、必要性を感じさせたり子どもたちから学びの意欲を引きだそうとし、生きる力（個人的には情報の取捨選択能力だと思っています）を身につけて生涯教育の観点で学びを作ることは日本のような形がよいと思います。ただインフラの整備と国や地方公共団体、及び企業等における教育への投資の優先順位に関しては、韓国のほうがよいと思いました。国から必要とされていることが明らかにわかることがよいと思いました。日本も取り入れてほしい点がたくさんありました。ただ、放課後学校や生活リズムの無理さ（2食を学校で食べる）ことは善し悪しでしょう。体の成長に対して逆らってまで知識を入れる必要性があるのか、その辺りは効率性や余裕を求め、カリキュラムや目標を見直したり、フランスの企業のように、体のリズムに沿った休憩等があるといいと思いました。

【貢献・課題】

<ICT教育について>

1. ひとすらいンフラ整備を訴えていくこと。

市で話す機会もあるので、今まで以上に訴える材料ができました。一方で分かっほしい対象は教員ではないのが難しいです。

2. 子どもの必要性に合った ICT 機器を用いて授業を行なうこと。

帰国後早速設置の面倒さから印刷した紙に頼っていた教材提示を、教材提示装置を使って授業をするようにしました。電子黒板は個人的にまだ必要ではないと感じて

いますが、子どもの目線に寄り添える機器の活用はしていこうと思います。

<外国語活動について>

1.現状ではいかせるチャンスがない

正直なことを書くと、本市では特区以外は契約の関係であり担任裁量の外国語活動の授業ができません。総合的な学習の時間で外国語に関する学習を取り入れるのも難しい現状です。ですから国内での事例を集めたり韓国で見たような学習環境を作ったりすることで、来るべき時に備えたいと思います。

<生徒指導について>

1.一つ一つの事例に当たるために、担任が抱えず、分業で行なう。

すでに日本でも言われていることですが、改めて必要性を感じました。ただ、日本では学校で分担するには限界があります。校長・教頭に積極的に相談することでしかるべき外部機関や校内担当に関わってもらいたいのです。

2.生徒指導のあり方や教育相談の方法・効果を考える。

これもすでに言われていることですが、韓国の事例をもとに、日本でも頼ることができる機関を知り、つながりを持ったり、各種研修会等で自分のスキルを高めることができると思います。

<ESD 教育>

早速国語の単元で取り入れることができそうだったので、取りかかりとして行ない始めています。

【今後の日韓交流】

1.メールによる交流

正直今回は帰国後翌日から出勤・授業だったので、すぐにメールを送るチャンスはありませんでした。メールでやりとりすることが企業等でも当たり前になった今、メールや手紙などでやりとりすることはとてもよいと思いました。

2.アンケート等への参加

今回のイ・ジェヨン教授の講義の資料のように、私たちが関われるアンケートにはどんどん参加することはどうでしょうか。このプログラムがある限り、アンケートの母数は増えますし、フィードバックをしてもらったり、Facebook や会員制コミュニティの中で簡単なコメントでやりとりすれば（翻訳の問題はありますが）、教育やESDを通したやりとりが継続できると考えます。

3.今回のような、参加経験者の集まりを、集まれる人だけでも継続していく

過去全ての年度の参加経験者が一同に集まれる機会を

作るのは困難でしょうが、フォーラムや受け入れ側としての参加の場面を設定していただき、つながりが続くようにサポートしていただけると嬉しいです。

4.プログラムへの参加

ユネスコスクールに登録していなくても参加できるプログラムを情報提供していただき、各学校からできる範囲で参加することは可能だと思います。

松本 和子

【最も有意義であった内容】

今回のプログラム内容は、どれも有意義でしたが、強いてあげれば学校訪問とホームビジットだと思います。

学校訪問では、一緒に授業を受けたり、最新の施設・設備を見学したり、また児童・生徒との対話や教師との対話をするなどとても有意義でした。日本も韓国も素直な子どもたちの笑顔が続くように、教師はがんばっていくのだと思います。そして、「百聞は一見にしかず」のことわざにもあるように、韓国の最先端の教育現場を見ることで、日本の教育をふり返ることができました。

ホームビジットでは、高さん一家にお世話になりました。手料理のビビンバやいろいろなキムチをいただきながら、話が進みました。キムチ冷蔵庫も見せてもらい、韓国の人にとってはキムチがいかに大切であり、伝えていく味なのかということも実感できました。学校訪問では、韓国の進学校やエリート校の実情を知ることができましたが、ホームビジットでは、本音の韓国に触れたような気がしました。給料の話や勤務体制、さらにはいじめについてなど、幅広い話題について話し合うことができ、私にとって、本当に貴重な時間を過ごすことができました。

【成果】

1.韓国の食文化に触れることができた

韓国と言えば「キムチ」を連想することが多いと思いますが、今回のプログラムでもいろいろなキムチを食べることができました。白菜や大根・胡瓜といったものがありますが、梅干しやきのこのキムチは初めてでした。自分たちの身近な食材を何でもキムチにさせていただく韓国の人たちの考えがうかがえました。

また、日本で「おふくろの味」という言葉がありますが、韓国では「お母さんの手の味」と言うそうです。

キムチを漬ける過程にはたくさんの手間がかかり、手でしっかり混ぜるのがおいしくなるコツからこの言葉が生まれたのかなと思います。そして、伝統の味であるキムチを子どもたちに伝えていく取り組みについても学ぶ事ができました。

さらに、儒教に国ならではの食事マナー（年上の方か

ら箸をつける、年上の方と飲む時のルールなど）についても知ることができ、お隣の国である韓国をより身近に感じることができました。

2. 世界を意識した ESD の視点の必要性

日本の ESD は、環境教育を中心に身近な地域を再発見し、地域に愛着を持ち、日本のよさを再確認させる形で行われることが多く、本校でも、地域に愛着を持ち、考え、活動する子どもの育成を目指しています。しかし、韓国 ESD の実践を視察する中で、もっと大きな視点での ESD の取り組みが必要であると感じました。それは、将来、国際社会で活躍することを意識した教育の推進が必要だということです。

韓国の ESD の長所は、ユネスコ組のように子ども主体のボランティア活動や地域・世界に向けての発信をする点だと思います。本校での ESD についても、地域のことを調べて愛着を持つだけでなく、さらに地域のためにできることを考え、行動するまでいかないと行けないと思いました。

3. 英語教育の必要性

今回の韓国訪問で、レベルの高い英語教育や情報教育を見ることができました。子どもたちの英語力もそうですが、教師や出会った人々の英語力にも驚きがありました。また、自分自身が英語や韓国語がもっと話せたら、さらに交流を深めることができたと思いました。これから活躍する子どもたちのことを考えれば、英語によるコミュニケーション力をつけて行くことは必要不可欠です。しかし、日本の現状は英語の時間数を比べてもかなりの差があります。だからこそ、教育効果のある、より実践的な英語教育を推進していく必要があると思います。そして、アジアの国々と共存しながら国際社会を活躍の場にしていくって欲しいと思います。

【貢献・課題】

- ・韓国で訪問した学校の子どもの様子や学校施設・設備について、まず校内の子どもたちや先生方に伝達する。
- ・本校の ESD の取り組みについて、大きな視点に立って考え直し、地域に返したり、ボランティア活動と結びつけたりすることはできないか計画を立てる。
- ・英語教育推進の一端として、校内環境について考え直し、英語をより身近に感じられるように掲示物等の工夫をする。
- ・今回知り合いとなった研修団の先生方の学校と連絡を取り、ESD 実践についての交流を図る。

【今後の日韓交流】

本校は今年度から中学校区で（一中学校、三小学校）でユネスコスクールに申請しています。来年1月には中学校区で韓国の先生方をお迎えする予定です。そこでどのような交流ができるか次のように考えてみました。

1. 体験活動を通しての交流

本校の ESD は食育とつなげて、自分たちで大豆を育てて豆腐を作るという体験活動をしている。そこで韓国の先生方と一緒に豆腐づくりの体験をする。（本校ではないが、餅つき大会などイベントに参加して一緒にお餅をつくるなども考えられる。）

また、参観ばかりでなく、体験してこそ分かり合えると思うので、子どもたちと一緒に正月遊びのいくつか（風揚げ、こま回し、福笑いなど）を体験し、日本文化に触れる。そして、韓国の伝統文化（例えば民謡、踊りなど）も教えていただき、文化交流を図る。

2. 共通のテーマを決めて意見交流

今回プログラムに参加して、韓国では食器を持って食べるのは失礼にあたり、置いたまま食べることや、部屋に入る時には靴の向きを変えずにそのままにして上がるなど、習慣の違いや文化の違いなどを肌で感じる事ができた。そこで、韓国の先生方と共通のテーマ、例えば食習慣や伝統文化についての考えなど意見交換をし、お互いの文化についての理解を深める。勿論このためには通訳のスタッフが必ず必要となります。

韓国訪問では、自分自身もっと児童・生徒や先生方と触れ合う時間が欲しかったので、来年1月に藤田においていただく際には、その点を考慮していきたいと思う。教員との交流は以上の2点を考えましたが、児童同士の交流では、作品交流や自分たちが行っている ESD 活動の情報交換などができると思います。

松岡 清貴

【最も有意義であった内容】

冒頭にも述べましたが、韓国の教育の現状を学ぶために、ホームビジットをしたり、学校訪問をして韓国の先生方や学生と直に話をしたりしたことが最も有意義な内容であったと思います。特に、ホームビジットに関しては、多くの場合「大人対大人」というスタイルだと思いますが、今回の韓国訪問スタイルのように「子ども対大人」のようなスタイルにすることで、学生の姿を通してその国や地域の教育がより明確になると感じました（ただ、日本の学生が外国の方とコミュニケーションを積極的に取れるかという点は疑問ですが…）。

また、日本にお招きするのではなく、韓国で先生方の授業やお話を直接拝見・拝聴できたことで、より日常の様子を見ることができたことも、有意義であったと思います。まさに「現場」にいたからこそ理解できたことが多々あったと思います。

【成果】

まず、韓国の教育について課題をもったことに対する成果については先に述べたとおりです。次に、儒教がどの程度、生活に根付いているのかという課題に対しては、必ずしもガイドブックや資料、イメージの通りではなく、当たり前前の礼節を大事にする点は日本と似ているということを感じました。

また、韓国の ESD の好事例を探るという課題に対しては、各学校のユネスコ組の活動や、順天湾を町全体の宝として地域住民の誇りとする点、東日本大震災に対しての支援活動を見学する中で、国際社会とのつながりを意識した活動が、児童・生徒の総合的な力の育成につながるのだということを感じました。

最後に、韓国の人々や、国内の先生方との結びつきをもつという課題に対しては、国内の先生方との結びつきはもとより、ホームビジットで訪れた学生とのメール交換や、明洞で道に迷った際に道案内をしながら仲良くなった地元の方とのメール交換を続けながら、国際的な感覚を磨いていきたいと思っています。

そういった意味では、私が韓国を好きになり、韓国に対して一層関心をもてたことが一番の成果だったと思います。

【貢献・課題】

まず、私が学んだことや資料については、学校の教職員や児童に展示をして、韓国という国に対するイメージをもち、身近に感じてもらうと共に、教育の素晴らしい点について学校として取り入れていけるよう、はたらきかけをしていきたいと思っています。

また、このプログラムで知り合った方々と連絡を取り続けながら、ESD として授業に取り入れられることを模索していきたいと思っています。

最後に、次に私が家族と韓国を訪れる日のために、この1年間を通して語学や文化を学び続けていこうと思います。

【今後の日韓交流】

まず、実現の可能性として高いものは以下の2点だと思います。

1点目は、今回のプログラムの中でもありましたが、私が住む気仙沼市は韓国の方々から、被災したことに対して様々な面で支援をいただきました。ビデオメッセージや ACCU に寄せられた手紙を記録として残してきたので、私の思いを交えながら児童に伝えることと、それらを見て感じたことを何らかの形で表現させる中で、学校や児童同士の交流を図るきっかけをつくっていければと思います。勿論、私の学校以外にも日本全体として応援してもらっていましたので、プログラムに参加された先生方の学校の実態に合わせて、同じような活動ができるのではと思います。

2点目は、もし韓国の教職員団の方が気仙沼市にいら

したときには、私の自宅にお招きする中で、先生方と交流できればと思います。これも、気仙沼以外に訪問された場合でも、同じようなことができると思います。

次に実現の可能性としては高くはありませんが、先生方同士の交流として考えられることが1つあります。

それは、気仙沼市はこれまでも韓国からの訪問団をお招きしているので、学校単位だけではなく市として、これまで学校訪問やホームビジットで交流のあった先生方を一カ所の会場に集めて交流するということです。交流を持続発展させていくという点で良いのではないかと思います。

ただ、上記にあげたことはその年だけ盛り上がり、次の年からは新しく来た教員の負担になることが多く、それこそ持続的にも発展的にもならないことが予想されます。それらを防ぐためには、これまでプログラムに参加された先生が、韓国で仲良くなった方に対して、何かあったときに連絡するなど、細く長い形で絆を保ち続けることが大事だと思います。また、気仙沼市のように各校が ESD の連携を深め、「どの学校に行っても韓国とつながっている」ということを実感できる雰囲気づくりを行ってはどうかと思います。いずれにしても、1人で関係を保ち続けることは不可能だと思うので、集団として関係を保ち続けていくことが大事だと思います。

森内 直子

【最も有意義であった内容】

今回が初めての韓国での訪問だったので、すべての活動が有意義でした。また、このプログラムに招待されてはじめてユネスコの存在や内容をさらに意識し、ユネスコ憲章の素晴らしさ、その実現のために世界的レベルで充実した実践が行われているかを知ることができ、豊かに学ばせて頂きました。

実際に本プログラムに参加して、多くのことを学びました。本プログラムに参加するまで、ESD についての意識が低かったのですが、韓日教師フォーラムでは、事前にとったアンケートに基づいて危険社会についての講話を伺うことができました。私はこれまで危険社会についての知識もなかったし、意識もしていませんでした。このフォーラムの中で、21 世紀における危険は何かを再認識させていただき、どう教育することが、発展を持続させていけるかということを改めて考え直すことができました。危険性は時代と共に変化していきます。今までは、科学や武器、貨幣が危険を乗り越えられる手段とされていましたが、現代は不確実性の拡大によって、それらは無力になり、「思考の枠」を見直して、持続発展の手段を新たに考え直さなければならなくなりました。アンケートの

結果わかったように、国によって危険性は違いますが、どんな危険に際しても解決する力として共通することを掴むことができました。

危険社会の中で生きていくために、

- 1.危険を危険と感じさせる教育
- 2.危険を想定した地道な訓練
- 3.想定したことだけが起きるわけではないので、日ごろから問題解決していく自己解決教育
- 4.どんな時にも人とのつながりが持てる心豊かなコミュニケーション能力の育成

以上のような力をつけていけば、いざという時も発展を可能にしていけるという確信をもつことができました。

【成果】

- 1.韓国の教育について知ることができた。

今、韓国は5年あるいは10年後の未来社会で有すべき教育力に注目し、中長期的な教育プランを構想しながら、現在は全人教育と人性教育の2本柱にバランスのとれた育成を目指している。具体的には教科教室制（大学形態の方法）、創意経営学校支援事業、学力重点学校、科学重点学校、マイスター学校、寄宿型学校、STEAM校、教育福祉政策を行い、この特色に秀でている学校を表彰し、競争させながら、どの学校も成果を出すように方向づけられていた。これを教育庁が受け、各地域に徹底させていることに韓国の教育の徹底性を垣間見ることができた。

<教育現場の具体的状況>

今回、Bグループは順天教育支援庁及び特別支援学校と小学校1校ずつと大学進学を目指した公立高校とキリスト教系の私学の女子高校の4校を見学することができた。

精進特別支援学校は、百年以上の歴史をもち、全面的に国からの莫大な援助を受け、広大な敷地に至れり尽くせりの最新の設備が完備されており、地域社会教育、外国文化の教育、職業体験等を実現するために豊かなプログラムを行っていた。国が「正しい人性を育てながらも他人と差別されない新しい福祉政策」を推進し、どんなハンディを持っていても自分なりに自律できるように職業教育や大学の支援センターまで完備している。障害を持つ方や外国籍の人を大切に韓国には明るい明日があるように思えた。

海龍初等学校は育庁と緊密に連携して都市近隣小規模学校の強みを最大化して競争力を育て、健康・人格・学力及び特技伸張等が皆が希望に溢れる教育活動を展開しておられた。農業中心で低所得者層が42%という現状を踏まえて、家庭が出来ない分を学校が多様な放課後プログラムを用いて行っている。基礎学習補充指導・感性や体力を培う部署・健康な生活のための隙間教室があった。すべての児童が自分の潜在能力を最大限に発揮できるように教員が一致団結して熱心に教育しておられた。大変

参考になった。

高校では、大学受験でたくさんの優秀な生徒を合格させるために、放課後学習や私教育が充実・拡大している。学校では先生方が遅くまで残って補充授業を行い、自習室を設置して配慮し、帰宅するのは11時であるというのを聞いた。そのため保護者の全面的協力が必要だが、各家庭で塾に行かなくていいように国が教育システムを作り、家庭の出費の軽減対策を実現している。

一方、このような学習スタイルについていけなくなった生徒や学習不適應の生徒のためにWeeセンターの充実が図られている。

韓国の教育現場を見て、日頃からESDに取り組むことで、多くの人や環境をつなぎ、生きていくための学びになることがわかった。また、ユネスコスクールの活動の実態、国際理解教育体制、授業の見学や児童・生徒の様子を通して、主体的に学習に取り組み、理想を求め心豊かに育っていると感じた。

2.韓国の英語教育について

学校種によって異なっていたが、英語の授業数を増やしたり、英語の教材教具や環境を工夫したりするなど、使う場をより現実味を帯びさせながら実際に使う場をより多く設定していることが共通しているように思った。小学校も英語の授業を5・6年生は週に4時間にし、さらに強化していくようである。海龍初等学校では、特色教育である児童中心の「海龍5品題挑戦活動」教育の中に国際品があり、英語及び必須漢字レベル制があり、制度の中に位置づけている。この環境を整えるために内装し、アメリカの街並みや家の様子をモデルルームのように改装していた。中学年の授業も見学したが、電子黒板やCDなど先端の危機を活用して児童が楽しく学べる工夫がしあった。

高校では、オールイングリッシュの授業強化も図られ、ネイティブや優秀な教員を採用して、よい発音や実力が付く英語教育が行われていた。これからの時代を見越しての教育であり、感心なのは決めたことが徹底して行われることである。

【貢献・課題】

- ・ユネスコ憲章やユネスコの内容を本校に伝えていく。
- ・本校の総合的な学習（国際理解教育・福祉教育・環境教育・情報教育・体験合宿）とESDがどのようにリンクするかを調べ、国際的レベルで教育活動をさせているACCUに倣っていく。特に国際理解について、4年生は異文化交流なので、ACCUのご協力のもと、韓国との交流を進めていきたい。
- ・将来を見越した英語が行われるようにカリキュラムを見直していきたい。

【今後の日韓交流】

- ・今回の韓国での研修によって、何と言っても顔を合わせた交流が一番の交流だと実感しました。ですから、学校を訪問した時、訪問者は必ず授業をする方向で計画を立てると迎えた方もお客様としてではなく、友達という感覚が生まれ、さらに交友関係が高まると思います。
- ・すぐには実現できないので、まずは教員同士の交流や児童の作品や音楽の交流、英語を使つての手紙の交換など、現地に赴くことはできなくても具体的に気持ちを伝える取り組みができていいのではないかと思います。
- ・異文化交流の学習の時、ACCU のご協力のもと、韓国との交流を進めていき、いちばん近い国として好感を抱き、交流したいと意欲を育むこともできると思います。

長山 誠也

【最も有意義であった内容】

どれも有意義だったが特に、学校訪問が印象に残る。どの学校でも、私たちを日本の教員を温かく迎えてくれたことがとてもうれしかった。

宝城女子中学校では、日本の文化の授業で、女子生徒に浴衣を着せたりして、直接、生徒とコミュニケーションをとりながら授業に参加できたことや、課題図書を読み、それをみんなで読み、討論し相手の考えを理解する授業を展開していた。これは基礎学力を向上させる上で大きな効果をもたらしていた。

順天女子高等学校では、ボランティア活動に積極的な参加を進めていた。それは「自分たちの小さな活動が、身近な地域をさらには世界を動かすことにつながる」という意識を育てることに大きく役立っていると感じた。

海龍初等学校では学校施設設備の充実ぶりに目を見張った。そしてなによりも校長先生の言葉で「活動結果を認め、ほめて伸ばす」という校長先生の言葉を聞いて「なるほど」とうなずけた。

【成果】

今回のプログラムを振り返ってみると、韓国の文化や国民性を深く知ることができた。いろいろな話を聞き、見て、肌で感じ、あらためて日本の教育の良さを知った。韓国の教育事情を知ると言うことに関しては、学校訪問を通してすばらしい経験をさせていただいた。韓国政府の考え方、これからの社会を支える子どもたちに対する期待から、今の教育があり、それぞれ熱い思いと、勢いを感じた。特に、家庭環境と生徒の学習意欲については日本とおおきくかけはなれていた。実際に韓国の生徒た

ちの様子を見聞きし、またホームビジット先で子どもたちに話を聞くと、その努力と頑張りには敬服させられた。最後に、一緒に韓国に行った仲間やKNCUの関係者、通訳の皆さん、ガイドさんたちと出会えたことが私の一番の宝となった。このプログラムで得たことを日々の教育活動に、目の前の子どもたちにかえしていきたい。

【貢献・課題】

次の3つのことについて意識を高め、改善策を考えながら教員研修を行いたいと考える。また生徒に伝え積極的に異文化交流・ESDを推進していく。

- 1.電子機器の活用である。韓国ではほとんどの教室でコンピュータと電子黒板や大型ディスプレイを活用して学習効果を高めていた。同じように現任校でも、新しい機材の活用を積極的に取り入れよう研修計画を立て学習効果を高めていきたい。
- 2.言語活動とコミュニケーション能力の育成である。現任校では、総合学習において、郷土「なら」科・英会話科あり、奈良のことをいかに外国の方に伝えるかなどを検討し、情報を整理し、それを発信する準備をしているので、世界に発信できるよう取り組みたいと考えている。
- 3.まず国内での活動を通して、生徒間交流を活発にし、和を広げ世界に発信していきたいと考える。また機会があれば子どもたちに、同年代の外国の方々との交流ができるよう考えたい。

【今後の日韓交流】

姉妹校の提携により、教師の派遣・児童生徒の交流が望ましい。現段階でいくつか考えられる方法をあげると、テレビ電話・e-mail等での情報交換が思い浮かぶが、なんとんでも顔を合わせた交流が一番だと考える。教師交流もいいが、生徒間交流もできるように考えていただきたい。できれば、相手の姿が見える交流、現地に赴くのが一番だと思います。子どもたちの考え、これからの社会に対する願いなど、いろいろな話し合いの中で大人には考えつかないすばらしい発想が飛び交うのではないかと期待する。

小原 愛子

【最も有意義であった内容】

私が最も有意義であったと感じたのは、やはり韓国の教育現場を実際に見ることができた学校訪問であった。私的な訪韓であれば、まず学校という場所に入ることにはかなわなかったと思うが、今回は大変な歓迎を受けたうえ、施設見学・授業見学・意見交換など、様々な体験をすることができた。

自分の勤務校は高等学校であるため、やはり同じ高等学校の見学が一番印象的で、普段見慣れた自分の生徒の

姿を思い浮かべながら、授業見学することができた。今回訪問させていただいた順天女子高等学校は教科教室制を導入しており、本校とはかなり違う雰囲気であったが、そこには見習うべきものがあった。全教科を教科教室制にするにはかなりの準備等が必要だと思うが、自分の教科である英語に限定すれば勤務校でも取り入れられるのではないかと、そしてそれによる様々な困難よりもメリットのほうが大きいのではないかと考えさせられた。実現の可能性はさておき、そのような視点を持たせていただけたことは、自分にとって大変大きなことだと感じている。

【成果】

訪韓前に経験できるだろうと期待して設定した課題の大部分を今回のプログラムの中で見て、感じることができたと思う。特に小学校・中学校・高等学校・特別支援学校を実際に訪問して直接見れたこと、また何よりその学校で実際に働く教員の方々と接する機会が持てたことで、今回設定したどの課題に対しても多くの答えを得ることができた。ESD に関してかなり頼りない知識のまま参加した今回のプログラムであったが、ユネスコスクールの活動事例などを通して、いろいろな形があり得るのだということを見ることができ、ESD を基本とした活動を教科の中にも取り入れられるのではないかと考えるのを初めて持つことができた。このことが自分にとっては一番の成果だった。

【貢献・課題】

上記で述べた成果を生かすためには、やはり自分の指導教科である英語の授業を通して生徒たちに還元したいと思う。まだ具体的に考えがまとまってはいないが、ESD の観点から自国だけではなく海外へもっと目を向けるべく、なるべく具体的な海外の出来事に自分たちで目を向ける活動や、日本がどのように他の国とつながっているのか実感できるような活動を取り入れたい。

今までは教科書中心で授業を進めていたが、その中に前述のような活動を取り入れることができれば、「何のために英語を勉強をしているのかわからない」という生徒たちの動機づけにもつながると思う。今回の訪韓で個人的にも共通言語を持つことの大切さを痛感したため、国際的な共通語となりつつある英語を動機をもって学ぶことは、ESD と遠く離れたものではないと理解している。

【今後の日韓交流】

自分の指導教科についてばかり述べてしまうが、やはり英語での生徒同士の交流を考える。自分の経験からも、英語を母国語としない国同士で英語を話す経験はとても大切で、ネイティブスピーカーとの会話のように気兼ねすることなく、リラックスした雰囲気で会話ができるものである。文法的に間違っているように、「コミュニケーションがとれている」という実感を持ちやすく、相手も完

璧ではないと思えば積極的にいられるものである。人が実際に行き来することが難しかったとしても、今は Email 等でコミュニケーションはとれる。日本と韓国は文化的にも似ている部分があり、今は多くのサブカルチャーが両国を行き来しているので共通の会話も多いと思う。日本と韓国の学校間での英会話もしくは英語 Email 交換ができれば、生徒にとっては素晴らしい体験となるだろう。実施の可能性についてはまだ未知数で、現状の施設で授業の一環としてすぐに実施というわけにいかないだろうが、ユネスコサークルのようなものを作ってまず試すということは十分可能だと思うので、ぜひ今後検討していきたい。

及川 篤史

【最も有意義であった内容】

このプログラムでは多くの現場を見て、多くの文化に触れることができ、韓国を理解するにはどれも有意義であったと感じている。その中でも特に有意義であったと感じるのは、ホームビジットである。

学校訪問や教育庁などの訪問で、教育をする立場から韓国の教育について勉強することが多かったが、このホームビジットでは、高校3年生になる大学受験を控えた長男と中学2年生の次男をもつ親として、韓国の教育についてどう感じているのか、考えを聞くことができ、とても有意義だったと感じている。

特に長男が毎日夜の11時、12時まで学校で勉強していることの大変さや、大学に受かったとしてもその先の就職も大変になっていることなどへの不安な気持ち、またそのような韓国のシステムについて問題があるのではないかとおっしゃっていたことがとても印象的だった。

私は、始めて外国の方の家庭に伺うという経験をさせてもらったが、とても温かく私たちを迎えてくれ、そして、悩みや不安を話すことができ、また一緒に笑い合うことができた時間は代え難いものになった。また、ぜひ逆に訪問を受け入れる立場で、このような経験をしたいとも思った。

【成果】

1.施設・設備の見学。教科教室制について。

4つの学校を訪問させていただいたが、どの学校も施設・設備は充実していると感じた。特に、保聖女子中学校で見せてもらった英語の授業がとても印象的だった。英語の専門教室で行われ、教室の中には、英語で書かれたことわざが掲示してあったり、英語の本が読めるようになっていたり、この教室に入ったら英語を使うんだ！というメッセージが教室からも伝わるものであった。また電子黒板を有効に利用している授業を見ることができ

たのもとても新鮮であった。教材の準備は大変ではないかと思うが、テンポよく映像が切り替わり、生徒が楽しみながら英語を学んでいる様子を見ることができた。

教科教室制は、順天女子高校で見ることができた。教室が教科毎にまとまっており（理科教室の階、英語教室の階など）、日本に見ることのできない教室配置であったので、とても驚いた。ホームルーム教室も教科の教室で兼ねているようで、生徒もホームルーム教室を拠点として各教室に移動するというのではなく、大学のように常に自分の荷物を持ちながら移動し、休み時間もそれぞれいろいろな教室で思い思いに過ごす様子が見られた。また順天女子高の授業を見せていただいた時に、授業中に眠くなるのを防ぐため、自主的に教室の後ろで立って勉強できるスペースがあり、実際そこで授業を受けている生徒の姿を見ることができた。とても面白い工夫だと思った。

2.熾烈といわれる大学受験への対応の現状と課題について。

韓国では、「IN ソウル」と呼ばれているようであるが、ソウルにある大学に入ることを目指して大学受験をするとのことで、よい大学に入ること・入れることの思いがとて強い国だということを経験した。また、高校では大学受験の準備として、夜 11 時・12 時まで放課後学習をしているということであった。実際、私たちが夜に食事をしてホテルに戻る時、夜 11 時くらいに学校から出てきて家路に向かう高校生を多く見かけた時には衝撃を受けた。最初は、学校で遅くまで勉強をさせているということもあり、異様に感じたところもあったが、よく考えてみると、日本でも場所は学校ではないが、塾や家庭で毎日遅くまで大学受験の準備をしている光景はよく見ることができるので、実はあまり日本と変わらないのかもと思った。韓国では、中学入試や高校入試がない分、大学入試だけが受験であるため、その一回にかける思いが強く出るのだと思った。

プログラム初日のフォーラムや、ホームビジットの時にご家族からも伺ったが、韓国のこのような受験システムには多くの課題があるという話をよく耳にした。課題は多いのかも知れないが、順天女子高で見た、生徒が休み時間にも意欲的に・自主的に勉強する姿や、保聖女子中学校で聞いた、生徒会長の「夢をかなえるため、困っている人を助けるため、良い大学に入るために勉強をする」という言葉などを思い返すと、実際勉強に取り組んでいる子ども達は、とてもたくましく、とても頼もしく育っていると感じた。

【今後の日韓交流】

2011 年 1 月に韓国教員招へいプログラムで、韓国の先生方に本校を訪問していただいたが、今後も本プログラムの訪問受け入れは可能であると考える。

2011 年 1 月に受け入れた際の内容は「本校の紹介」「施設見学」「本校教員との意見交換」であったが、もしまた本校を訪問していただく機会があるのであれば、私が今回韓国の学校を訪問して有意義と感じた内容を入れて迎えることができれば、よい時間になるのではないかと感じている。具体的には、やはり生徒の姿を見てもらい、生徒と交流をしてもらう時間が多いとよいのではないかと考える。本校では選択の授業で韓国語の講座もあるため、その中で韓国の先生方から文化の紹介をしてもらい、生徒と交流をしてもらったり、また、授業以外でもクラブ活動に熱心に取り組む本校生徒の様子を見てもらえれば、日本の教育の一部を理解してもらえるように思う。

岡保 史雄

【最も有意義であった内容】

どのプログラムも私にとっては有意義なものであり、優劣を付けることは難しい。その中で、今回の学校訪問は、初等学校、中学校、高等学校、特別支援学校と校種の違う 4 つの学校訪問させてもらい、それぞれの学校の設備・施設を見学し、教育方針や教育課程などの説明を聞き大変参考になった。また、それぞれの学校で生徒との触れ合いや授業交流もあり、更に、教職員との意見交流もあり、韓国の教育の状況に触れ、日本との違いを知ることができ、とてもよかった。日本と韓国、教育システムは相違があるが、教師の熱意、生徒たちの意欲は変わらないと実感できた。ホームビジットも有意義な内容であった。顔を合わせをするまでは、どんな家族と出会うのか不安があったが、出会って明るい家庭でほっとした。話題も日本のアニメなど共通な話題でとても楽しかった。子どもたちも明るく、よく話しかけてくれた。子どもたちの礼儀作法もしっかりしており、日本が失ってきた子どもの姿が、韓国には残っているのだなと感じた。最後の報告会も感動する内容だった。報告会のできばえもすばらしかった。そこに至るまでの過程での一人一人の努力や協力があり、グループとして、とてもまとまりを持って取り組めた内容だった。

【成果】

まず、本プログラムに参加された多くの人々と出会い、つながりをつくることが大きかった。日本人の教職員のみならず、ACCU、KNCU の職員の方々、韓国の教職員の方々、通訳、ホームビジット先の家族など、これからの交流の絆が築けたことが大きかった。教育の現状については、受験戦争の厳しさがよく分かった。受験に勝ち抜く生徒を育てるために設備を整え、教員を補充し、プログラムを編成していくなど国としての方針に従って、各地の教育庁が熱心に取り組んでいる姿が見られた。

また、予算面でも充実していることがよく分かった。文化面では、日本の文化と深く関わっていることがよく分かった。韓国の生活様式も日本とよく似ており、仏教の思想も似ており、やはり、古くからの交流によって多くのことが日本に伝わったことが分かった。ホームビジットでは、家族との触れ合いで、韓国の家庭生活を少し見る事ができた。それにもまして、子どもたちの振る舞いの礼儀正しさが印象に残った。レストランでの店の人に対するあいさつやお礼の言葉、エレベーターでのあいさつなど、両親が率先して行い、子どもたちも真似てしっかりあいさつをするなど、日本が失くしてきたものを目の当たりにして、懐かしさが込み上げてきたとともに、とても感心した。この家庭の様子が、韓国の学校での生徒たちの礼儀正しい振る舞いにつながっているのだと思った。

【貢献・課題】

本校はイギリスの小学校と学校間交流を行っている。始まって一年と少しの期間で十分な交流まで至っていない。今回の韓国での学校訪問において、異文化理解の学習に力を入れている様子を見て、まず、本校での異文化理解の学習の充実を図り、次に、イギリスのことを写真や資料を充実して詳しく紹介していく。本校の異文化理解の環境を充実しながら、交流のある学校の生徒との情報の共有を進めていく。このような異文化理解を進めていく中で、世界を意識できるような児童を育成していきたい。本校では、目の前のこと、自分のことを中心に考えて、世界を意識できる児童は少ない。まだ、児童の中には、世界＝外国人という考えから、外国人と会わないから世界を考えないという児童もいる。しかし、現実には食料品や身の周りの物などで、世界とつながっている。更に、インターネット、メールなどで、世界に数秒でつながっている。本当に世界のことを考えていき、自分の行動が世界とつながっていくんだという意識を児童に持たせるような取組を学校全体で考えていきたい。このプログラムで多くの人とつながりが持てたことで、ぜひ多くの教育の情報を得たい。その情報を日々の授業の改善につなげていくとともに、発信にも努めていきたい。

【今後の日韓交流】

このプログラムをきっかけに、韓国との学校間交流を行うとよいが、本校のようにすでに交流している学校は難しい。そこで、年に1～2回、意見交流する場を設けてはどうか考える。例えば、今回のように韓国に行った場合、訪問先の教職員や生徒に質問を依頼し、ACCUで集約して、訪問した教職員にメールで配信し、解答できる項目を解答したり、教職員を通じて生徒の意見を集約し、ACCUに送付し、韓国に解答を送るなどして、相互の交流を深めたらどうかと思う。

桶谷 圭介

【最も有意義であった内容】

プログラム全体を通じてどれも大変有意義でした。中でも個人的な旅行では絶対に経験できない、学校訪問や児童・生徒、教職員との対話、ホームビジットが最も有意義であったと感じます。それぞれの学校の教育方針、日本との共通点や相違点を比較しながら様々なことを感じ、考えました。ホームビジットでは、韓国の一般家庭を訪問させていただき、多くの経験をさせていただきました。順天市のご家庭でしたが、自分たちが住む地域、家族への愛情、食べ物、もてなし方、習慣の違いなど様々な角度から韓国文化を見る機会となりました。また、中学生と高校生のお子さんがおり、学校での生活や学習内容などを知り、日本の学生のそれと比較することができました。

大変貴重な経験は、私にとって財産になると同時に、何らかの形でこの経験を継続、発展できたらと考えるようになりました。

【成果】

このプログラムを通じて事前に設定していた課題やテーマに対する回答を得られたことが成果です。知らなかったことや疑問に思っていたことを知ることができ、自分の視野が広がりました。また、社会科の教師として韓国という日本以外の文化や歴史を体感できたことは大きな経験であり、子どもたちに自分の体験談として語ることができることをうれしく思っています。韓国の教育事情や環境、子どもたち教職員の方々の考え方、文化、歴史など様々なものを日本のそれらと比較することができ、日本の教育における現状や環境、子どもたちの実態や日本の文化、歴史を見直すきっかけを与えてもらいました。また、韓国の人たちとのふれあいの中で、自分自身をもう一度見つめ直す機会にもなりました。言語の習得、国際理解、さらなる視野の広がりなど一人の教員として「こんな自分になりたい」という欲が出てきました。ESDについてもまだまだ勉強しなくてはいけないと痛感しました。自分がさらに成長し、それを学校現場での教育に生かさなければならないと強く思えたことが、このプログラムに参加して得た最大の成果だと思います。

【貢献・課題】

私がこのプログラムで得た知識、経験を学校の授業で還元したいと考えています。自分である程度自由に計画が立てられる、学活や社会科の授業の中で生徒たちに還元できたらと思っています。実際に写真や持ち帰った実物（お金や資料）を生徒たちに見せ、経験談や文化の違いを授業に取り入れています。

今後は全校の生徒を対象に自分が経験したこと学んだことを紹介する予定です。また、同じ学校に勤める職員向けの報告書（写真を交えた旅日記）を作成する予定です。少しでも韓国の教育事情や環境、考え方、文化の共通点や相違点を伝えられたらと思っています。また、本校はユネスコスクールの加盟校でもあるので、ESD のプログラムの充実に今回の経験や知識が生かせればと思っています。

【今後の日韓交流】

この日本、韓国の教職員招へいプログラムの継続が最大の交流場面だと思います。このプログラムが今後も継続され、日本、韓国、お互いの教育の発展につながればと思います。また、私がこのプログラムで経験できたことを、まだ経験していない多くの教員がすることによって、お互いの教育交流が活発になると思います。学校レベルではインターネットを利用した交流により、国際理解教育ができると思います。個人レベルではメールでの交流が考えられます。

お互いの文化や学校での取り組み（ESD など）考え方や習慣の共通点や相違点を交流させ、意見交換をするだけでもお互いにとってメリットがあるし、視野が広がると考えます。交流で得た知識や考え方、交流方法は、韓国だけではなく他の国々との交流に発展できると思います。お互いの国を訪問するのはなかなか難しいですが、小さな交流から徐々にネットワークを広げていくことが実施の可能性が高いと考えます。

小野寺 龍哉

【最も有意義であった内容】

学校訪問が有意義だった。例えば宝城女子中学校ではコミュニケーションを図るための英語や日本語などの外国語の習得はもちろんのこと、相手の考えを理解するための討論の仕方を学ばせる授業を展開していた。これは基礎学力を向上させる上で大きな効果をもたらしていた。

また、順天女子高等学校ではボランティアサークルをつくりボランティア活動についても積極的な参加を進めていた。これは、自分たちの小さな活動が、身近な地域、さらには世界を動かすことにつながるという意識を育てることに大きく役立っていると感じた。

海龍初等学校では学校施設設備の充実ぶりに目を見張った。教科ごとの部屋ということにとどまらず、学習内容によって専用の教室があるという印象だった。さらに廊下や踊り場等の広い空間に、工夫を凝らした展示スペースを設けていた。子どもたちの作品が数多く並んでおり、活動結果を認め、ほめて伸ばすという校長先生の言葉を実践している一面を表していた。

【成果】

日本の教育の良さと、韓国の教育に負けていると感じる点を自分なりに見つけることができた。人間性を育てる面では日本の初等教育の学級担任制を基本とする学校経営スタイルが良かったと感じた。しかし、学力の向上を目指した手だてはあまり効果をあげていないというのが現状であろう。財政面での難しさはあると思うが、韓国の実践を大いに参考にしなければならないと感じた。

【貢献・課題】

次の2つのことについて意識を高め、改善策を考えながら児童の指導にあたりたい。

1 つ目はコンピュータの有効活用である。これまで以上に視覚に訴える授業は重要になっている。韓国ではほとんどの教室でコンピュータと電子黒板や大型ディスプレイを活用して学習効果を高めていた。

2 つ目はコミュニケーション能力の育成である。現在の国語科の中でも言語活動の充実として重点項目に取り上げられているが、国語だけでなく他の教科・領域でも学年の発達段階に応じて討論場面を仕組んでいく必要がある。

【今後の日韓交流】

姉妹校の提携により、教師の派遣などの交流やテレビ電話等を活用しての合同授業、児童生徒の作品の交換が考えられる。

また、E-Mail 等での情報交換や、授業改善のためのテレビ電話会議等が考えられる。

齋藤 武

【最も有意義であった内容】

初めて韓国を訪問し「近くて遠い国」から「近くて近い国」へと心から思えるようになった。韓国の歴史や文化に触れるたび日本と類似している点が多くあった。やはり相手を理解するためには直接会って話し交流をすることが大切であることを再認識することになった。韓国滞在中にみたものは日本より進んでいることや恵まれていることも多くあるが、日本の方が進んでいると感じられることも多くあった。10 年前と 10 年後の日本が同居しているかのようだった。

受験競争の激化もその一つである毎日深夜まで学校で勉強をし、その後塾へ通ったり自宅で勉強している韓国の生徒の頑張りには感心するが、健康面やコミュニケーション能力、落ちこぼれた生徒の問題など課題は山積しているように思われる。高校を訪問したとき通訳の方から、「自分の子どもも深夜2時まで勉強しているが、親としては健康面は心配だが、やはり子どもの頑張りに対しては嬉しい」といっていた言葉は心に残った。

【成果】

韓国の学校へ行って環境の充実も驚いたが、生徒一人ひとりの表情の明るさと、服装、頭髮の身だしなみがしっかりしていることが日本の教員としては羨ましかった。

生徒たちは自己の目標を持ち勉強することで実現へ近づくことを知って努力をしているためその姿勢が態度や身だしなみにも現れているのだろうか。

【貢献・課題】

現在、日本の高校生に指導する中で改めて日本の良さも感じられるようになってきた。

自分の将来に対して目標を持っている生徒もいればなかなか絞りきれない生徒もいるが少なくともあきらめていないように感じられる。何とか迷っている生徒の道標や少し背中を押してあげられればと思うようになった。今後この経験を少しでも役立てられるようにしていきたいと考えている。

【今後の日韓交流】

このプログラムで知り合った多くの方々を中心にインターネットや電子メール等で交流を深めていければと考えている。

島田 哲弥

【最も有意義であった内容】

私にとって最も有意義であったのは、実際に韓国の各学校を訪問し、授業風景の見学はもちろん、子ども達や先生方と実際に交流できたことである。まず、教員として日本以外の教育現場を見学することによって、自分が毎日行っている教育活動を客観的に考えることが出来たように思う。そして、日々当たり前に行っている教育活動の持つ意義の大きさを改めて実感できた。学校見学における交流とともにホームビジットでの韓国の家庭での食事、団欒も忘れることが出来ない。国際交流や世界平和のために私たちができる最も簡単なことが「人」と「人」の交流を増やすことだと考えている。その「人」と「人」との交流が出来たことを素直に喜びたい。韓国と日本の間には植民地問題など歴史的な問題が存在する事実が確かにある。補償問題、領土問題など国家間の解決すべき問題ではあると捉えがちだが、その土台となるのが私たち一人一人の人間である。この交流がその一つのスモール・ステップになったと考えている。

【成果】

1.韓国はもちろん日本の教職員とも交流を深め、ESD教育がどのように行われているのかを知る

韓国の中学校・高等学校では、ユネスコ・クラスやユネスコ・クラブが設置されていた。そのクラブがユネスコスクールの活動の中核を担っており、教職員と生徒が

一緒になって活動しているという印象が強い。私の勤務校では、国際理解教育がESD教育の中心となっているが、韓国ではグローバル化をより意識しており、地球市民を育てるという目標が明確になっている。教育活動の目標が明確であるため、その目標に向かって今何をしなければいけないかという教育課程が確立して参考になった。

2.韓国の歴史教育、文化教育(世界遺産教育・民俗・食文化など)がどのように行われているのかを知る

韓国の歴史教育の現状については、あまり議論にならず、特に得るものがあつたわけではないが、私も参加した保聖女子中学校の音楽の授業のように韓国の文化についての教育内容が充実していると思う。中学校だけではなく、特別学校の子どもたちや小学生も韓国伝統の音楽などを披露して、文化の伝承に力をいれていることが理解できた。日本でも小学校ぐらいまでは同じように教育しているが、それが中学校・高等学校と継続しているとは言い難いと思っており、課題であると感じている。

3.韓国の教育行政についての理解を深める

東京で行われた講義や二日目の教育改革の問題点などを通して、事前に韓国の教育行政について予習出来たことは非常に有意義であった。またそこでの疑問点を学校見学や質疑応答を通して一つずつ丁寧に理解できた。特に高等学校における標準化問題については以前から興味があり、それに対する反対などがなかったのかと考えていたが、現地の先生方に直接質問し、彼らの言葉でその内容の説明を聞き、現場が抱えている悩みなど、教員として問題意識を共有できることを実感した。また、我々の滞在期間中にソウルでは学校給食の無償化をめぐり、ソウル市長が辞任するといったタイムリーな出来事が起こった。現地に居たからこそ問題の大きさがわかり、韓国の教育問題に対する関心の高さを象徴しており、それを体験できたことは幸いであった。

【貢献・課題】

本校では、生徒会やJRC部などが中心となり、エコキャップ運動やボランティア活動を行っている。ただし、活動が分散化してしまい、それがどのような価値を持つのか学校全体に還元できていない現状である。本校にもユネスコ・クラブを設立し、環境問題やボランティア活動・国際交流活動・文化遺産学習など総合的に行っていきたいと考えている。部活動でそのような体験を重ね、将来国際社会で活躍する人材を育てていくことが目標である。

【今後の日韓交流】

帰国後に本校のユネスコ委員会において、プログラムの報告会を行い、今後本校が教職員の来校を受け入れる際の留意点について報告した。韓国の先生方もやはり日本の生徒の直接の意見を聞きたいはずであり、そのような時間を設ける必要がある。

また、学校紹介や施設見学などを通して、感じたことや疑問点などを全体で話し合う場を設定する必要もある。このようにプログラムを重ねていけばよりよい研修プログラムとして成長させていくことが出来ると思う。

また、本校には調理師の資格取得を目指す食物調理コースがある。この食物調理コースにおいては韓国の食文化を勉強する機会を設けることを検討していきたい。韓国の方から直接韓国料理について教えてもらい、それを文化祭などで売るなど地域にも貢献でき、比較的实施が可能な交流プログラムであると考えている。

鈴木 誠治

【最も有意義であった内容】

すべてのプログラムが効果的に配置されており、体験した内容はどれも自分にとって血となり肉となる、充実した10日間であった。そのなかで「もっとも有意義であった内容」を挙げるのは難しいが、あえて選ぶなら「学校訪問」ということになるだろうか。

韓国入りしてから教師フォーラム、文化公演鑑賞、歴史・文化の地訪問などがつづき、それらからも多くのことを学んだ。しかし、4日目の学校訪問でソウル精進学校の門をくぐったときに気持ちが引き締まる思いを感じた。また、保聖女子中学校の「日本文化」の授業では生徒とともにけん玉の体験をした。言葉はほとんど通じなかったが、楽しいひとときを過ごすことができたとともに、「自分は学校の教員なのである」ということを改めて実感した。

加えて、学校訪問では韓国の教育現場の状況を肌で感じることができ、また、先生方の話から強い刺激を受けた。「今、必要なことを確実に児童・生徒に伝えよう」とする教師の強い態度、また、学校の信用と地位を高め維持していこうとする行政の支援など、日本の教育に足りない（または日本の教育が置いてきてしまった）大切な「何か」が韓国にはあるような気がしてならない。

【成果】

個人としての課題・テーマに対する今回のプログラムでの成果は以下の通りである。

1.韓国の学校教育で、日本がどのように紹介されているのかを知る

結論から言えば、思ったよりもくわしく、友好的に紹介されているということがわかった。保聖女子中学校では日本文化に触れる授業を、海龍初等学校では日本の唱歌を扱う授業を参観させていただいた。また、順天女子高校では第2外国語として日本語を学ぶ生徒が多く、積極的に日本語で話しかけてくる姿が印象的であった。その一方で、教育資料館をはじめ各所で植民地時代の資料

をかいま見た。今後、韓国の方々と前向きにつきあって行くには現在の友好的な部分と過去の望ましくなかった関係があった時代の部分の両方を踏まえておくことが大切であると改めて感じた。

2.韓国の学校におけるユネスコスクールとしての活動(ESD) の実際について

今回の訪韓で数校のユネスコスクールを視察させていただいたが、各校とも工夫がなされており、たいへん参考になった。特に、多くの学校がユネスコ組（日本でいえば部活動・サークル活動的なものとして考えればよいのか？）が組織され、生徒主体の活動となっていることに感銘を受けた。また、ユネスコスクールではないが海龍初等学校では地域に根ざした特別活動を行っており、「ふるさと学習」をESDのテーマに掲げている本校に取り入れられる内容がたくさんあったことも大きな収穫であった。

3. 韓国と日本の文化遺産の共通点と相違点

社会科の教員として、たいへん興味深い部分であった。今回の校庭では松広寺、仏国寺と二つの古刹を見学させていただいたが、目についたものは相違点よりも共通点である。住職やガイドさんの説明の中でも、日本で聞いたことがあるような内容が多く含まれていた。ただ、日本に比べ、生活や文化の中に仏教と共に儒教が深く入り込んでいるという印象も受けた。いずれにしても日韓は地理的に近く、大陸の影響を色濃く受けた「東アジア文化圏」に含まれているということがよくわかった。

【貢献・課題】

1.社会科の授業を通して、隣国とより良関係を構築しようとする意欲をもたせる活動

地理の授業では日本と韓国の位置関係の近さを、歴史の授業では古代から現在までの両国の関係について学習してきた。今後はこれをもとに生徒個人のテーマ別学習の機会を設け、調査・探求することで隣国の良さに気付かせ、友好的な態度で接しようとする気持ちを育てていきたい。

2.ユネスコスクールとしてのネットワークづくり

韓国の各学校での素晴らしい取り組みを我が校にも取り入れていく活動をする中で、インターネットを使った情報交換に積極的に取り組ませていく。このことが学習の深まりだけでなく、国際社会に生きていくという感覚を磨かせることになるのではと考える。韓国では児童・生徒の目を積極的に外に向けさせようとする雰囲気を感じた。これにない、今回の体験を、「グローバルな視点をもってふるさとの良さを見つめる」生徒の育成につなげていきたい。

3.文化遺産、自然遺産を大切にする土壌づくり

日韓ともに、世界に誇れる文化遺産・歴史遺産を持っていることがよくわかった。しかし、両国とも急速な経

済発展にともなう都市化や公害など、共通の問題点も抱えている。隣国同士で連携しながらこの問題にどう取り組んでいくか、学校教育現場からのアプローチの仕方について各教科の先生方と一緒に考えていきたい。

【今後の日韓交流】

本校はユネスコスクールに登録され、2年前から ESD を意識した教育課程を編成している。そのため、他の地域や国との情報交換は積極的に行っていきたいという考えはある。また、国際理解教育の観点から、学校間交流ができれば素晴らしいことだとも考える。そのために本校が単独で今すぐできることは、インターネットを通じた交流であろう。

また、韓国教職員招へいプログラムに基づく、白石市への受け入れについては現時点では難しいかもしれない。しかし、白石市教育委員会・白石ユネスコ協会等がリーダーシップを発揮して受け入れ態勢づくりをしていこうとするときには、今回の恩返しの意味も含めて積極的に協力していきたいと考えている。

田中 正勝

【最も有意義であった内容】

全般を通じて意義のある内容であったことに相違はない。以下の記載は並列的な記述となるが、それぞれに意義深いものであったことを冒頭にのべておく。

まずは、学校訪問についてである。各種の学校への訪問は、それぞれの発達過程における児童生徒への指導状況を知る上で意義深いものであった。初等学校でのホームルーム指導と教科別教室制の複合モデルは、今後の学校運営において必須の項目であると考えられる。日本における小規模校の運営として国策上取りえる形式であるとも考えられる。数字上の検討ではなく、教育の現場における実践事例として日本での導入も検証されたい。B グループが訪問した中等学校と高等学校は私立公立との相違はあるが、女子校という同様のスタンスにあり女子教育の一端を窺い知れた。儒教文化の伝承国である韓国において、男女別学の学校運営と共学校の在り方、保護者ニーズの表れなどを考慮し現在のスタイルになっていると考えられるが、女子教育の確固たる姿勢が今後における韓国経済の発展の一翼を担っていると考えられる。学校訪問の際に最も有意義であったのは、オフィシャルの情報交換の場面でなく、個人的に先生方と話せたことであった。先生方は一人ひとりが生徒の学力向上と目標設定について責任をもち、常日頃から真摯な態度で授業や生徒指導に臨んでいる。私たち教員にとってはあたりまえ

のことではあるが、国家主導の教育政策の中にあり、生徒たちの夢の実現に向けての先導者として存在する教員の存在の大きさに改めて感服した。

次に ESD 教育の実践指導状況確認である。韓国は多くの文化遺産を有し、人々はその歴史の上に生活をしている。王朝時代の文化を伝承し、その習俗を大切にしている生活の様子に感銘を受けた。そして、自然を大切にする心である。ラムサール条約に登録されている順天湾訪問は、韓国 ESD 教育実践の場でもあり、子どもたちにとっては身近にある存在である。資料館での解説を受けた後に散策を兼ねた実踏はその偉大さに触れ、自然環境の保全と理解を促す最高の環境にあることを実感した。韓国の教育は決して大学進学受験ありきの教育ではないと感じる場面でもあった。この持続可能な文化・伝統・自然の教育こそが韓国教育の底力であり、祖国を大切に育心につながると感じた場面でもあった。

【成果】

1. 韓国の教育制度および学校における生徒指導状況については、国家行政における教育指導体制の構築とそれを期待する国民の様子が少し理解できたような気がする。将来の国民育成のために、今国家がしなければならないことを検証し、その状況下における最善の教育体制の構築が、現在の韓国経済や文化の継承について大きく役立っていると感じた。日本の教育環境はとくに地方行政に頼っている部分が多いと思う。文部科学省の指針を地方の独自性の中で形成しているからであろうが、公立学校と私立学校の混在している現在、多様化した保護者家庭の多くのニーズを取り込むことは可能であろうが、一方においては日本の目指す教育観がぼやけているかのように入る。大きな指針としての教育行政と指導現場の現状を十分に把握し、日本の今後の国家観が見渡せるような政策を期待できる体制の構築が必要であると実感した。
2. ESD 教育への取り組み：ユネスコスクールを中心として、行政と学校現場が連携を模索しているように感じた。持続発展可能教育の趣旨とその目的を達成すべく取り組みを行っている学校の事例紹介もあったが、国際理解や環境問題への積極的な取り組みは個々の学校では達成しえず、地域・国家または世界国家としての連携が必須であると考えられる。今日の日本での教育スタイルにはこれら目標達成の強制的権限が乏しく、カリキュラムにおける授業編成や行政主導の対応も時には必要であると感じた。今日の学校は多様性に富み、一般論的解釈では状況把握もまた実効性も乏しい。これらについては、韓国も日本の教育現場においては強いリーダーシップを必要としているのではないだろうか。
3. 文化交流や歴史探訪といった場面ではなく、身近なコミュニケーションが大切であると感じた。ちょっとした

食事の場面や立ち話の際にそこに集う方々の会話から韓国らしさや韓国の固有性を感じ取ることができた。もっとも、帰国後のコミュニケーションもその後の検証に有効であり、メールのやり取りで韓国文化の一端を伺うことができた。

【貢献・課題】

現在の勤務先である本校のシステムとして ESD 教育、ユネスコスクール申請は難しいと考える。しかしながら、その理念は崇高であり、将来の国民として活躍することをもたを指導する私たちにとっては絶対に成し遂げなければならない命題であると考えます。

授業実践の中で、ESD 教育 国際理解 韓国文化の紹介と理解などを課題として、私自身の専門教科である社会科・公民科の授業分野で指導にあたる予定である。また、教職員研修の発表場面で事例報告として、このプログラムで経験した貴重な時間を伝えていきたい。

具体的には、国際理解教育の場面では研修中に得られた情報を中庸の立場で伝承し、生徒たちの理解を促すようにしていきたい。アジアの文化に対する理解は欧米文化の理解に比較して決して十分であるとは感じられない。歴史教育のみならず、食文化や教育文化、人々の生活の様子や経済活動の実態などを通じて、近くて遠い国から近くて近い国への意識的転換を図っていきたい。

また、教育実践の場面で得られた情報は、学校内や大学法人本部における情報発表の場を設けてもらい、貴重な経験を自らのことばで報告していきたい。決して比較論ではなく、良いところはなぜよいのか、例えば学力向上についての方策としての放課後活動の実態報告と導入については熟慮いただき、ESD 教育実践事例についてはその有効性と活動報告を通じたあり方を報告するのみならず、自らの学校においていかに導入し得るのかを検証していきたい。また、韓国文化の理解を促す教育ができるよう、今後も自らの知識習得に臨んでいきたい。

【今後の日韓交流】

1. 情報の交換・共有について

今回の交流について、韓国の先生方との継続した情報交換および日本国内の先生方との情報共有・交換が可能である。年に数度あるユネスコスクールの研究発表の場を借りての情報交換会や今回のプログラム参加者の活動報告会を実施していったらいかがであろうか。先生方の情報共有は ESD 教育の実践事例、活動報告にとどまることなく、各地域や各学校での課題がクローズアップされ、自らの学校教育や指導についての最高の検証機会になることは確実であると考えます。

2. 教職員・生徒の受け入れ

韓国教職員の受け入れもさることながら、他国の先生方の受け入れも大いに歓迎する。現状、本校は別の機関を通じての生徒の受け入れを実施しており、過去にイン

ドネシアや中国からの高校生招へいプログラムでホームステイを含めて実施してきた。これには、準備に多大な時間と労力を必要とするが、その後の学校内における国際理解と生徒たちのモチベーションの向上を期待でき、実際にプログラム終了後の交流も盛んに行われていると聞いている。いわゆる草の根の交流こそが大切であり、それをプロデュースするのが教育機関の命題であるとも考えている。

3. Web 上でのコミュニケーション

専用のサイトを立ち上げフリースペースとして情報交換の場を提供する。ログインのパスワードを各個人に配布し、その後の実践事例や活動報告をネット上で公開することも可能であると思う。いわゆる、今回のプログラム参加者の同窓会組織をネット上に作成することになる。研究紀要的な発想ではなく、できる時にできることをちょっとした報告形式として積み重ねて行っていくのがであろうか。

横山 豊治

【最も有意義であった内容】

何といっても学校訪問で、子どもたちと直接触れ合っただけで笑顔を見られたことは大きな収穫であった。それぞれの学校の訪問では、学校の伝統や教育内容、また施設の充実ぶりの説明を受け、大変参考になることが多かったが、わずかの時間でも児童や生徒と意見交換を持ったり、授業の中に入り込んで触れ合えたことは本当にいい経験になったと思う。言葉や文化は違っても、子どもたちの目の輝きはどの国でも一緒に、我々教師はこの子どもたちの目の輝きを失わず、さらに生き生きと輝くよう指導することが大切であると感じた。それでも、その国の考え方が教育に直接反映されるもので、韓国の差別のない平等な教育システムの充実と、どの子にも高い能力をつけようとする姿勢には頭が下がる思いであった。ESD 教育の考え方とその実践は、日本よりはるかに進んでいると感じた。国際交流だけでなく、環境教育や自然保護などについてまだまだ日本の教育は韓国に学ぶべきであると思った。

もう一つ大変有意義であったプログラムは、やはりホームビジットである。短時間ではあったが、その国の伝統や習慣をある家庭に入ることによって肌身に感じることもできた。言葉のコミュニケーションには苦労しても、気持ちが通じていれば何の苦も無く楽しい時間を過ごすことができることが分かった。受け入れていただいたご家庭が本当にいいご家庭で、一生の思い出に残る貴重な時間を過ごすことができた。

【成果】

韓国の公立教育と私立教育に大きな関心があり、興味を持って現場を見た。日本の公私の関係と大きく違う点は、国を挙げてどの子の能力もしっかり伸ばそうという考えが浸透していることである。したがって、公私に限らず子どものためであれば教育への財政負担は惜しまないように感じた。日本であれば公教育と私教育がどこかお互い意識合って、相容れないところもあるように感じるが、韓国では国のためのいい人材を育成するためには、お金は惜しまないというような姿勢が一貫していて、公私の区別なく教育への熱の入れようが強いように感じた。

子どもはどの国も一緒である。その子の能力を伸ばしていい人材を育てていくことは、その子のためでありその国、世界のためにもなる。小さな考えにとらわれず、もっと大きな考えを持つべきであると自分自身で反省した。

ESD 教育に関わる英語教育と国際理解の教育は、本当に参考になることばかりであった。英語教育の水準の高さはある程度予想していたが、実際に高等学校と中学校の英語の授業を見て、その水準の高さには驚いた。日本では小学校でようやく外国語活動が始まったが、もっと低学年でも実践している韓国の教育を見習うべきであると思った。また、高等学校で第二外国語として日本語を選択する生徒が多く、日本語を話せる生徒が多いのには驚いた。日本で韓国語を話せる生徒はほとんどいないと思うが、韓国という国は隣国である日本を大変意識し、手本にしよとする意識が強いのではないかと思うが、今の教育の現状をみると、むしろその反対で日本の教育が韓国を手本にしななければいけないように感じた。

本プログラムによる成果は、この韓国という国の教育に対する考え方の見習うべきところを多く発見できたことと、その教育システムに誇りを持って対応している教職員の態度である。子どもたちの成長のため、国の発展のため、教育という職業の重要性を先生方がよくわかり、それぞれが誇りを持って大変熱心に仕事をされているのには、本当に感心した。

【貢献・課題】

まず、ESD 教育への理解がこのプログラムでかなり深まったので、その推進に力を入れていきたいと思う。国際理解教育、異文化理解の教育は、新しく始まった外国語活動の時間にとどまらず、いろいろな授業の中で展開できるもので、これからのグローバル化社会の中では欠くことのできないテーマであり、深めていかなければならない。そのため、実際にさまざまな国のことを児童と一緒に考え、調べ、発表し具体的に授業に取り入れていきたい。また、環境教育は理科の学習とも大きくつながり、今実際に理科の授業を担当しているので、カリキュラムを見直し、各学年にどのように取り入れられるかを

検討していきたい。危険教育に対する考え方は、今回大変参考になったものの一つである。今までは、学校安全教育として防災教育と防犯教育だけを考えてきたが、その裏側にある「危険」に対する意識の持ち方をしっかりとするという考えは、もっともであると感じた。韓国と日本の「危険」に対する考え方に若干のずれはあるものの、児童・生徒の安全を最優先して考えるという意識の持ち方は共通しており、教育が重要な役割を持つことに変わりはない。今の日本の社会における危険教育の具体的な授業展開を模索していきたい。

次に、韓国が国民の教育に本当に力を注いでいることがよくわかり、私たちもさらに研究と実践を積み重ね、子どもたちの能力を伸ばすことに誤りのないようにしなければと反省した。すべて平等な教育システムの導入は、どの子にも能力があることを信じ、学習する権利を奪わず、最大限伸ばそうとしている。日本の教育システムのどこかに落ちこぼれという意識があるように思われ、その意識を取り払うことから実践していきたいと感じた。

【今後の日韓交流】

今後もこのような両国お互いの教員の学校訪問のプログラムは続けていくべきであると思う。その中で、教員だけでなく、児童・生徒も数日間その国を訪れ、同じ学校に数日間訪問し、授業を受けたり、教師が授業をしたりすることができれば最高の交流になるであろう。しかし、言葉の問題や、夏休みや冬休みの問題など、すぐには解決できるものではないかもしれない。それでも、間違いなく、教員だけでなく児童・生徒の交換留学は大変有効なものである。その実現に向かって一つひとつ問題を解決していく努力はするべきであると思う。インターネットを利用した、授業展開も有効であると思う。それを継続していく中で、長期の休みを利用して実際に学校に行ってみるというのはさらに有効であろう。

日韓の友好関係が今後さらに強まり、お互いが刺激をしあって質の高い教育が実践されることを期待している。



気仙沼の大漁旗を持って。

◆資料 1.

韓国政府日本教職員招へいプログラム

(2011 年 8 月 26 日－9 月 4 日：韓国 ソウル、慶尚南道、全羅南道、釜山)

実 施 要 項

1. 背景

2000 年 3 月、戦後の文部大臣として初めて、中曽根弘文文部大臣(当時)が訪韓し、文龍鱗(ムン・ヨンリン)韓国教育部長官(当時)との会談でなされた招請に基づき、文部科学省の協力のもと、財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)は、2001 年より韓国から初等中等教育教職員を招へいするプログラムを実施してきました。当初は「ACCU・ユネスコ青年交流信託基金事業」として、2003 年からは「ACCU 国際教育交流事業」として国際連合大学の委託を受け、これまで約 1260 名の韓国教職員が日本を訪問し、我が国の教職員との交流を深め、日韓両国間の相互理解と友好の促進に貢献してきました。

2003 年からは上記プログラムと対をなすものとして、毎年 10 名程度の日本教職員を韓国へ派遣してきましたが、これら交流事業の成果が韓国政府に高く評価されることとなり、2005 年からは、韓国ユネスコ国内委員会による招へいプログラムとして参加人数を 20 名へ倍増し日韓教職員相互交流が実施されました。2008 年のプログラムからは、招へい人数がさらに倍増され 54 人となり、さらなる交流の発展を目指すこととなりました。

2. 目的

- (1) 韓国の初等中等教育における教育制度および教育課題への理解を深める。
- (2) 学校および地域社会における国際理解教育(EIU)と持続発展教育(ESD)^{1⑨}の好事例を探る。
- (3) 教育経験を交換する機会を提供し、日韓両国の教育の質を高める。
- (4) 日韓教職員のネットワーク構築・強化に寄与する。

3. 活動内容

- (1) 学校・教育施設等訪問を通じての、国際理解教育(EIU)や持続発展教育等(ESD)を含む韓国の最新の教育政策・現状の学習
- (2) ユネスコスクールを含む学校や地域社会における持続可能な社会形成のための持続発展教育(ESD)の視察
- (3) 授業見学および韓国の教職員・児童生徒との交流
- (4) 世界遺産見学やホームビジットを通じた、韓国文化の理解
- (5) 第 4 回 ESD 日韓教職員フォーラムへの参加

4. 日程概要

2011 年 8 月 26 日(金)から 9 月 4 日(日) (10 日間)

※8 月 25 日(木)都内にて事前オリエンテーションを実施予定

訪問先：ソウル、釜山<プサン>他 2 都市

(A グループ：慶尚南道<キョンサンナムド>、B グループ：全羅南道<チョルラナムド>)

5. 参加者

下記の教職員、随行員併せて 54 名を参加者とする。

- (1) 2010-2011 年韓国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
- (2) 上記プログラムの東京近郊受入れ校の教職員
- (3) 2011-2012 年韓国教職員招へいプログラム受入れ教育委員会が推薦する教職員
- (4) 日本ユネスコ国内委員会が推薦するユネスコスクール等の教職員
- (5) 日本ユネスコ国内委員会(文部科学省)および ACCU の職員

^{1⑨} 国連では 2005 年からの 10 年を「持続発展教育(ESD)の 10 年」(ESD: Education for Sustainable Development) と定め、ユネスコを主導機関として環境教育、国際理解教育等の持続可能な発展に関わる諸問題を、環境、経済、社会の各側面から学際的かつ総合的に取り組んでいる。

6. 参加資格

- (1) 日本国民であること。
- (2) 所属する学校等から推薦を受けた初等中等教育教職員(教育行政職員を含む)であること。
- (3) 将来にわたり韓国との具体的な教育交流の推進に寄与できること。特に、韓国の学校、教員、児童生徒、地域間との各交流、または定期的な情報交換等を推進する立場にある者が望ましい。
- (4) 国際理解教育(EIU)または持続発展教育(ESD)に関連した諸活動に携わっている者、または高い関心を持っていること。
- (5) 心身ともに健康で、プログラムの全日程に参加が可能であること。

7. 評価と報告

- (1) 派遣期間中
 - 評価票記入(日本語または英語で記入し、韓国ユネスコ国内委員会へ提出。)
 - プログラムレビュー会合(日本側参加者のみによる)への出席。
 - 韓国教員を交えての報告会(9月3日予定)への出席・発表。
- (2) 帰国後
 - 所定の期日までに、プログラム参加の報告を ACCU に日本語で提出する。
(ACCU による編集の後、実施報告書へ掲載予定)

8. 旅費等諸経費

- (1) 韓国ユネスコ国内委員会が下記について負担する。
 - 往復航空運賃: 日本と韓国の国際空港間のエコノミークラス航空券。
 - 韓国内の移動に係る経費。
 - 韓国滞在中の宿泊費
 - 韓国滞在中の食費: 但し、公式行事のない日の夕食については参加者が日当から支出することとする。
 - 日当: 1 日当たり 30,000 ウォン(約 2,200 円、2011 年 7 月現在)を 8 月 26 日から 9 月 3 日の 9 日間分。
- (2) ACCU が下記について負担する。
 - 日本国内交通費: 事前オリエンテーション日の会場(東京)までの交通費、および帰国日の到着空港からの国内交通費の定額(ACCU の規定に準ずる)。
 - 滞在費: オリエンテーション当日の 8 月 25 日の宿泊が必要な参加者について、日当の定額および宿泊。
 - 日当: 帰国日 9 月 4 日の日当の定額。
- (3) 各参加者は、下記について負担する。
 - 海外旅行損害保険: 各参加者は、プログラム期間中の万一の事故に備え、出発前に必ず各自の責任において、海外旅行損害保険に加入しておくこと。
 - 上記(1)、(2)以外の諸経費
- (4) 旅券と査証について
 - 旅券(パスポート): 入国時に 3 ヶ月以上有効なパスポートを各自で準備すること。
 - 査証(ビザ): 一般旅券の場合は、ビザの取得は不要。

9. 通訳

プログラム期間中は日本語と韓国語間の逐次通訳を配置する。

10. このプログラムに関する照会先

財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU) 人物交流課 (担当: 富本、米島)
〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館
TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510
E-MAIL: fumoto@accu.or.jp, yoneshima@accu.or.jp

◆資料 2.

韓国政府日本教職員招へいプログラム

(2011 年 8 月 26 日ー9 月 4 日:韓国 ソウル、慶尚南道、全羅南道、慶州、釜山)

日程

日付	宿泊先	時間	活動
8 月 25 日(木)		13:30-17:30 18:00-19:30	出発前オリエンテーション(八重洲富士屋ホテル) 懇談会
8 月 26 日(金)	ソウル	09:00 09:45 12:20 14:35 16:30 17:30	ホテル発 羽田空港国際線出発ターミナル集合 羽田空港発(KE2708) 金浦空港(ソウル)着 ホテル到着 オリエンテーション 〈ソウルロイヤルホテル泊〉
8 月 27 日(土)	ソウル	9:00 9:30-10:10 11:50-12:50 13:00-17:00 20:00	開会式 韓国ユネスコ活動及び ASPnet についての紹介 講義:韓国の教育事情について ESD 日韓教員フォーラム 文化公演鑑賞「ナンタ」 〈ソウルロイヤルホテル泊〉
8 月 28 日(日)	ソウル	8:40-15:00	ソウルの文化・歴史の地訪問/日韓教職員交流
8 月 29 日(月)	ソウル	8:30-12:30 13:30-16:30 9:30-12:30 13:30-16:30 18:30	学校訪問 A: ソウル新龍山初等学校訪問(ユネスコスクール) 淑明女子高等学校訪問(ユネスコスクール) B: ソウル精進学校訪問(特別支援学校) 宝城女子中学校訪問(ユネスコスクール) 歓迎レセプション 〈ソウルロイヤルホテル泊〉
8 月 30 日(火)	A:慶尚南道 昌原市	8:00 13:30-15:30 16:30	〈2グループに別れ地方へ移動〉 ソウル出発 → 牛捕池へ移動(昌原市) 牛捕池生態教育 ホテル到着 〈ホテルインターナショナル泊〉
	B:全羅南道 順天市	8:00 13:40-15:40 16:40-17:30 17:30-21:30	ソウル出発 → 松広寺へ移動(順天市) 松広寺訪問 ホテル到着 ホームビジット 〈流心川スポーツ観光ホテル泊〉

8月31日(水)	A:慶尚南道 昌原市	08:40-12:10 13:30-15:30 17:20-21:20	進礼初等学校訪問 (ユネスコスクール) 金海粉青陶瓷館、クレアーーク金海美術館訪問 金首露王陵、国立金海博物館訪問 ホームビジット 〈ホテルインターナショナル泊〉
	B:全羅南道 順天市	08:50-10:10 10:30-13:30 14:30-17:00	順天教育支援庁、Wee センター訪問 順天女子高等学校訪問 (ユネスコスクール) 順天湾訪問 〈流心川スポーツ観光ホテル泊〉
9月1日(木)	A:慶尚南道 昌原市	10:20-11:20 10:40-11:40 11:40-12:30 12:40-15:40 16:00-18:00	慶尚南道教育庁訪問 慶尚南道教育研究情報院訪問 歓迎午餐会 安南中学校 訪問 グループプログラムレビュー会議 〈ホテルインターナショナル泊〉
	B:全羅南道 順天市	09:30-12:30 13:10-15:10 16:00-18:00 18:30	海龍初等学校訪問 樂安邑城 訪問 グループプログラムレビュー会議 歓送晚餐会 〈流心川スポーツ観光ホテル泊〉
9月2日(金)	慶州 釜山		〈慶州市へ移動〉 仏国寺を視察(ユネスコ世界遺産) 釜山到着、ホテルチェックイン 〈コモドホテル泊〉
9月3日(土)	釜山	9:20-12:00 12:00	報告会/閉会式 歓送昼食会 〈コモドホテル泊〉
9月4日(日)		08:40 10:50 11:00	釜山空港発、福岡空港へ (KE783、09:30 福岡着) 釜山空港発、成田空港へ (KE715、12:55 成田着) 釜山空港発、関西空港へ (KE731、12:25 関西着)

◆資料 3.

2010-2011年 韓国政府日本教職員招へいプログラム
参加者リスト

＜Aグループ＞

1. 参加教職員(24名)

団長	A-1	加藤 久雄	KATO Hisao	奈良教育大学（奈良県）	副学長
グループ長	A-2	森垣 薫	MORIGAKI Kaoru	与謝野町立加悦中学校（京都府）	校長
	A-3	藤田 篤志	FUJITA Atsushi	気仙沼市立気仙沼中学校（宮城県）	教諭
	A-4	原田 知佳	HARADA Chika	豊中市立上野小学校（大阪府）	教諭
	A-5	平澤 佑加子	HIRASAWA Yukako	八千代市立みどりが丘小学校（千葉県）	教諭
	A-6	星野 明人	HOSHINO Akihito	見附市立見附小学校（新潟県）	教諭
	A-7	伊藤 浩志	ITOU Kouji	気仙沼市立大谷中学校（宮城県）	教諭
	A-8	垣見 弘明	KAKIMI Hiroaki	奈良市立都南中学校（奈良県）	教諭
	A-9	兒玉 健司	KODAMA Kenji	八千代市立睦中学校（千葉県）	教諭
	A-10	倉前 光太郎	KURAMAE Kotaro	市川高等学校・中学校（千葉県）	教諭
	A-11	松尾 聡子	MATSUO Satoko	千葉県立千葉中学校（千葉県）	教諭
	A-12	本山 早苗	MOTOYAMA Sanae	恵泉女学園中学・高等学校（東京都）	副校長
	A-13	村上 美和	MURAKAMI Miwa	気仙沼市立水梨小学校（宮城県）	教諭
	A-14	中村 徳之	NAKAMURA Noriyuki	さいたま市立榎水小学校（埼玉県）	教頭
	A-15	野村 健太郎	NOMURA Kentaro	桜美林中学校・高等学校（東京都）	教諭
	A-16	大谷 清人	OTANI Kiyoto	岡山市立第二藤田小学校（岡山県）	教諭
	A-17	大越 里江子	OKOSHI Rieko	新宿区立江戸川小学校（東京都）	主任教諭
	A-18	大隈 賢	OKUMA Tadashi	学校法人 自由学園（東京都）	初等部教諭
	A-19	黄地 健男	OUCHI Takeo	江東区立八名川小学校（東京都）	主幹教諭
	A-20	須田 夏紀	SUDA Natsuki	横浜市立永田台小学校（神奈川県）	教諭
	A-21	辻倉 史子	TSUJIKURA Fumiko	奈良市立登美ヶ丘小学校（奈良県）	教諭
	A-22	山本 泰久	YAMAMOTO Yasuhisa	与謝野町教育委員会事務局教育推進課（京都府）	課長補佐
	A-24	大和 晃二	YAMATO Koji	福岡県立門司大翔館高校（福岡県）	教諭
	A-25	吉田 弥	YOSHIDA Wataru	金沢市立中央小学校（石川県）	教諭

2. 文部科学省同行(1名)

A-26	東 秀明	HIGASHI Hideaki	文部科学省	国際統括官付ユネスコ第3係 係長
------	------	-----------------	-------	------------------

3. 事務局(財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

A-27	島津 正数	SHIMAZU Masakazu	財団法人ユネスコ・アジア文化センター	事務局長
------	-------	------------------	--------------------	------

＜Bグループ＞

1. 参加教職員(25名)

グループ長	B-1	本多 成人	HONDA Narihito	市川市立稲越小学校（千葉県）	校長
	B-2	藤塚 正	FUJIZUKA Tadashi	多摩市立東愛宕中学校（東京都）	主幹教諭
	B-3	濱中 葉子	HAMANAKA Yoko	寝屋川市立第十中学校（大阪府）	教諭
	B-4	平元 舞	HIRAMOTO Mai	八千代市立西高津小学校（千葉県）	教諭
	B-5	稲垣 成光	INAGAKI Shigemitsu	与謝野町立三河内小学校（京都府）	校長
	B-6	石原 伸浩	ISHIHARA Nobuhiro	奈良市教育委員会 学校教育課（奈良県）	課長補佐
	B-7	石井 希和子	ISHII Kiwako	奈良市立富雄北幼稚園（奈良県）	教諭
	B-8	菊池 亨	KIKUCHI Toru	さいたま市立養護学校（埼玉県）	教諭
	B-9	木村 正太	KIMURA Shota	小笠原村立母島小中学校（東京都）	教諭
	B-10	近藤 麻里	KONDO Mari	江東区立東雲小学校（東京都）	教諭
	B-11	黒飛 雅樹	KUROTOBI Masaki	八千代市立萱田南小学校（千葉県）	教諭
	B-12	松本 和子	MATSUMOTO Kazuko	岡山市立第一藤田小学校（岡山県）	教諭
	B-13	松岡 清貴	MATSUOKA Kiyotaka	気仙沼市立新城小学校（宮城県）	教諭
	B-14	森内 直子	MORIUCHI Naoko	星美学園小学校（東京都）	校長
	B-15	長山 誠也	NAGAYAMA Seiya	奈良市平城西中学校（奈良県）	教諭（生活指導主事）
	B-16	小原 愛子	OBARA Aiko	千葉県立市川昂高等学校（千葉県）	教諭
	B-17	及川 篤史	OIKAWA Atsushi	立教新座中学校・高等学校（埼玉県）	職員
	B-18	岡保 史雄	OKAHO Fumio	与謝野町立加悦小学校（京都府）	教務主任
	B-19	桶谷 圭介	OKETANI Keisuke	長岡市立南中学校（新潟県）	教諭
	B-20	小野寺 龍哉	ONODERA Tatsuya	気仙沼市立九条小学校（宮城県）	教諭
	B-21	齋藤 武	SAITO Takeshi	福岡県立福岡講倫館高校（福岡県）	指導教諭
	B-22	島田 哲弥	SHIMADA Tetsuya	国際学院高等学校（埼玉県）	教諭
	B-23	鈴木 誠治	SUZUKI Seiji	白石市立小原中学校（宮城県）	教諭
	B-24	田中 正勝	TANAKA Masakatsu	日本大学豊山高等学校 日本大学豊山中学校（東京都）	高校第2年学年主任
	B-25	横山 豊治	YOKOYAMA Toyoharu	学校法人 清明学園 初等学校（東京都）	初等部長（教頭）

2. 文部科学省同行(1名)

B-26	相川 修二	AIKAWA Shuji	文部科学省	初等中等教育局特別支援教育課 係長
------	-------	--------------	-------	-------------------

3. 事務局(財団法人ユネスコ・アジア文化センター)(1名)

B-27	米島 百合子	YONESHIMA Yuriko	財団法人ユネスコ・アジア文化センター	人物交流課係員
------	--------	------------------	--------------------	---------

●国際連合大学 2010-2011 年国際教育交流事業●
韓国政府日本教職員招へいプログラム
実施報告書

2011 年 9 月
編集・発行

財団法人ユネスコ・アジア文化センター
[ACCU]

〒162-8484
東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館
電話 (03) 3269-4498
Email exchange@accu.or.jp
URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by Hokuetsu Printing Inc. [200]
©2011 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)